

Gender and Sexuality

Journal of the Center for Gender Studies, ICU

CGS

Center for Gender Studies
International Christian University
Tokyo.....Asia



- CGSは、教育研究棟 (ERB) 3階301にあります。開室時間は平日12～16時です(大学暦に準じた休業日や臨時閉室日があります)。
- 図書・映像資料は一部を除いて貸し出し可能です(要登録)。
- CGS is located in Room 301 on the 3rd floor of the ERB building. It is open from 12:00 to 16:00, Monday to Friday, except when the university is closed.
- We provide books and audio-visual materials related to Gender and Sexuality Studies.

目次

研究論文

「災害と女性」から「災害と多様性」へ
——女性支援と性的マイノリティの交差

内田賢 1

運動部活動における性や恋愛に関する
会話・言動を通じた体育教師の主体形成

三上純 25

あくまでも幻想として
——女性向けマンガの「年の差」恋愛ジャンルにみる
女性の欲望

五十嵐舞 51

2024年度 ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞受賞論文

2024年度ジェンダー・セクシュアリティ研究
レインボー賞受賞論文について

オリビエ・アムール＝マヤール
生駒夏美
森木美恵 77

日本人の性をタブー視する意識と
日本人元慰安婦に対する責任問題の関連性

佐々木心優 81

現代日本におけるモノセクシズム
——日本社会で暮らすバイセクシュアル女性への
聞き取り調査から

吉元咲 85



ジェンダー研究センター（CGS）2025年度イベント報告

Exploring Non-Normative Desires
in Art and Literature

コーディネーター: Anna TATTON 89

ジェンダー研究センター（CGS）2025年度活動報告 93

付記

執筆者紹介 105

CGS所員リスト 106

第22号投稿規程 109

編集後記 116

CONTENTS

Research Papers

From “Women and Disaster” to “Diversity and Disaster”:
The Intersection of Women’s support and Sexual Minorities
Suguru UCHIDA 1

Physical Education Teachers’ Subject Formation
through Conversations and Behaviors Related to Sexuality
and Romance in Athletic School Club Activities
Jun MIKAMI 25


A Fantasy: Age-Gap Romance of Women’s Manga
Mai IGARASHI 51

AY2024 Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies Recipient

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies
in AY 2024
Olivier AMMOUR-MAYEUR
Natsumi IKOMA
Yoshie MORIKI 77

The Relevance of Sexual Taboo Consciousness
in Japan to the Responsibility Issue
for Japanese Former Comfort Women
Miyu SASAKI 81

Monosexism in Japan
—Interview with Bi+ Women
Saki YOSHIMOTO 85



CGS Events Reports

Exploring Non-Normative Desires
in Art and Literature

Coordinator: Anna TATTON 89

AY 2025 CGS Activity Reports

93

Notes

Author Profile 105

Members of the Center for Gender Studies 106

Journal Regulations for Vol. 22 109

Postscript from the Editor 116

研究論文

「災害と女性」から「災害と多様性」へ ——女性支援と性的マイノリティの交差

内田賢

要旨

本稿は、東日本大震災後の被災地における女性団体の支援実践に注目し、「災害と女性」から「災害と多様性」へのフレーム転換がいかにして生じ、その過程で「性的マイノリティ」の視点がいかに位置づけられたのかを分析するものである。宮城県の女性団体「イコールネット仙台」は、震災直後より「災害と女性」を掲げ、男性中心の地域防災体制におけるジェンダー不平等に対抗する実践を展開してきた。しかし、2020年代に入ると、「災害と多様性」を掲げるようになり、その活動の射程を変化させている。とりわけ注目すべきは、同団体がこの新たなフレームのもとで、2015年の「仙台防災枠組」など主要な国際指針においては排除された性的マイノリティの被災経験をとり上げ、支援対象として包摂した点である。

こうした問題意識のもとに、筆者は2021年から2023年にかけて、同団体が主催した「多様な視点で取り組む防災力UP講座」への参与観察、団体スタッフへの半構造化インタビュー、ならびに配布資料・広報物などの資料分析を実施した。分析の結果、次の二点が明らかになった。第一に、同団体における「多様性」の導入は、制度的要請に応じた単なるスローガンの置き換えやマジョリティへの受容のみを意図した戦略にとどまるものではないことである。それは、震災以前から「女性」カテゴリー内部の差異や交差的な権力関係に着目してきた同団体の長年の実践の延長線上に位置づけられる展開であった。第二に、同団体は「多様性」という言説資源を用いることで、異性愛規範や家父長制を前提とした既存の防災体制（世帯単位の支援など）そのものを問い直そうとしていた点である。

以上の分析から、本稿は、被災地の女性団体が「多様性」という言説を批判的に再解釈することで、女性と性的マイノリティに共通する排除構造を可視化し、

ジェンダーとセクシュアリティを横断する連帯の可能性を拓いたことを提示する。

キーワード：

東日本大震災、ジェンダー、セクシュアリティ、多様性（ダイバーシティ）、交差性（インターセクショナルリティ）

1 はじめに

1-1 背景

2011年の東日本大震災は、日本の災害支援の現場にジェンダーの視点を導入する契機となった。特に被災地の女性団体は防災・支援体制が男性中心であることを問題化し、「災害と女性」というフレーム¹を掲げて「女性」を支援対象とする実践を展開してきた（浅野・天童編 2021）。しかし2010年代後半に入ると、「災害と女性」に代わって「災害と多様性」という言説が防災指針や支援実践で目立つようになっている。

「多様性」言説の流通には、2015年に宮城県仙台市で開催された第3回国連防災世界会議の影響が大きい。この会議で採択された「仙台防災枠組（Sendai Framework for Disaster Risk Reduction）」は、2030年までの国際的な防災政策の行動指針として「多様なステークホルダー」の包摂を基本原則の一つに据えた。そこでは「ジェンダー、年齢、障害の有無、文化的背景に配慮すること」が明記され、「多様性」は国際的な防災指針において主要な理念として位置づけられたのである。

しかし、ここでは社会的属性を列挙するにとどまり、それらの属性が交差するところで（インターセクショナルに）生み出される抑圧や差異への関心は見られない（スティー爾／キンバー 2019: 305-306）。また、草案では「多様性」の枠組みに「性的マイノリティ」への言及が見られたが、採択された最終版からは削除されたことも問題視されてきた（内田 2024a）。「ジェンダー」に関しても「女性の参画」が強調される一方で、ジェンダー不平等の構造的要因への批判的視点は

¹ 本稿は「フレーム」を、社会運動論の理論的議論を展開することを目的とするものではなく、女性団体支援実践において共有されてきた問題の捉え方や、それを提示する際の枠組みに着目するための用語として用いる。

十分に示されていない。

本稿は、国際的な防災枠組の限界を踏まえ、被災地の草の根女性団体が「災害と女性」から「災害と多様性」へとフレームを転換させた過程に注目する。そこで「女性」や「多様性」がどのように（再）意味づけされ、いかなる実践として展開されたかを明らかにする。とりわけ焦点化するの、仙台防災枠組から排除された「性的マイノリティ」である。というのも、本稿が注目した宮城県の草の根女性団体が「災害と多様性」という枠組みで性的マイノリティの包摂を試みたからである。国際的な枠組みがローカル化される過程で意味の読み替えが見られたことをどう考えればよいのか。本稿では、こうした問題意識から「多様性」言説の限界と可能性を、被災地における支援実践から捉え直すことを試みる。

1-2 先行研究

本稿が依拠する先行研究は大きく三つある。第一に、「フェミニスト災害研究 (Feminist Disaster Studies)」²である。この領域は、災害時に女性が被る暴力やケア労働の偏りを可視化し、女性を単なる保護対象ではなく、災害リスク軽減の主体として捉える視点を打ち出した (池田 2010; 内田 2024b)。英語圏では1990年代から、階級・人種・障害といった複数の抑圧の「交差性 (インターセクショナルリティ intersectionality)」が重視されてきた (Enarson & Morrow eds. 1998)。他方で、セクシュアリティの視点は置き去りにされ、「女性」はシスジェンダーでヘテロセクシュアルであることが自明視されてきた (Baumann et al. 2022)。たとえばD'Ooge (2008) は、アメリカの災害時の「女性支援」の枠組みがトランスジェンダー女性やレズビアン女性の困難を取りこぼしてきたことを明らかにした。これらの議論は、災害研究や支援の実践においてジェンダーとセクシュアリティの交差性を重視しなければならないことを示している。

第二に、「クィア災害研究 (Queer Disaster Studies)」研究である。この領域は、災害対応の制度や支援の枠組みが異性愛規範を前提としてきたことを批判的

² 英語圏では、フェミニズムの視点やアプローチから「災害とジェンダー研究 (disaster & gender studies)」という呼称が用いられてきたが、日本では「災害女性学」(浅野・天童編 2021)とする呼称も提唱されている。本稿では、英語圏と日本の先行研究に共通するフェミニズムのアプローチを強調するために「フェミニスト災害研究」という名称を用いる。

に論じる (Dominey-Howes et al. 2014)。日本を事例とした調査研究でも、避難所や復興過程における性的マイノリティの不可視化を指摘する声が聞かれつつある (性と人権ネットワーク ESTO・内田 2015; Yamashita et al. 2017)。こうした先行研究は、制度と支援の枠組みが生み出す排除構造や当事者の被災経験の可視化に貢献してきた一方で、当事者団体や当事者ネットワークを媒介とした把握に依拠する傾向が強い。しかし、日本では東日本大震災発生時に性的マイノリティの当事者や当事者団体も被災し、活動に制約が生まれたために、その支援は限定的な展開になったことが指摘されている (杉浦・前川 2022)。そうした状況では、性的マイノリティの運動に先行する女性団体やフェミニストの支援が重要な役割を果たしたといえる (内田 2024a)。

また、先行研究では、「女性」と「性的マイノリティ」が別個の問題として論じられているという限界がある。他方で、本稿が目指す事例は、女性団体による性的マイノリティへのアプローチであり、いわばフェミニズムとクィアが「多様性」言説によって接続されている事例と見ることができる。そこで、第三に着目するのが「多様性 (ダイバーシティ diversity)」言説に関する研究である。

経営学において提起された「多様性の包摂 (Diversity & Inclusion)」は、ジェンダー、セクシュアリティ、障害、年齢、人種・民族、階級、宗教といった多様なマイノリティ属性を持つ人々の社会的包摂を志向する言説であった (岩淵 2021)。しかし、こうしたアイデンティティ・カテゴリーの列挙による包摂は、一人の人間の一つの属性のみを前景化し、複数の権力が交差する位置にある複合的なマイノリティの存在や固有の経験を不可視化するという限界がある (Crenshaw 1989; Butler 1990=1999)。また、キンバリー・クレンショーが理論化した交差性 (intersectionality) という概念は、単に複合的なマイノリティの経験の理解を促すにとどまらず、多様な権力が交差して形成される社会構造を批判的に問い直すことを可能にする視点でもある (福永 2025: 395)。こうした議論を踏まえると、仙台防災枠組によるアイデンティティ・カテゴリーの列挙という形式が持つ限界が露わになる。

日本でも「多様性」言説は企業を中心に広がり、特に2010年代後半以降は「LGBTブーム」を背景に企業や自治体で導入されてきた (川坂 2015; 清水 2017)。しかしここでは「人権」や「権利」というよりも、企業によるブランディング

やマーケティング戦略としてのみ活用される問題点も指摘されている（新ヶ江 2021: 44-49）。

このような「多様性」言説の両義性に焦点を当てるのがイギリスのフェミニスト・クィア理論家のサラ・アーメッドである。アーメッドによれば、「多様性」とはもはや人種やジェンダーだけでなく、あらゆる意味が代入可能な「空っぽの入れ物（empty container）」である。しかしその空虚さは、それをを用いる実践者の側から内容を柔軟に再定義することができるという性質も持つ。こうして「多様性」は、社会的正義や構造的不平等の問題を提起すると同時に、マジョリティに受け入れ可能な有用な言説として戦略的に用いられることもある（Ahmed 2012: 75-80）。本稿ではアーメッドの議論を参照しつつ、「多様性」を単なる語彙としてではなく、アクティヴィストや実践者にとって戦略的に動員可能な言説の「資源」として捉えたい。

1-3 問い・方法と対象

本稿が目指すのは、宮城県仙台市で活動する草の根女性団体「イコールネット仙台」（NPO）の実践である。この団体は震災直後より「災害と女性」というフレームを掲げて女性に対する支援活動を展開してきたが、2020年代に入ると「災害と多様性」というフレームへと転換させるようになった。そこで本稿は、女性団体として展開を始めた運動が、性的マイノリティの経験に焦点を当てつつ、「災害と多様性」という枠組みを導入した過程に着目する。

本稿の問いは、次のとおりである。イコールネット仙台にとって「多様性」とは何を意味するのか。また「災害と女性」から「災害と多様性」へのフレーム転換は同団体の実践においてどのような意味を持ち、それはいかなる問題への介入を可能にしたのか。

上記の問いを検討するにあたり、筆者は2021年から2023年にかけてイコールネット仙台に対し社会学的質的調査を実施した。まず、同団体が2022年から2023年にかけて主催した「多様な視点で取り組む防災力UP講座」に、受講者およびスタッフとして参与観察を行った。次に、講座や支援実践における「多様性」言説の導入背景や意図について、団体スタッフへの半構造化インタビューを実施した。さらに、講座の設計資料や配布資料、実施記録、団体発行の広報誌な

どの文書に対して資料分析を行った。なお、各調査の詳細については適宜本文や脚注で補足する。

2 イコールネット仙台の支援実践の変遷

2-1 団体の概要と震災前の地域活動

本節ではイコールネット仙台の設立経緯および震災前の地域活動を論じる。

イコールネット仙台は、宮城県仙台市において1990年代から活動していた複数の女性団体（教育、健康、福祉、子育てなど）が合流して2003年に設立されたNPOである。設立以来「男女共同参画」を共通理念に掲げ、特定分野に限定されない幅広いテーマで女性の社会参画を推進してきた。重要なのは、同団体の成り立ちそのものが単一の 이슈に特化した団体をコンセプトにしたものではなく、異なる領域で活動してきた複数の団体の結集によって成立している点である。多様な活動背景を持つメンバーの混在は、設立当初から、女性が抱える困難を単一の要因に還元せず、複合的な要素から捉える視点を団体内部に育む土壌となった。

本稿が注目するのは、設立以来代表を務めてきた宗片恵美子氏と理事の内田有美氏（以下、2名の敬称略）の思想と実践である。宗片は1980年代から仙台市内で草の根の女性支援活動に携わっており、その経験と理念にもとづいて地域ネットワークの構築や行政との連携を継続的に試みてきた。一方、内田は2000年代後半より「性と人権ネットワークESTO」という団体³を通じて性的マイノリティ支援にも取り組み、東日本大震災時には性的マイノリティの被災経験に関する調査を実施している（性と人権ネットワークESTO・内田2015）。さらに内田は県内外の市民講座や学術シンポジウムでも積極的な情報発信に努め、震災以前から性的マイノリティ当事者とのネットワーク形成を重視していた。「女性」支援と「性的マイノリティ」支援という二つの運動領域に身を置く内田の視点が、ベテラン活動家の宗片の経験や実践と出会うことで、イコールネット仙台は震災以前から「女性」の中の多様な差異への関心を温めてきたといえる。

また、イコールネット仙台は2003年6月から2021年3月まで仙台市男女共同参

³ 性と人権ネットワークESTOは、1998年10月に秋田県で発足した性的マイノリティ団体で、主な活動拠点は秋田県、岩手県、宮城県である。

画センターの拠点施設において、市民活動スペースの管理運営を担っていた。このような行政との連携体制は、市民に開かれた公開講座の企画や調査研究、政策提言などのアドボカシー活動を可能にした。行政との連携という視点は、イコールネット仙台の「多様性」というフレームへの関心を喚起する一つの背景になったとも考えられる。なぜなら、先述のとおり、「多様性」言説はそもそも仙台防災枠組と、行政(や企業)主導の「LGBTブーム」と結びついていたと考えられるからである。

2-2 「災害と女性」からの出発

本節では、イコールネット仙台が東日本大震災以前から取り組んできた災害時の女性支援実践を検討する。

イコールネット仙台にとって災害はきわめて重要な活動領域であり、同団体は、災害時に女性が直面する困難の可視化とその解消、さらに女性のエンパワメントに取り組んできた。表1は、同団体の「災害と女性」に関する主な活動歴を整理したものである。この表からは、2008年から2020年代現在まで団体が継続的に災害に焦点を当ててきたことがわかる。

表1 イコールネット仙台の「災害と女性」に関する主な活動歴

年	活動歴
2008年	「災害時における女性のニーズ調査」実施
2009年	『災害時における女性のニーズ調査報告書』発行 「女性の視点からみる防災・災害復興対策に関する提言」発表
2011年	「東日本大震災に伴う『震災と女性』に関する調査」実施
2012年	『東日本大震災に伴う「震災と女性」に関する調査報告書』発行 「男女共同参画の視点からみる防災・災害復興対策に関する提言」発表
2013年	聞き取り集「40人の女性たちが語る東日本大震災」発行
2014年	聞き取り集 英訳版発行
2013～2015年	「女性のための防災リーダー養成講座」開催
2016年	聞き取り集「40人の女性たちが語る東日本大震災」： その後「今」、そして「これから」発行
2021年	「東日本大震災から10年を振り返る『震災と女性』に関する調査」実施
2022年～	「多様な視点で取り組む防災力UP講座」等開催

出所：イコールネット仙台リーフレットを参考に筆者作成

以下では、イコールネット仙台が東日本大震災以前からすでに性的マイノリティを包摂していたことを明らかにする。

注目したいのが、イコールネット仙台が2009年に公開した「女性の視点からみる防災・災害復興対策に関する提言」である。ここでは、「多様な女性のニーズ」という表現で、障害、年齢、疾病、妊産婦とともに「セクシュアルマイノリティ」への言及が見られた。この提言には、2008年に実施した「災害時における女性のニーズ調査」⁴の結果が反映されている。つまり、イコールネット仙台は東日本大震災以前の段階からすでに、災害時の脆弱性に多様な視点で対応しようとする萌芽を有していたということである。

東日本大震災発生後、イコールネット仙台は災害に焦点を当てた活動を活発に展開するが、その特徴を三点指摘したい。

第一に、震災直後から展開された避難所での女性支援活動である。たとえば、仙台市男女共同参画センターと連携して「洗濯代行ボランティア」を実施している。これは、避難所で生活する女性たちの洗濯を代行するだけでなく、避難所で多様な女性たちが直面する困難やニーズを聞き取る調査という意味合いも含む実践であった（宗片 2021）。

第二に、市民に開かれた防災講座の実施である。イコールネット仙台にとって防災講座は、地域の女性たちに主体性を発揮する場や機会、技術を提供し、それを通じて既存の防災体制の枠組みを変革するところに狙いがある。2013年から2015年には「女性のための防災リーダー養成講座」を開催し、計100名を超える「女性防災リーダー」を養成した。この講座は、女性たちが防災分野において知識や技術、自信を得る機会が極めて不足しているという問題意識から企画されたものであり⁵、男性中心的な防災体制の構造を問い直し、地域社会への女性の積極的な参与を促した。こうした取り組みは、第3回国連防災世界会議（2015年）で提唱された「女性の主体性」という目標とも呼応する重要な事例であった。

第三に、第一の点とも関連するが、多様な女性たちのニーズや実態を明らかに

⁴ 調査は、仙台市内の女性1,100人を対象としたアンケート調査と、宮城県北部連続地震（2003年）および岩手・宮城内陸地震（2008年）の体験者計8名に対するインタビュー調査によって構成された。

⁵ 2021年3月15日にエル・パーク仙台において宗方に実施した2時間程度の半構造化インタビューより。

する調査活動である。たとえば2011年9月と10月に宮城県内3,000人の女性を対象にアンケート調査「東日本大震災に伴う『震災と女性』に関する調査」を実施している。これは、東日本大震災に伴う女性たちの被災状況を検証し、多様な問題の解決に向けた提言を行うことを目的として実施された。調査の結果をもとにまとめられた「男女共同参画の視点からみる防災・災害復興対策に関する提言」(2012年)でも、ジェンダーだけでなく、人種・民族、障害、疾病、年齢、セクシュアリティといった多様な属性を考慮する必要性が強調されている。また、2012年の聞き取り調査「40人の女性たちが語る東日本大震災」では、障害のある女性やシングルマザーに加えて、トランスジェンダー女性の語りも収集され、「女性」カテゴリーが一枚岩でないこと、すなわち多様な女性たちの抱える困難が一様ではないことが指摘されている(イコールネット仙台2013a: 4-5)⁶。

2-3 多様な女性たちの経験への注目と支援の再編

本節では、前節で言及した聞き取り調査の分析を通じて、イコールネット仙台が「女性」カテゴリーの中の差異にいかに関心してきたのかを検討する。

2012年に実施された聞き取り調査「40人の女性たちが語る東日本大震災」において、特筆すべきは、この調査に2名のトランスジェンダー女性が「女性たち」というカテゴリーに含まれていた点である。1人目のトランスジェンダー女性は、震災後の生活において、性別適合手術後の身体ケアに不可欠である清潔な入浴環境が避難所で整備されていなかったことやホルモン剤の入手が困難であったことを強調している。さらに性別移行と彼女の年齢が就職活動において障壁となり、就労や経済的な困難も経験していた。

次に、2人目のトランスジェンダー女性は、「避難所で認められた」というポジティブな経験も語っている。彼女は「トランスジェンダー」であると同時に「女性」として、女性どうしの連帯やエンパワメントの感覚を避難所生活での経

⁶ 聞き取り集では、外国人家族を支援する女性が、実際の支援活動の中で、「外国人女性」が「外国人」であり女性であることの交差性に起因して特有の困難に直面したことを語っている。いわく、宮城県沿岸部には国際結婚で移住してきた女性が多く暮らすのが、彼女たちは言語による障壁から避難行動に遅れをきたしたり、震災後に減少した雇用機会は日本人優先であり外国人女性は後回しにされたりしたという(イコールネット仙台2013a: 106-110)。

験から得ることができたという。ただし、避難所生活では名簿に戸籍上の氏名を記入する必要性から、カミングアウトをなかば強要されたという困難についても言及している。

本稿にとって重要なのは、イコールネット仙台が、トランスジェンダー女性の経験を多様な「女性」の経験とみなし、みずからの活動の対象にしていた点である。宗片はこの点について、地域に暮らす多様なライフスタイルの女性の声を通じて類似する困難を把握しようとする試みであったと振り返っている⁷。また、トランスジェンダー女性が被災時にも「トランスジェンダー」であると同時に、「女性」でもあるという複合的な被差別状況を経験していたという点も重要である。この点は「フェミニスト災害研究」における「女性」を「ジェンダー」という単一的な権力・属性だけで考察することの限界を示唆している。

こうした調査活動を経て、イコールネット仙台は2012年に「災害と多様性」を掲げたイベント「震災は多様性をみとめたか：支援者が語るセクシュアルマイノリティ当事者が抱えた困難」を実施し、性的マイノリティの被災経験が「男女共同参画」に通じる課題として位置づけられることを主張している（イコールネット仙台 2013b）。さらに2017年には「多様な視点で『防災・減災』に取り組むために：支援のカタチを考える」というシンポジウムを開催し、障害者や外国人を含む多様なマイノリティとともに性的マイノリティへの支援の必要性を提示している（イコールネット仙台 2018）。

3 「多様性」言説との合流と支援枠組みの再構成

3-1 「多様な視点で取り組む防災力UP講座」の設計と実践

本節では、2022年から2023年にかけてイコールネット仙台が実施した「多様な視点で取り組む防災力UP講座」（以下、講座と表記）に焦点を当てる。これにより、「災害と女性」から「災害と多様性」へのフレーム転換の過程を明らかにする。

この講座は、2022年10月1日から2023年3月4日にかけて仙台市内の公共施設（第1回と第2回は仙台市男女共同参画センター会議室、第3回は仙台国際セン

⁷ 2023年7月25日に仙台市市民活動サポートセンターにおいて宗片に実施した2時間程度の半構造化インタビューより。

ター)で開催された。その目的は、告知チラシによると、「災害が被災者に与える影響は様々に異なるという問題意識のもと、多様性に配慮した支援の充実や一人一人が主体性を発揮できる環境整備」を市民に「考え」させることにあった。

講座は、イコールネット仙台と、職業・年齢・ジェンダーの異なる8名からなる「多様な視点で取り組む防災力UP講座プロジェクトチーム」(以下、「プロジェクトチーム」と表記)との共催で実施された。開催にあたり、イコールネット仙台がプロジェクトチームに協力を依頼したという経緯がある。これは、「女性」に焦点を当ててきたイコールネット仙台が支援活動の射程を、多様な背景を持つ市民との連携によって「多様性」により開かれたインクルーシブな支援へと拡張することを意図したものであった。

宗片によれば、イコールネット仙台は設立当初から「男女共同参画」を理念とする女性団体と連携を深めてきたものの、「ジェンダー」以外の課題については十分なアプローチができていないという認識を抱いていたという⁸。そこで、より幅広いイシューへのアプローチを可能にするため、プロジェクトチームへの共催依頼が行われた(イコールネット仙台2023)。この点と関連して、講座は行政主導ではなく、市民団体との協働が重視された。ここには、イコールネット仙台が制度的な枠組みから排除されるニーズを掬い上げるために、草の根のネットワーク形成に重きを置いていたことが確認できる。

講座は全3回開催された。第1回(2022年10月)では、女性、性的マイノリティ、障害児/者、外国籍住民の視点を導入するため、各分野の市民団体から講師が選出されて登壇した。パネリストには、性的マイノリティ支援団体の理事も兼ねる内田有美(第2章参照)も含まれた。第2回(同年11月)では、乳幼児、妊産婦、障害者、高齢者、外国人など、多様な「要支援者」を対象を当てた避難所設計ワークショップが行われた。第3回(2023年3月)は、次世代への防災意識の継承を目的として中学生のワークショップが実施された。

以下では本稿の関心に沿って、特に性的マイノリティが焦点化された第1回講座に注目し、「多様性」というフレームがどのように用いられていたかを検討する。

⁸ 同上。

3-2 「多様性」をめぐる実践

本節では、イコールネット仙台が「災害と多様性」というフレームを、どのような問題意識にもとづいて打ち出したのかを考察する。

結論からいえば、イコールネット仙台が「災害と女性」から「災害と多様性」へとフレームを転換させた背景には、「女性」というフレームの限界に直面したことが指摘できる。実際、宗片は「女性の視点」を前面に出すことにより、男性の関心が喚起できないことを問題視している。そこで、男性にもアプローチするために「多様な視点」を導入したと説明している。また、「多様性」というフレームの導入を「戦略的なもの」であるとも表現している⁹。すなわち、「私たちの中にあるのは女性の視点が軸」であるとしつつも、ジェンダー不平等の社会構造を変革するためには男性の関与が必要であるという認識から、男性へアプローチするための「戦略的」な資源としての「多様性」に注目したのである。

こうした「多様性」フレームの採用は、当時の社会潮流とも深く結びついている。2010年代以降、「よりそいホットライン」といった全国的な電話相談事業などを通じて女性団体と性的マイノリティ団体の連携が進み、複合的な困難へのアプローチが模索されるなど、支援現場における連帯の土壌はすでに醸成されつつあった（Yamashita et al. 2017）。加えて、本稿の冒頭でも確認した仙台防災枠組や「LGBTブーム」といった言説的な状況の変化も、この動きを後押ししたといえる。イコールネット仙台の実践は、この言説資源としての「多様性」をあえて動員することで、既存の「災害と女性」フレームでは届かなかった層、とりわけマジョリティ男性への回路を開き、同時に性的マイノリティ支援の実践的な潮流とも接続を図る「戦略的」な試みでもあったと解釈できる。

イコールネット仙台は、「多様性」というフレームで「女性」と「男性」といったジェンダーだけに焦点を当てるのでは不十分であるとも認識していた。そこで講座では「障害者」と「外国人」、そして「性的マイノリティ」が注目された。重要なのは、この講座の取り組みが単にそれぞれのマイノリティによる被災経験の差異を列挙するのではなく、多様なマイノリティの被災経験を浮き彫りにすることで、マイノリティを排除する地域社会の構造の全体像を明らかにするこ

⁹ 同上。

とを試みた点である。

また、「女性」というカテゴリー内の差異に焦点を当てたことも重要である。トランスジェンダー女性やレズビアン女性などの性的マイノリティ女性を取り上げることで、これまでイコールネット仙台が自明視してきた「女性」というカテゴリーの再編成が可能となり、結果として多様なアイデンティティ・カテゴリーを横断する交差的な視点が形成されたとまとめることができる。

「多様性」言説の導入によって、「災害と多様性」講座においては、仙台防災枠組の中で十分に扱われてこなかった性的マイノリティの被災経験が取り上げられるようになり、また、女性と性的マイノリティといったマイノリティ同士の困難の共通性が可視化された。共通性は、さらに障害者や外国人、性的マイノリティがともに地域ネットワークから周縁化されていることなども明らかにした。こうした実践を通じて、イコールネット仙台は、「災害と多様性」というフレームを、属性の差異を超えて被災経験を整理し、可視化するための視角として実践の中に組み入れていったと捉えられる。その際、講座の内容をマジョリティの理解に合わせて調整するのではなく、むしろ既存の災害対応の前提や政策枠組みの限界を問い直す方向で展開したのである。

3-3 「多様性」フレームによる実践の再編と連帯の可能性

それでは、「多様性」というフレームがもたらした視点とはいかなるものだったのか。以下では、性的マイノリティの被災経験の可視化、社会構造への新たな理解、そして地域への着目という三点について、それぞれ論じていきたい。

3-3-1 性的マイノリティの被災経験の可視化

第1回講座では、イコールネット仙台と性と人権ネットワーク ESTO の理事を兼任する内田が性的マイノリティの被災経験について講演をしている。

講演では、性的マイノリティが東日本大震災時に直面した困難として、主に五つの点（避難所や制度の問題、健康上のリスク、性暴力被害、生活再建のハードルの高さ、公的支援につながる難しさ）が言及された。こうした困難の指摘は、この講座で初めてなされたものではない。内田は、2017年にイコールネット仙台が開催した「災害と多様性」シンポジウムにおいても、同様に性的マイノリ

ティが直面する困難を報告している（イコールネット仙台 2018）。そこで内田は、これらの困難が「命を守る最低ラインで脅かされている現実」であり、その背景には「性の多様性に対する社会の理解不足」があると指摘していた。今回の講座でも同様に、「東日本大震災時、LGBTQ+は『いない人』」とみなされていたが、そのように『『だれか』が排除されている社会は誰にとっても安全ではないのでは」ないかと問題提起している。そして、この問題を一過性の「非常時の問題」としてではなく、平時から取り組むべき普遍的な「人権問題」として議論する必要性を強調した¹⁰。

重要な点として、内田は性的マイノリティの脆弱性を強調するだけでなく、主体性を兼ね備えた市民であると主張していたことが挙げられる。内田は実際に被災を経験したトランスジェンダー女性が避難所生活の中で主体的に活動していた様子を取り上げた。これによりマイノリティが単なる「弱者」にとどまるのではなく、地域社会の一員として主体性を発揮しうる存在であることも強調されていた。

3-3-2 社会構造への新たな理解

講座では、多様なマイノリティが災害時に経験する困難を取り上げ、マイノリティ間の差異を超えて共通する問題が見られることが指摘された。

第1回講座の質疑応答において、受講者から「性的マイノリティに必要な支援とは何か」と問われた際、内田は、避難所でプライバシーを確保した個別のシャワーやトイレを設置することは、性的マイノリティに限らず多様な人に便宜をもたらすと応答している¹¹。女性（トランスジェンダー女性）だけでなく、トランスジェンダー男性やノンバイナリーにとってもプライバシーの確保は必須の条件である。

そして「女性」と同性愛者に共通する構造的問題として、被害者支援の公的制度が男性を家長とする「世帯」を単位とすることで脆弱性が増すという点も指摘された。避難所をはじめ、災害時の公的な支援は、しばしば「世帯」「家族」単位で行われる。ここで想定される「世帯」「家族」とは、婚姻制度を根拠とした

¹⁰ 2022年10月1日に実施した大1回講座への参与観察より。

¹¹ 同上。

関係性であり、多くの場合、男性が「世帯主」として支援を直接的に享受することが想定されている。しかしながら、イコールネット仙台がこれまでの調査を通じて明らかにしてきたように、そのような枠組みでは、女性が男性に対して従属的な位置に置かれやすいこと、また、同性間でパートナーシップを形成している人たち（「世帯」を形成できない人たち）が支援から排除される問題がある（性と人権ネットワーク ESTO・内田 2015; 内田 2024b）。

こうした問題意識は、イコールネット仙台が2012年に実施した「災害と多様性」イベントでもすでにみられていた。このイベントでは、性的マイノリティの被災経験から浮かび上がる課題が「男女共同参画にも通じる」ものであることが強調されたという（イコールネット仙台 2013b）。

こうして「多様性」というフレームに焦点を当てることで、性的マイノリティの被災経験の可視化と、多様なマイノリティどうしが共通して経験する脆弱性が明らかになったのである。また、イコールネット仙台は、性的マイノリティの経験をジェンダー平等との接点から捉え直し、その際に「多様性」という言説を一つの資源として用いてきたといえる。つまり、今回の講座において、既存の「家族」を基準とする支援体制への批判があらためて提示され、女性と性的マイノリティに共通する課題が論じられたことは、ジェンダーとセクシュアリティの問題に長期にわたり取り組んできたイコールネット仙台の活動と連続する実践として位置づけられる。

3-3-3 地域への注目

講座全体を通じて強調されたのは、共通して周縁化を経験しているからこそ、多様なマイノリティが地域社会で連携を形成することの必要性であった。第1回講座では、障害者、外国人、性的マイノリティの視点から、災害時に直面する困難はそれぞれの属性に固有のものもあれば、共通する経験や交差性によって複雑化する脆弱性があることも指摘された。そして、これらの問題に取り組むためには、多様なマイノリティが地域で連携しながら、防災枠組みを再構成することが重要であると提唱された。特に内田は、性的マイノリティがそもそも地域社会でカミングアウトすることの難しさが、被災後の支援の不足や生活再建の困難につながりうることを指摘した。質疑応答では、ある受講者（民生委員）から内田に

対して、「(性的マイノリティら) 災害時要援護者や障害者の名簿登録を進めたいが、個人情報保護との兼ね合いが難しい」とする発言があった。これについて、内田は、性的マイノリティは地域社会で不可視化されていると応答し、災害時だけでなく社会構造を抜本的に変革しなければならないことを強調した¹²。

イコールネット仙台は、2017年の「災害と多様性」単発シンポジウムでも、地域に暮らす障害者、外国人、性的マイノリティといったマイノリティの包摂の課題を取り上げていた(イコールネット仙台 2018)。同シンポジウムは、「震災から6年が経過し、震災の風化が危惧される中」で開催され、「多様な人々の被災経験と、その支援のあり方を今後につなげる」ことを目的としていた。震災の「風化」に抗する試みとして「多様性」を言説資源として用いてきた点は、2022年からの講座と連続性をもって位置づけられる。

ここまでの議論を整理すると、イコールネット仙台が性的マイノリティの被災経験に関心を向けてきた背景には、次の三つの要素があると考えられる。

第一に、宗片恵美子と内田有美という団体の中心メンバー2名の思想的・経験的背景である。両者は、多様な女性が地域に暮らしていることを出発点とし、「女性」を一枚岩として捉えず、災害時における女性の経験が一樣でないという認識を共有してきた。この視点は、聞き取り集の発行や「女性防災リーダー養成講座」の実践にも反映されている。

第二に、「災害と女性」に関する支援・調査活動を通じて、「女性」というカテゴリーの中にトランスジェンダー女性が含まれてきた事実である。2012年の聞き取り調査では、トランスジェンダー女性2名の被災経験が取り上げられており、これは行政への政策提言、地域ネットワーク構築、女性支援の実践的蓄積の延長線上で位置づけられる。こうした継続的实践が、震災直後からの避難所支援を通じて多様な女性の経験との「遭遇」をもたらし、その後の調査や支援を促す基盤となった。このような団体の性質が、トランスジェンダー女性を含む地域の性的マイノリティへのアプローチを後押ししてきたといえる。

第三に、女性と性的マイノリティが直面する問題の共通性に関する視座である。たとえば、内田が講座で指摘した既存の「家族」を基準とした災害支援体制

¹² 同上。

への批判は、(シスジェンダーでヘテロセクシュアルの) 男性を特権的な立場におく家父長制への批判でもあった。婚姻関係を前提とした「世帯」「家族」単位への支援は、男性への従属を強いる構造において女性に、そして同性カップルへの支援を制限する点で性的マイノリティに、それぞれ抑圧的に作用する。このような支援体制への問い直しは、女性と性的マイノリティが排除される共通の構造を明示するものである。

すなわち、イコールネット仙台にとって「多様性」とは、単なるスローガンではなく、こうした家父長制的な排除構造に対抗し、ジェンダーとセクシュアリティを横断する連帯の可能性を拓くための、実践的な言説資源として機能していたといえる。

4 結論

本稿は、東日本大震災後の宮城県において、「災害と女性」を掲げてきた草の根女性団体イコールネット仙台が、いかにして「災害と多様性」という枠組みを導入し、それによりどのようなアプローチが可能になったかを検討した。

イコールネット仙台にとって「多様性」とは次の二つの意味を持つフレームであることが明らかになった。第一に、「女性」だけでなく、「性的マイノリティ」「外国人」「障害者」といった「多様なマイノリティ」の包摂という意味である。第二に、これらのアイデンティティ・カテゴリーを単に列挙することにとどまらず、単一のカテゴリー内の差異への注目や複数のカテゴリーを横断する交差的な権力に注意を向ける枠組みとしての意味も持った。

注目すべきは、イコールネット仙台が早くから「女性」カテゴリー内の多様な差異に関心を寄せていた点である。実際、イコールネット仙台は震災以前から様々な聞き取り調査やアンケート調査などを通じて、地域に暮らす多様な女性たちの経験に注目していた。中でも、障害のある女性や高齢女性やシングルマザーだけでなく、トランスジェンダー女性にも震災以前からアプローチしていた点は重要である。第3章で検討した「多様な視点で取り組む防災力UP講座」は、こうした長年の取り組みの延長線上に位置づけられるものであったといえる。

イコールネット仙台が多様な女性の経験に関心を寄せたもう一つの背景として、同団体が複数の女性団体が合併して形成された経緯を持つこと、さらに中心

メンバーの思想や経験も影響を持ったことを第2章で指摘した。さらに、2010年代以降の「LGBTブーム」とともに「多様性」という言説が社会的に広がりを見せた点にも言及した。

先述したように、イコールネット仙台にとって「多様性」というフレームは、単なるアイデンティティ・カテゴリーの列挙ではなかった。そうではなく、同団体は「多様性」というフレームを用いることで、異なるマイノリティに共通して経験される問題を浮き彫りにし、マイノリティを排除してきた社会構造を明らかにすることに取り組んだのである。第3章で論じたように、講座では婚姻制度にもとづく「世帯」や「家族」を前提とした被災者支援の枠組みが、いかに多様なマイノリティを排除してきたかという問題が指摘された。こうした視点は、これまで「フェミニスト災害研究」と「クィア災害研究」のそれぞれの領域で別個に論じられてきた問題系を、現場実践の中で接続し直す試みであると捉えることもできるだろう。

第1章で見たように、「多様性」という言説は空疎なスローガンであるが、しかしそうであるがゆえにアクティヴィストや実践者がそれを「戦略的」に使用しうる余地が常にあるとアーメッドは指摘した (Ahmed 2012)。仙台防災枠組は「多様性」を打ち出した方針の中で、「ジェンダー」「年齢」「障害」「人種」を列挙しマイノリティの包摂を掲げつつも、「性的マイノリティ」を排除してしまった。一方でイコールネット仙台は、仙台防災枠組を参照しつつも、被災地のローカルな文脈の中で「多様性」を再解釈する過程で、「性的マイノリティ」を包摂しつつ、アイデンティティ・カテゴリーの自明性を問い直す視点を導入することに成功した。これは「多様性」が厳密に定義された概念ではなく、「空っぽの入れ物」(Ahmed 2012) であるがゆえに、可能にした事例であるともいえるだろう。

もっとも、本稿には限界もある。本稿は分析対象をイコールネット仙台という単一の女性団体に絞り、その中でも特にジェンダーとセクシュアリティに関わる実践に焦点をあてたため、同団体が継続的に取り組んできた障害のある女性や高齢女性、外国籍女性、シングルマザーといった多様なマイノリティ女性の経験については十分に扱うことができなかった。今後もジェンダーとセクシュアリティの交差性を重視しつつ、より多様な属性や権力関係を包摂した議論を展開してい

きたい。また、国内のマクロな政策や制度との接続、他地域の事例にも視点を広げることで、「災害と多様性」という枠組みの可能性や限界への考察をさらに進めていきたい。

謝辞

本研究の一部は国際ジェンダー学会2023年度研究活動奨励賞の助成を受けて実施したものであり、2024年に一橋大学社会学研究科に提出した修士論文をもとに、日本社会学会2025年大会の報告資料を日本科学協会笹川科学研究助成のもと大幅に加筆修正したものである。また、2名の査読者、故・田中由美子氏、福永玄弥氏よりいただいた貴重なコメントに記してお礼申し上げる。そして、調査にご協力くださったイコールネット仙台の皆さまに深く感謝申し上げます。

References

- Ahmed, S., 2012, *On Being Included: Racism and Diversity in Institutional Life*, Duke University Press.
- 浅野富美枝・天童睦子編, 2021, 『災害女性学をつくる』生活思想社.
- Baumann, L., Sharan, A., and Gaillard, J., 2022, "Queering "Gender and Disaster" for Inclusive Disaster Risk Reduction," *Oxford Research Encyclopedia of Natural Hazard Science*, Oxford University Press.
- Butler, J., 1990, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*, Routledge. (竹村和子訳, 1999, 『ジェンダー・トラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.)
- Crenshaw, K., 1989, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 140: 139-167.
- Dominey-Howes, D., Gorman-Murray, A., and McKinnon, S., 2014, "Queering disasters: On the need to account for LGBTI experiences in natural disaster contexts," *Gender, Place & Culture*, 21(7): 905-918.
- D'Ooge, C., 2008, "Queer Katrina: Gender and sexual orientation matters in the aftermath of the disaster," B. Willinger ed., *Katrina and the women of New Orleans*, Newcomb College Center for Research on Women, Tulane University, 22-24.
- Enarson, E., and B. H. Morrow eds., 1998, *The Gendered Terrain of Disaster: Through Women's Eyes*, Praeger.
- 福永玄弥, 2025, 『性／生をめぐる闘争——台湾と韓国における性的マイノリティの運動と政治』明石書店.
- 池田恵子, 2010, 「ジェンダーの視点を取り込んだ災害脆弱性の分析——バングラデシュの事例から」『静岡大学教育学部研究報告(人文・社会・自然科学篇)』60: 1-16.
- イコールネット仙台, 2013a, 『40人の女性たちが語る東日本大震災』.
- イコールネット仙台, 2013b, 『イコールネット通信』22.
- イコールネット仙台, 2018, 『イコールネット通信』28.
- イコールネット仙台, 2023, 『イコールネット通信』34.
- 岩渕功一, 2021, 「多様性との対話」岩渕功一編, 『多様性との対話——ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社, 11-35.
- 川坂和義, 2015, 「『人権』か『特権』か『恩恵』か? ——日本におけるLGBTの権利」『現代思想』43(16): 86-95.
- 宗片恵美子, 2021, 「東日本大震災・宮城県の女性被災者支援と地域防災の取り組み」浅野富美枝・天童睦子編, 『災害女性学をつくる』生活思想社, 49-64.
- 性と人権ネットワークESTO・内田有美, 2015, 『東日本大震災におけるセクシュアルマイノリティ当事者の被災状況およびニーズ・課題に関する調査』.
- 清水晶子, 2017, 「ダイバーシティから権利保障へ——トランプ以降の米国と『LGBTブーム』の日本」『世界』895: 134-143.
- 新ヶ江章友, 2021, 「ダイバーシティ推進とLGBT/SOGIのゆくえ——市場化される社会運動」岩渕功一編, 『多様性との対話——ダイバーシティ推進が見えなくするもの』青弓社, 36-58.

- ステイール若希／レア・R・キンバー, 2019, 「女性のアドボカシー活動と提言——仙台防災枠組をめぐる国際連携」東大社研・玄田有史・飯田高編, 『危機対応の社会科学〈下〉——未来への手応え』東京大学出版会, 273-317.
- 杉浦郁子・前川直哉, 2022, 『「地方」と性的マイノリティ——東北6県のインタビューから』青弓社.
- 内田賢, 2024a, 「ポスト3・11の日本における『災害と多様性』再考——宮城県の草の根女性団体の事例から」一橋大学大学院社会学研究科2023年度修士論文.
- 内田賢, 2024b, 「災害とダイバーシティ——マイノリティへの支援は『ぜいたく』なのか」『世界』980: 91-96.
- Yamashita, A., Gomez, C., and Dombroski, K., 2017, “Segregation, Exclusion and LGBT people in disaster impacted areas: experiences from the Higashinohon Dai-Shinsai (Great East-Japan Disaster),” *Gender, Place & Culture*, 24(1): 64-71.

Abstract

From “Women and Disaster” to “Diversity and Disaster”: The Intersection of Women’s support and Sexual Minorities

Suguru UCHIDA

This paper examines the discursive shift from “women and disaster” to “diversity and disaster” in the post-3.11 context, focusing on the support practices of a women’s organization in the disaster-affected areas of Japan. Specifically, it analyzes how this shift occurred and how the perspective of “sexual minorities” was situated within this process.

Equal Net Sendai, a women’s organization in Miyagi Prefecture, has centered its activities on the frame of “women and disaster” since the immediate aftermath of the Great East Japan Earthquake, deploying practices to challenge gender inequality in male-dominated regional disaster management systems. However, entering the 2020s, the organization adopted the slogan of “diversity and disaster,” thereby shifting the scope of its activities. Notably, under this new framework, the organization actively addressed the disaster experiences of sexual minorities—a group often excluded from key international guidelines such as the 2015 “Sendai Framework for Disaster Risk Reduction,” which lists attributes like gender and age but lacks an intersectional perspective—and included them as targets for support.

Based on this research focus, I conducted participant observation of the “Building Disaster Preparedness through Diverse Perspectives” seminar series organized by the group between 2021 and 2023, alongside semi-structured interviews with staff members and document analysis of distributed materials and public relations documents.

The analysis revealed two primary findings. First, the introduction of “diversity” by the organization was not merely a passive substitution of slogans in response to institutional demands, nor was it a strategy intended

solely to appeal to the majority. Rather, it was a development situated as an extension of the organization's long-standing practice of attending to differences within the category of "women" and intersectional power relations since before the disaster. For instance, the organization had already captured the voices of transgender women in their post-disaster surveys, recognizing the complexity of their vulnerability.

Second, by utilizing "diversity" as a discursive resource, the organization sought to question the very premises of the existing disaster management system, particularly the "household-based support" model. This model, predicated on heteronormativity and patriarchy, assumes a male head of household, thereby systematically marginalizing both women and sexual minorities who do not fit this norm. By highlighting this shared structural exclusion, the organization constructed a logic that enabled solidarity between feminist movements and sexual minority rights movements.

Based on this analysis, this paper argues that the women's organization in the disaster-affected area critically reinterpreted the discourse of "diversity" not as an "empty container" for depoliticization, but as a political tool. By visualizing the structure of exclusion shared by both women and sexual minorities, they opened up possibilities for solidarity across gender and sexuality, bridging the gap between feminist and queer disaster studies.

Keywords:

Great East Japan Earthquake, gender, sexuality, diversity, intersectionality

研究論文

運動部活動における性や恋愛に関する 会話・言動を通じた体育教師の主体形成

三上純

要旨

先行研究では、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産について、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動の機能的側面に着目した議論が行われている。しかし考察の中心は男性集団にあり、そこで生きる人の心的な生には十分に目が向けられていない。また、そうした体育教師の再生産への抵抗の可能性は十分に論じられていない。本研究では運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を体育教師の主体形成における重要な実践と捉え、女性の経験やそこで生きる人の心的な生を視野に入れてその実態を分析する。その上で、ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成と、その再生産への抵抗の可能性について論じることを目的とする。分析の対象は、中学校・高校で運動部に所属した経験のある18名である。バトラーの主体化＝服従化の理論、セジュウィックのホモソーシャルリティとそれに関する堀江の解釈を分析枠組みとした。分析の結果、男性集団ではミソジニーとホモフォビアが「ジョーク」によって作動しており、それは「傷つく人はいない」という前提のもとで行われていた。また、女性集団の会話・言動には、性的に客体化される女性の位置や、それゆえにレズビアンが抹消される状況が影響している。そして、体育教師として生徒が行う「ジョーク」に対応する方法として、協力者は自身が服従してきた規範に従った方法を想定していた。これは、運動部活動を通じたジェンダー規範への服従が体育教師の主体形成と関連することを示している。しかし同時に、運動部内での「ジョーク」は「傷つき」や「抵抗感」を生み出している。それは、運動部活動を通じた「良心的」な体育教師の主体形成に疑問を付すものである。さらに、そこで心的な「傷つき」を抱えた人が、「ジョーク」の問題性を伝える体育教師になっていく可能性も見出された。ここに抵抗の可能性が開かれていると考えられる。

キーワード：

心的な生、主体化=服従化、ミソジニー、ホモフォビア、ホモソーシャリティ

1 問題設定

本稿は、中学校・高校で所属した運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動の分析を通じて、体育教師の主体形成について論じるものである。

先行研究では、ジェンダー規範を身体化した体育教師の問題が検討されてきた。例えば、体育教師は男・女のカテゴリーによる生徒の把握を当然視していること（井谷 et al., 2006）や、男女共習への考え方が性別二元制に基づいていること（加藤 & 佐藤, 2023）が指摘されている。また、体育専攻学生のうち、特に男性のホモフォビアが強いこと（O'Brien et al., 2013; 三上 & 井谷, 2018）や、体育教師がホモフォビックな言動に介入しない状況（Morrow & Gill, 2003）も示されている。

ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成を考えるためには、次のような「体育教師の社会化」研究の知見が重要である。そこでは、体育教師教育への参入には運動部活動を通じたスポーツ経験が強く影響し（Dodds et al., 1991; 朝倉 & 清水, 2011）、スポーツで培われた価値観や信念が体育に反映されること（Hutchinson, 1993）、教師教育参入以前に形成された価値観や信念は教師教育では変容しがたいこと（Doolittle et al., 1993; 朝倉, 2016）が指摘されている。このように体育教師の身体性は運動部活動経験を通じて形成される（坂本, 2013）。ゆえに、ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成も運動部活動経験に着目した検討が必要である。

三上は一連の研究により、この点を検討している。三上（2020）は、体育専攻学生にインタビューを行い、特に男性運動部集団において、指導者―生徒間や仲間同士でのホモフォビックな「ジョーク」を通じてホモソーシャリティが構築されており、その文化になじみ従うことで体育教師への社会化の道が選択されると指摘する。続く研究では、この指摘がミソジニスティック／ホモフォビックな会話・言動に着目した統計分析により検討されている。その結果、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動の多寡が、男性=性的主体／女性=性的客体とみなす態度や男性同性愛への嫌悪と正の関連を示す（三上, 2022）と同時に、運

運動部顧問志望を経由して間接的に体育教師志望に通ずること（三上, 2023）が示されている。

このように先行研究は、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を通じたジェンダー規範の身体化が体育教師の主体形成の問題として捉えられることを示してきた。しかし、考察の中心は男性集団にあり、ホモソーシャルリティの構築が女性の経験といかに関係するのかが明らかではない。また、そうした会話・言動の機能的側面は分析されてきたが、そこで生きる人の心的な生には十分な関心が払われてこなかった。さらに、議論の焦点はジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産に集中し、それへの抵抗の可能性は十分に論じられていない。

本研究では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を体育教師の主体形成における重要な実践と捉え、女性の経験やそこで生きる人の心的な生を視野に入れてその実態を分析する。その上で、先行研究の知見を踏まえつつ、ジェンダー規範を身体化した体育教師の主体形成と、その再生産への抵抗の可能性について論じることを目的とする。

2 理論枠組み

2-1 主体形成について

本稿ではButler（1997/2019）に依拠して体育教師の主体形成を捉える。Althusser（1995/2005）を参照しながら、Butler（1997/2019）は、主体は法による呼びかけに振り向くことで生まれるのだと述べる。つまり主体は「振り向き」の前には存在せず、法の権威を取り込むことによってのみ主体となる。したがって、法への服従は主体が存在する条件そのものである。

この主体化=服従化は「良心」の形成を伴う。良心とは「主体を自分自身にとっての対象とし、自分自身について省察し、自分自身を省察的・反省的なものとして確立する手段である」（p.33）。そして、良心の形成は「正しい」ノウハウ=技能の習得とともに遂行される。「職務を「良心的に」遂行することは、それらを言わば繰り返し遂行すること、これらの技能を再生産することであり、それらを再生産することで支配=習得を獲得することである」（p.150）。つまり、このような一連の技能の習得は、規範を身体化することでもある。この過程において主体化=服従化はより完全なものになり、良心が強化されるのである。

しかし Butler (1997/2019) によれば、「規範は、心的なものであるとき、単に社会的権力を再任するだけではなく、極めて固有の仕方、形成的かつ可傷的なものとなる」(p.32)。規範は、反復的行為によってのみ規範となるが、それによって主体の心的な生が統制し尽くされることはない。つまり、心的な主体化=服従化は、その主体の存在を可能にした規範の範囲と一致しない。この偶発的な「ずれ」から、規範への抵抗を可能にする「行為能力」が生じる。そのため、規範への抵抗を考えるためには、第三者に観察可能な形で外的に表出された行為だけでなく、主体が個人的に営む心的な生に目を向けなければならない。この観点からすれば、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動について心的な生を視野に入れて分析することは、その主体化=服従化を通じた体育教師の再生産への抵抗について論じることにつながるのである。

2-2 ホモソーシャリティと「ジョーク」について

性や恋愛に関する会話・言動の分析には、Sedgwick (1985/2001) によるホモソーシャリティ概念を用いる。ホモソーシャリティは、男一男一女の三角形を基本図式とし、「女の交換」によって結ばれる男同士の絆を意味する。それは社会形態の骨格をなし、女性を排除するよう見える男同士の絆にも女性是否応なく組み込まれる。本稿では、男同士の絆を強固にするために、女性を性的に客体化し、象徴的な財とみなすメカニズムとしてミソジニーを捉える。

Sedgwick (1985/2001) によれば、男同士のホモソーシャルな絆とホモセクシュアルな絆は「潜在的に切れ目のない連続体を形成している」(p.2)。しかし17世紀後半以降、この連続体はホモフォビアによって切断されていった。ホモフォビアとは単なる嫌悪感情ではなく、「特定の弾圧を少数派に加えることによって、多数派の行動を統制するメカニズムである」(p.134)。本稿では、ホモセクシュアルな絆だとみなされるものへの攻撃によってすべての男同士の絆を統制し、ホモソーシャリティを構築する主体となるよう水路づけるメカニズムとしてホモフォビアを捉える。

この枠組みの中で女性の経験を考えるためには、男性のホモソーシャル連続体が断絶しているのに対し、女性の場合は連続体を成しているという Sedgwick (1985/2001) の指摘が重要になる。堀江 (2015) は、この差異を「レズビアン

不可視化」という観点から整理する。ホモソーシャルリティは「交換する男」と「交換される女」という権力関係を前提とするため、女性同士の関係において男性は媒介項の機能を果たさない。そして、ホモソーシャルリティによって維持される「異性愛主義は、女に対して、男と結びつくことによってしか〈生〉を成り立たせることができないという土壌を生み出す。それは、レズビアンを不可視化し、抹消する機能を果たす」(p.148)。本稿では、同性同士の絆の差異という観点から、女性の経験を含めた分析を行う。

本稿では、ミソジニーとホモフォビアを作動させる会話・言動として「ジョーク」や「からかい」に注目する。江原(2021)によれば、「からかい」は伝聞や自明の事実のように語られることで匿名性、普遍性、自明性を帯びる。それは通常、見知らぬ他者には向けられない、親密性を確認させるものである。しかし強者から劣者への「からかい」は、攻撃の意図を隠すことで社会的な非難を避ける効果をもつ。「からかい」への抗議は「それ自体が敵対関係の表明」(p.254)と解されてしまうため、抗議の意思をもつこと自体が難しい。ゆえに「ジョーク」や「からかい」は、抗議の声を封じながら主体化＝服従化を安定させる実践として捉えられるのである。

3 研究方法

本稿では、2022年4～9月に実施したインタビュー調査のデータを使用する。協力者は、2021年2～7月に実施したアンケート調査で任意のアドレス記入欄に回答があった人への連絡と、その人たちを起点としたスノーボールサンプリングにより募集した。本調査は大阪大学大学院人間科学研究科教育学系の倫理審査を受けて実施した(承認番号:20029)。

インタビューは、教員志望のプロセス、中学校・高校で所属した部・クラブの状況、印象に残っている指導者、部・クラブ活動における性や恋愛に関する指導者の言動と仲間同士のコミュニケーション、学校生活における性や恋愛に関する教師の言動と生徒同士のコミュニケーションなどについて、アンケートへの回答を確認・深掘りする形で行った。終了後に文字起こしデータを送付し、事実と異

Table 1 分析対象者

実施日	名前 (仮名)	出生時に割り当てられた性別	性自認	性的指向	インタビュースタッフの立場	インタビュースタッフの志望・検討教科	中学校の部・クラブ所属	高校の部・クラブ所属	体育教師を志望した経験
5/1	結城	男性	男性	相手の性別は問わない	大学院生	保健体育	陸上競技	陸上競技	あり
5/12	佐藤	男性	男性	女性	学部生	保健体育	陸上競技	陸上競技	あり
5/13	畠	男性	男性	女性	大学院生	国語	ソフトテニス	ソフトテニス	なし
5/15	佐藤守	男性	男性	両性	学部生	教員志望なし	陸上競技	硬式テニス	なし
5/24	まさ	男性	男性	女性	大学院生	小学校	軟式野球	陸上競技	あり
6/4	はち	男性	男性	女性	(現) 小学校教員		陸上競技	陸上競技	あり
6/5	岩本圭	女性	ノンバイナリー	特定の人を好きにならない	学部生	教員志望なし	水泳	水泳 (マナージャー)	なし
6/12	山田	女性	Xジェンダー	相手の性別は問わない	(現) 小学校教員		陸上競技	陸上競技	なし
6/24	鈴木	女性	Xジェンダー	男性	学部生	社会	バスケットボール	ウェイトリフティング	なし
7/12	L	女性	Xジェンダー	相手の性別は問わない	(現) 非教職		バスケットボール	サッカー	あり
7/16	田中咲	女性	女性	男性	学部生	小学校	軟式テニス	硬式テニス	あり
8/22	今井	男性	男性	女性	大学院生	保健体育	硬式野球(学外)	硬式野球	あり
8/23	高橋	男性	男性	女性	(現) 高校保健体育教員	硬式野球(学外)	硬式野球(学外)	硬式野球	あり
8/23	中村	男性	男性	女性	学部生	保健体育	軟式野球(学外)	新体操	あり
8/28	小林	男性	男性	女性	大学院生	保健体育	水球(学外)	水球	あり
8/29	平野	女性	女性	男性	学部生	保健体育	バスケットボール	バスケットボール	あり
8/31	山本	女性	女性	男性	学部生	保健体育	バスケットボール	バスケットボール	あり
9/27	渡辺	男性	男性	女性	学部生	保健体育	バスケットボール	バスケットボール	あり

Note. 性については、事前アンケートへの回答についてインタビュー時に確認した上で記載している。

なる点や修正・オフレコにしたい箇所の確認と仮名の決定を依頼した¹。

分析にはRiessman (2008/2014) によるナラティブ研究法のうち、テーマ分析を用いた。まず、仮名の決定までを終えた19名の語りを熟読し、各協力者のストーリーの特徴を把握した。次に、語りの文脈に留意しつつ、先行研究の知見を念頭に置いてコーディングを行った。類似するコードが複数生成された場合、それらをまとめる上位コードを設定した。その結果、①進路選択・教員志望、②部・クラブ活動経験、③性や恋愛に関する経験、④教員養成段階での経験、⑤保健体育・部活動への認識、⑥教員イメージ、⑦性の多様性について、⑧教員としての経験、を上位コードとするコーディングツリーが作成された。

その後、中学校・高校で運動部に所属した経験のない1名を除く、運動部経験者18名を分析対象とした (Table 1)。コード③に焦点化して具体的な語りに立ち返り、③と密接に関連する他のコードにも目を配りながら分析を進めた。その際、筆者の解釈と矛盾するコードがないかも確認した。なお、分析対象には体育教師・教員志望でない人も含まれる。性や恋愛に関する会話・言動を通じたホモソーシャルな文化への順応が体育教師の主体形成と関連することから、対象者を限定しないことで、その文化に順応しない人の経験も視野に入れるためである。本稿で引用する事例は、特に断りが無い限り、同じ運動部に所属する部員同士での会話・言動である²。

語りの引用に際しては、協力者の匿名性と可読性を確保するため、意味が変わらない範囲で文章を修正する。必要な補足は [] で、中略は […] で表す。

4 性や恋愛に関する会話とミソジニー

4-1 男性集団におけるミソジニスティックな会話とホモソーシャルリティの構築

運動部活動における性や恋愛に関する会話として、女性・男性集団³ いずれに

¹ 仮名には姓のみ、姓名、アルファベットのみなどの表記が混在しているが、本稿では希望された仮名をそのまま使用する。姓名が含まれる仮名は初出時のみフルネームで記載し、以降は姓のみを記す。ただし「佐藤」という姓は2名いる (佐藤さんと佐藤守さん) ため、佐藤守さんについてはつねにフルネームで記載する。

² 運動部活動での経験を尋ねた際、活動中だけでなく学校生活や学校外での部員同士の会話・言動も語られた。そのため本稿では、活動中に限らず部員同士の会話・言動を広く分析対象とする。

³ 「女性集団」「男性集団」という表記は、協力者の所属した運動部がどちらの性別を前提

属していた人からも「付き合った／別れた」「交際相手と遊びに行った」などの話題が語られた。それは「嬉しい」「楽しい」という感情を共有するものだったという。しかし、共有される経験の範囲や語られ方を深く聞き取ると、性行為を含む経験が男性集団では広く部員同士で共有される事例が見られる一方で、女性集団では個人的な相談などの形で語られる傾向が見られた。本節では、まず男性集団の会話とその問題性を指摘する語りを分析する。その後、女性集団の会話を分析し、男性集団との差異を論じる。

高校で硬式野球部だった高橋さんは、「彼女」ができた部員に「お前どうなん？ [性行為を] したん？」などと尋ねることで性的経験を聞き出し、盛り上がる「ノリ」があったと語った。筆者が「盛り上がるときに、生々しい話までするんですか？」と尋ねると、高橋さんは次のように語った。

高橋：ああ、そうですね。「何からしたん？」みたいな。もう高校生、やっぱそうですね。AVで見た内容「ほんまにあんなん？」とか話したりとか。いやもう、そうですね。話してました。

筆者（以下、筆）：ああ。相手がどんなだったとか、なんか、そんなことも話すんですか？

高橋：そうですね。お前の彼女、胸大きいとか、見たら分かるじゃないですか、大体。そういうところで「どうやった？」みたいな。みんなで聞いたりとかしてました。

同様の内容について、小林さんは「キスとかセックスとかそういう話が出てから、みんなが深掘りしてくみたいな感じ」と語った。ただし高橋さんと小林さんは、性的な会話は仲が良いからこそできるものだと言った。まささんも、性的な会話は「その集団だけです話」であり、「集団性がある面白い」と語ってい

に構成されていたかを示す。ただし、男女を構成員とする運動部に所属した人の経験についてこれらの表記を用いる場合は、その経験が「女性／男性だけ」を前提とする空間で生じたことを意味する。また、個人を指す「女性」「男性」の意味は文脈に応じて使い分ける。例えば「女性として活動していた」という表記は、協力が「女性」のカテゴリーに属する人として活動していたことを意味する。また、協りに登場する他者の性別に関する表記は、協力が認識する当該個人の性別を示す。

る。つまり、女性を客体化するミソジニスティックな会話は、誰それ構わず行われるものではないのである。

この点に関して、はちさんは「お前彼女できたらしいな」みたいな。[…]「よかったなあ」みたいな。「がんばれよー」って」という会話はあったが、「部活はその程度だった」と語った。中高一貫校で6年間同じクラスだったのはちさんにとって、中学時代から仲の良いクラスの4人グループが「ふざけ合える場所」だった。そこでは「お前 [性行為を] やったん?」とか、なんかそんな話は日常茶飯事」であり、こうした会話ができるのは「お互いに悪ふざけし合ったりとかできて […] 受け流せる関係値があるから」だという。運動部でミソジニスティックな会話を経験しなかったのはちさんの語りは、逆説的にそうした会話に関係性に支えられることを示している。

こうした会話に対しては、まささんや高橋さんのように「楽しい」「面白い」と捉える認識や、小林さんのように「またあいつあんなこと聞いてるわ、言うてるわ」といった無関心かつ許容的な態度などが見られた。男性集団に属していた11名のうち、そうした会話の問題性に触れたのは中村さんとはちさんだけだった。ミソジニスティックな会話は、基本的に無害なものとして認識されているのである。

この認識は、性的な会話は男性集団内で完結するという認識と関係する。例えば佐藤さんは、性や恋愛に関する「いじり」などをする場について、「男子部室だったんで […] そこで話してたんで」と語った。また、男子ソフトテニス部に所属した畠さんは、教室などで女性にそうした会話が聞かれると「印象が悪くなると思ってたから、聞かれないようにしよう」という感覚があったという。さらに渡辺さんは、先輩が性行為の経験を共有していたことについて「本人たちがいいなら、いいかなって思ってた」と語った。筆者が「その相手が性行為をしたということも一緒に共有することになるという点について、引っかけたこととかはないですか?」と尋ねると、渡辺さんは次のように答えた。

渡辺：そこは絶対いじらないじゃないですか。なんか日常生活で、その相手さんに向かって、そういういじりは、性行為絡みのいじりなんかもう絶対しない。こっちが知って、こう内に「あ、そうなんや」って思う、落とし込む

だけなんで。だから別にそこは大丈夫かなって思いますね。

このようにミソジニスティックな会話は「親密な男性同士の空間」で完結するがゆえに無害であると認識されている。言い換えれば、こうした論理でミソジニスティックな会話を無害なものとして認識させる「良心」が形成されているのである。

4-2 ミソジニスティックな会話の無害性という幻想

だが先述の通り、ミソジニスティックな会話の問題性も語られている。中学時代、中村さんは同級生から交際相手の名前で呼び続けられるという「からかい」を経験した。筆者がそのときの対応を尋ねると、中村さんは次のように語った。

中村：記憶があんまり定かじゃないんですけど、中学生のときなんで。笑ってごまかせたときもあると思うんですけど […] 精神的にしんどいときとかもあったと思うんで。そういうときは、もう本当に、いつもは内心で怒っているだけなんですけど、まあ、顔に出ってしまったかなと思います。 […] 行動に出すことはなかったかなとは思いますが。

筆： […] 内心はたぶん、すごくこう、しんどい思いとか、怒りとかあったと思うんですけど。それをやっぱ行動とか言葉とかには、あまり出さなかったのはなんでですか？

中村：関係、関係を崩したくないっていうのが大きいのかなと思います。やっぱり怒ってしまうと、その後の空気が悪くなるとか。そういうのをやっぱり、そっちの方を優先してしまって。

これは同級生からの「からかい」であり、運動部での出来事ではない。しかし、まささんや今井さん、高橋さんは運動部内での同様の「からかい」について語っている。したがって、同様の「からかい」が運動部内でも心的負担を生み出していることが推測される。そして「からかい」の性質により、「ミソジニスティックな会話の無害性」という前提と齟齬をきたす心的な生は、「笑ってごまかす」「行動には出さない」という行為の強制によって覆い隠されるのである。

また、はちさんは先述の4人グループで性行為をした相手の身体について話す

ことがあったという。そうした会話については、「4人の仲間内でするんであれば、まあ別にいいんちゃうかなと思います […] なんか成長の中の健全な過程なんかと思うんですけど」としつつ、「何となく嫌やなと思ってた」と語った。それは「相手の体のこと言ったんが、なんかで伝わったりとかってというのはなんかよくないし」「十分に広まる可能性はあった」からだという。はちさんはグループ内の会話が外部に広まる可能性を想定し、ミソジニスティックな会話の問題性に言及している。

高校の陸上競技部で女性として活動していた山田さんは、ミソジニスティックな会話が「親密な男性同士の空間」で完結するという認識に反する経験を語った。山田さんには部内に「関係をもった人」がいたが、その事実は「みんな知らないはず、で、自分も仲が良い人にしか言ってないはず」だった。それにもかかわらず、「男子の先輩から「お前、あいつと」と言われ、「[関係をもった相手に] 聞いたら、やっぱり向こうが言ってたらしくて。「ええ、死んでしまえ」っていう」と語った。筆者がそのときの感情をより深く尋ねると、山田さんは次のように語った。

山田：そのときは高校入学してあんまり経ってない頃にそれを言われたので。すごい嫌でちょっと泣いたと思います。[…] 結局、高校3年間を通してその人と関係をもったことは、いじり、まあ毎日言われるとかじゃないですけどね、いじり続けられたし。

この語りは、ミソジニスティックな会話が「親密な男性同士の空間」で完結するという認識の誤りを示している。前項で見たように、交際相手とのプライベートな関係、つまり性的に客体化された女性の存在は、親密な男性同士の関係の中で利用されている。そして、山田さんに「お前、あいつと」と言う男性の存在は、男性集団内のミソジニーが女性のいる空間に滲出する様相を示している。しかもそれが「3年間を通して」継続した事実は、山田さんの抗議の声が「いじり」によって封じられていた可能性を示唆する。ホモソーシャリティがミソジニーを必要とし、それが女性のいる空間へと拡張されうることから、「親密な男性同士の空間」が決して「男性だけ」の空間ではないことが指摘できる。

4-3 女性集団における性や恋愛に関する会話

女性集団について、「付き合った」などの情報が広く部員間で話題になることは男性集団と共通していたが、経験が共有される人の範囲や語られ方に差異が見られた。例えば平野さんは、性行為に関しては「内々で「どこまでいった?」」などの会話があったと語る。「内々で」という表現は、先に語られた「相談はあんまり大人数でしないというか。まあ内々に話すぐらいなんですけど」という説明を踏まえたものである。「内々で話すときは、どのような内容を話すんですか?」と尋ねると、平野さんは次のように語った。

平野：例えば「え、どこで?」とか。中高とかやったらみんな家やから「いつ?」みたいな。そういう時間とか場所、「家族おったんちゃうん?」とか、そういう話。なんか内容、行為自体の内容というよりは「え、ばれへんかったん?」とか、そういうなんかもう物珍しさに。

性行為の具体的な内容が話題にならないことは、他の協力者からも語られた。鈴木さんは、「私の周りは本当に下ネタに寛容と言いますか […] 全然話してたんで」としつつ、「知っている人同士のやつって聞きたくないなあ」と感じ、「性行為の話はあんまり聞いてはなかった」と語った。また、岩本圭さんは次のように語った。

岩本：やっぱり女の子たちの部員の間で、なんか経験がある子とない子がいて。経験ない子がある子に「どういう感じなの?」みたいな。「痛い? 初めでは、やっぱり」みたいなこと。 […] なんか情報ですよ、いわゆる。ネットでも確かに調べようと思えば調べられるけど、実体験を聞きたいみたいな。気になる、みたいな。

筆： […] その相手がどうだったとか、そんな話は全然しないわけですか。

岩本：ほとんどしない、ないですね、うん。

具体的な性行為の内容を含む会話は、他の協力者からも語られなかった。ただし岩本さんには、部内で男性と交際していた女性から、その男性との性行為につ

いて個人的に聞いた経験があった。筆者がその内容を尋ねると、次のように語られた。

岩本：なんかペニスが大きかったっていう話と、「なんか上手かったんだよね」みたいな。「絶対私、童貞って嘘つかれてると思う」みたいな。「これ、私が初めてって嘘だと思う」みたいな話で。「もうくそどうでもいいわ、そんなこと」みたいな感じで、はい。

筆：それはもうなんか、すごい仲良い。

岩本：ああ、めっちゃ仲良い、一番仲良かったんですよ、部活の中で。[…]
なんかそれを機に、私はその「知ってる人の話をしないでほしい」って、その子をお願いして。つまりその、浮かんできちゃうので。その、「嫌だ、想像したくないからやめて」って言ったら、「じゃあまあ岩本には話さないようにするわ」とか言って。

本項の分析から、女性集団で性行為の内容や男性の身体が話題になることは稀であり、話題にされる場合も、特に親しい関係に限定される傾向が読み取れる。同性同士の絆の差異という観点からは、男性集団では「女の交換」が見られる一方、女性集団には「男の交換」が見られないことが指摘できる。同性同士の絆の差異が男女間の権力関係と関連するという Sedgwick (1985/2001) や堀江 (2015) の議論を踏まえると、こうした会話の差異は、女性集団の会話もミソジニーと無縁ではなく、その規範が反復されていることを示唆している⁴。

⁴ これは男性の身体を客体化する会話や、それが集団外に広がるという問題が女性集団では生じえないという主張ではない。筆者が男性であるために、そうした事例が秘匿にされた可能性があるからだ。しかしインタビューでは、特に親しい関係でのみ話される内容も語られており、女性集団における会話は少なくとも部分的に開示されている。また、男性の身体を客体化する会話が筆者の性別ゆえに秘匿にされたとすれば、それは男性集団のミソジニーが女性のいる空間に滲出する一方、女性集団のそうした会話が「内々で」行われるという論旨に沿うものである。ゆえに「語られていないこと」は、そうした事例が存在しないことも、本稿の議論が破綻することも意味しない。そのため本稿では、調査の限界を踏まえつつ、語られた内容に基づいて分析を行う。

5 身体的なふるまい・同性同士の身体接触に対する言動とホモフォビア

5-1 男性集団におけるホモフォビックな言動とホモソーシャリティの構築

次に、ホモフォビアに着目する。男性集団におけるホモフォビックな「ジョーク」としては、身体的なふるまいに関するものが多く語られた。例えば、結城さんは次のように語った。

結城：ちょっとそういう仕草をして笑いを取るやつがいて。そういうのに対しては「オネエ」とか言ってましたね。[…]

筆：どういう感じの仕草なんですか？

結城：なんかこう、身体をくねくねさせるとか。なんだろう、ゲイバーみたいなことを知ってた、話題に出したやつもいて「これじゃん」みたいな、「こういうことやってよ」みたいなことも言って。

まささん、高橋さん、畠さんなどからは、走り方や打ち方、悲鳴をあげるなどのふるまいに対して「オネエ」という言葉が使われた経験が語られた。こうしたホモフォビックな「ジョーク」も「傷つく人はいない」ことを前提とする。例えば結城さんは、前述の事例について「気持ち悪い」という感覚はなく、「そいつの普段の姿も知ってるし、それはノリでやってるってことも知っているの」と語った。また、まささんに「「オネエ」みたいな「ノリ」についても、仲の良さとかは関係しますか？」と尋ねると、次のように語られた。

まさ：今思ったのは、相手をどれぐらい傷つけちゃうかっていう予想ができる人と、できない人っていうので、ラインがわかれるのかなって思いました。[…] めっちゃ仲が良いって判断してたら、ある程度。うーん。言論の幅っていうのは広がってきて。その中に「オネエ」とか「ホモ」とか、そういう言葉も含まれてて。

ホモフォビックな「ジョーク」は男性集団の特別な関係によって可能になると認識されている。しかしこれは、その集団からホモセクシュアルな絆を予め排除することで成り立つ論理である。そうして「傷つき」の可能性がないことにし、

同性愛を攻撃する「ジョーク」が反復されることで、異性愛規範に服従する主体が形成されると考えられる。

だが、ホモフォビックな「ジョーク」が相手を傷つけない範囲で行われるという認識も幻想である。バイセクシュアルを自認する佐藤守さんは高校の男子テニス部で「ゲイやなあ」と言われた経験を語った。それは、仲が良くかわいいと思っていた部員とのスキンシップ、つまり身体的な近さに向けられたものだった。そのときの思いを尋ねると、佐藤守さんは次のように語った。

佐藤守：いや、なんかすごい否定されてる感じだったんで。強く、あの、辛かったですね。それは。[…] 直接的ではないんですけど、その同性愛を否定するような感じがちょっと垣間見えたので、そこは辛かったです。

筆：[…] 言われる側としては辛い経験だっていうふうに思うんですけど、その言ってる側ですよ、の雰囲気ってどういうものだったんですか？

佐藤守：まあ、ちょっとからかうぐらいな雰囲気だったと思います。[…] 悪意はたぶん、なかったと思うんですけど。

佐藤守さんからは、こうした「からかい」に抗議した経験も、抗議しようと思った経験も語られなかった。むしろ、それが「大ごとになることはなかった」という。ホモセクシュアルな絆の予めの排除と抗議の意思を奪う「からかい」の特徴が、その対象とされる人の心的負担を覆い隠しながら、ホモソーシャリティの構築とそれによる主体化＝服従化のプロセスを安定させていると考えられる。

5-2 女性集団における身体接触と同性愛嫌悪

女性集団における身体的な近さに関する語りは、男性集団とは異なっている。例えば女子バスケットボール部に所属した山本さんは、「手つなぐとかはよくあります、めっちゃ。[…] 腕組むこともありますし」と述べ、それは「別に嫌じゃないし、嬉しいですね」と語った。また平野さん、岩本さん、Lさんなども「抱きつく」「手をつなぐ」「胸を触る」といった身体接触について語った。山田さんが、ハグなどは「コミュニケーションとか、スキンシップの1つ」であり「日常的にあったことです」と語るように、女性集団では身体接触を禁じる力が

働いていないと考えられる。一方で、こうした身体接触が抵抗感を生むこともある。女子テニス部に所属した田中咲さんは、「人前でハグとかするのが、ちょっと緊張したりとかはしますね」と語った。そうした行為への対処について尋ねると、田中さんは次のように答えた。

田中：そんな恋人つなぎみたいな感じになったときとかは、もう「何してんの」って言ってこう外したりとか、したり。ハグの場合は「はいはい」みたいな感じで、事を取める感じで、こうできるだけ、そういう状況になる時間を減らすようにしてたかなって思います。

筆：なるほど。多少、抵抗感っていうか、があったような感じですかね？

田中：そうですね。抵抗があったのかなって思います。なんか本当にどうしていいかわからないみたいな感じだったので。

平野さん、鈴木さん、山田さんも身体接触に一定の抵抗感を抱いていた。例えば鈴木さんは、「自分はやっぱり男の子になりたかった時期があって、その、胸が嫌な時期があったんですよ」と述べ、特に小学校高学年の成長期以降、胸を意識させられる身体接触が好きではないと感じてきたと語った。女性同士の絆の連続性が一般的に共有され、身体接触が親密性を確認する作用を持つがゆえに、抵抗感を表明しにくい状況がある。

また、女性同士の絆の連続性は同性愛嫌悪が存在しないことを意味しない。高校で女子サッカー部に所属し、同部の女性と交際関係にあったLさんは、「女の子同士、気持ち悪い」というような否定的態度を示す部員がいたと語った。その否定のされ方について、「直接言われるんですか？」と尋ねると、Lさんは次のように答えた。

L：なんかもう避けていったんですけど、その子が。自分たち2人でいたときに避けていくんですけど。なんか周りを通じて、なんか「あの子はあんまりよく思っていない」というのは聞いたことがあります。

筆：それはもう「いじり」というよりは、もうなんか、完全に避けている。

L：避けてましたね、はい。1対1のときは全然喋って、喋るんですけど。2

人でいたら避けていくっていう。

この事例からは、女性同士の絆の連続性を「女性同性愛は許容されやすい」という表現に換言できないことがわかる。堀江（2015）が述べるように、ホモソーシャルリティによって維持される異性愛主義のもとで、女性を客体化するミソジニーはレズビアンを不可視化し、抹消する。女性同士の身体的な近さを監視する力が働かないことや、可視化された女性集団内の交際関係への否定的態度は、こうした規範の作用を受けている。そして、女性集団の絆が男性集団とは異なる形で統制されることは、この規範が女性集団でも反復されていることを示唆している。

6 教師による性や恋愛に関する「ジョーク」

次に、事例数は少ないが、教師の言動に着目する。高校で水球部だった小林さんは3年間クラス替えがないスポーツ科に在籍した。生徒同士だけでなく、10名ほどの体育教師との関係も密になるスポーツ科は、「第二の家族」のようだったという。水球部顧問の男性体育教師が生徒の交際関係を「いじる」場面があったことについて、それに対する認識を尋ねると、小林さんは次のように語った。

小林：そういうのはなんか「スポーツ科のノリ」っていうか。まあ別に違和感を感じることはなかったですけど。[…]「あー、なんかいつもの風景や」ぐらいの。

この教師は、部活動の際には更衣室に入り、男性部員に恋愛や性行為の経験を聞いていたという。そうした会話への認識を尋ねると、小林さんは再び「なんかいつも通りだなあ」と、日常性を感じていたことを語った。教師がそうした言動をすることへの認識をさらに深掘りして尋ねると、次のように語られた。

小林：嫌やなあっていうところはないですし。関わりにくいなのは[…]思わないんですけど。[…]なんか違和感がありますよね。なんか「先生か？」っていうぐらいですかね。

筆：むしろその何でしょうね。その違和感が […] ネガティブに働くのか、まあ、なんか先生やけどこんなこと言ってるのって、なんか好感が持てるというか。どうなるんですかね？

小林：それはちょっとほんまに人によってっていうところで。結構「なんであの先生、あそこまで言わはんの？」みたいな人もいたし、「めっちゃおもしろいやん！」っていう人もいるしっていう。

スポーツ科や水球部の日常性を感じさせる体育教師＝顧問の言動が、「嫌」「関わりにくい」という感覚につながらない点は重要である。それはむしろ、教師と生徒の親密さを確認する効果をもつ。ただし、その受け取り方が「人によって」異なる点は確認しておく必要がある。

高校のウェイトリフティング部で女性として活動していた鈴木さんは、男性部員から「普通に〔体育教師である顧問の〕先生も〔下ネタを〕喋るよ」と聞いていたが、「女子にはあんまり言わなかった」と語った。しかし鈴木さんは、「自分たち〔女子部員〕にも言ってくれてもいいのに」と感じていたという。教師による「下ネタ」への認識を尋ねると、次のように語られた。

鈴木：なんかそこまで話してくれると、[…] 仲が良いわけじゃないですけど、その良い関係で先生と接せられてるのかなっていうのは感じますね。普通は喋らないと思うので、生徒に。だから、なんか聞いたら、「あ、なんか心聞いてくれてるのかな」ってちょっと思いますね。

鈴木さんは別の箇所でのこの教師を強く信頼していたと語った。だからこそ特別な関係の表現として、「下ネタ」を「自分たちにも言ってくれてもいいのに」と感じている。少数の事例ながら、「下ネタ」を共有できる関係が特別視される点は教師―生徒関係にも当てはまることが示唆される。しかし、小林さんの事例と比べると、「下ネタ」が男性同士の「ノリ」として理解されていることも、教師―生徒関係に当てはまると推測される。

他方、中村さんは、高校の体育教師である顧問が生徒とのコミュニケーションにおいて「下ネタ」を用いていたことについて、「僕はなんか結構、そういう

の得意じゃないんで。[…] なんか言ってはるな、みたいな」と語った。こうした冷めた感情を表に出した経験は語られていないが、教師が「下ネタ」を活用する一方で、その意図の通りには受容しない人があることも見逃してはならないだろう。

7 性や恋愛に関する会話・言動を通じた体育教師の主体形成

インタビューの終盤では、体育教師として働く際に生徒による「ジョーク」を伴う会話・言動にいかに対応したいかを尋ねた⁵。高校で体育教師として勤務する高橋さんは、ホモフォビックな「ジョーク」について、次のように語った。

高橋：やっぱ当時はもう楽しくて、そういうの言ってたんですけど。今こう教師になって思うのは、まあよくはないなあと。[…] でも、いざ自分が経験してきたその楽しい感じは、高校生みんなに、やっぱその、高校時代ぐらいでしか味わえないと思うので。まあ、人をほんまにこう傷つけへん、いじめとかならん程度だったら、もうその本人らがわかってるんやったら、全然いいかなとは思います。

また、結城さんは「教師はそこに関わりすぎちゃいけない」としつつも、「いじられてるやつが、まあ嫌がってるとか、なんか無理しているなっていうのを感じ取るのであれば、そこはこう、ちょっと介入しなきゃいけない」と語った。さらに「男同士のノリで、それを[…] やめろって言っても絶対無理なんで」とも語っている。

これらの語りでは、男性集団のホモフォビックな「ジョーク」は避け難いものと捉えられ、その許容範囲は「傷ついているか」「嫌がっているか」を基準に判断されている。つまり問題化されているのは「ジョーク」そのものではなく、心的な「傷つき」である。しかし、ここまで見てきたように「ジョーク」は「傷つ

⁵ この質問はインタビューガイドに含まれておらず、全員に尋ねたものではない。特に、女性集団における性行為などに関する会話は個人的な相談として行われやすいこと、また女性集団での「からかい」はインタビューでは多くは語られなかったため、「対応を要する」ことを前提にした質問は憚られた。そのため、本節の分析は男性集団に属していた人の語りを中心となっている。

く人はいない」という前提で行われ、実際に生じる傷つきは覆い隠される実態がある。したがって、運動部活動を通じたホモフォビックな規範への服従が、傷つきの有無で許容範囲を判断しつつも、実際にはそこに介入しない体育教師の主体形成につながっていると考えられる。

他方で、小林さんは「レズ、ゲイ、ホモ、オネエとかに関しては、ちょっと指導しないとイケないかなと思うんですけど」と述べ、山本さんも「まあ今結構 […] そのLGBTとか進んでるから、もっと学校でこういうの [レズ、ゲイ、ホモ、オネエなどの言葉] を言わんようにしないとあかんって、教える立場で言うと思います」と語った。ここでは、性的マイノリティの存在が可視化されつつある社会状況を踏まえ、差別的と捉えられうる言葉の使用への介入の必要性が語られている。当然のことだが、体育教師の主体形成は社会の変化にも影響されるため、そのような言説を豊富にすることの重要性が示唆される。

ミソジニスティックな会話への介入の必要性も、「傷つき」との関係で語られた。例えば性行為の経験を共有することについて、小林さんは「僕の感覚では悪いこともないし。 […] 仲間内なら全然いいかなぐらいの感覚あります」としつつ、「明らかに対象の子が嫌そうな感じじゃなかったら別にいいかなっていう […] 笑ってても、何を思っているか分からないんで」と語った。ミソジニスティックな会話も、自身の経験をなぞるように「基本的には無害だが、嫌な人がいるのはよくない」と認識されている。この点からも、運動部活動における「ジョーク」を通じた体育教師の主体化＝服従化が読み取れる。

他方で、中村さんは次のように語った。

中村：中学校ではそういうの [性や恋愛に関すること] に興味を持つ子が増えてくると思うので。保健の授業で、こういう、僕みたいに嫌やって感じる人もいるんやでっていうのを、ちゃんと伝えたいなとは思ってました。

「傷つく人はいない」ことを前提とする「ジョーク」を通じたミソジニスティックな規範への服従が体育教師の主体形成の一部だとすれば、中村さんは規範からの「ずれ」が顕著な例である。中村さんの事例は、具体的な抵抗の行為は伴わずとも、心的な生を通じて行為能力を引き受けた主体形成の可能性を示して

いる。ここに、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産への抵抗の可能性が見出されるのである。

8 結論

本稿では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を体育教師の主体形成における重要な実践と捉え、その実態を分析した。特に男性集団のミソジニスティック／ホモフォビックな「ジョーク」は「傷つく人はいない」という前提で反復されている。他方、女性集団の会話・言動にもまた、女性を性的に客体化し、レズビアンを抹消するホモソーシャリティの作用が読み取れた。この知見は、男性集団を中心に考察してきた先行研究に対し、ホモソーシャリティに基づく社会構造が女性集団にも影響することを示している。そして、生徒が行う「ジョーク」への介入基準が「傷つきの有無」にあるとする男性集団に属していた人の語りからは、運動部活動を通じたジェンダー規範への服従が「ジョーク」や「からかい」に介入しない体育教師の主体形成と関連することが理解できる。

また本稿では、心的な傷つきや抵抗感が規範に従った行為の強制により覆い隠されることも示された。ホモソーシャルな社会構造の中で女性・男性集団それぞれに特徴的な会話・言動が観察される一方で、そこで生きる人たちは多様な性のあり方とも関わりながら、それぞれに固有の心的な生を営んでいる。笑ってごまかす、抗議をしないという行為は規範への服従として理解されうるが、心的な生において、規範は単純に反復されているわけではないのである。表出された行為だけでなく心的な生に目を向けることは、運動部活動を通じた「良心的」な体育教師の主体形成に疑問を付す。さらに、そこで心的な傷つきを抱えた人が「ジョーク」の問題性を伝える体育教師になっていく可能性も示された。心的な生に注目した分析により、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産への抵抗について論じた点に、本稿の独自性がある。

さらに、体育教師の主体化＝服従化において「傷つき」が「ジョーク」への介入基準となることを踏まえると、心的な傷つきの可視化は介入の可能性を高めるだろう。つまり、覆い隠されがちな心的な生について学校や教師教育の中で語っていくことも、ジェンダー規範を身体化した体育教師の再生産への抵抗となる。これが、本稿が提示する実践的な意義である。

本稿では、運動部活動における性や恋愛に関する会話・言動を分析し、体育教師の主体形成について考察した。しかしその分析は、そうした会話・言動の経験と体育教師志望のプロセスを直接結びつけるものではない。この点を検討するためには、運動部活動において同様の経験をしながら体育教師を志望している高校生などに直接アプローチする必要がある。また、本稿では女性集団の事例も扱ったが、特に7節の分析は男性集団に属していた人の語りにより依拠しており、女性集団における性や恋愛に関する会話・言動を通じた体育教師の主体形成についてはさらなる検討が必要である。最後に、心的な生への注目により抵抗の可能性について議論したが、顕著な事例として確認できたのは中村さんだけだった。今後は、より多様な事例を可視化し、同一化可能な体育教師の主体を増殖させていくことが求められる。

付記

本研究はJSPS科研費21J12683の助成を受けたものです。

References

- Althusser, L. (2005). 「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」. 『再生産について』(西川長夫, 伊吹浩一, 大中一彌, 今野晃, & 山家歩訳). 東京: 平凡社, pp.319-378. (Original work published 1995).
- Butler, J. (2019). 『権力の心的な生』(佐藤嘉幸 & 清水知子訳). 東京: 月曜社. (Original work published 1997).
- Dodds, P., Placek, J. H., Doolittle, S., Pinkham, K. M., Ratliffe, T. A., & Portman, P. A. (1991). Teacher/coach recruits. *Journal of Teaching in Physical Education, 11*, 161-176.
- Doolittle, S. A., Dodds, P., & Placek, J. H. (1993). Persistence of beliefs about teaching during formal training of preservice teachers. *Journal of Teaching in Physical Education, 12*, 355-365.
- Hutchinson, G. E. (1993). Prospective teachers' perspectives on teaching physical education. *Journal of Teaching in Physical Education, 12*, 344-354.
- Morrow, R., & Gill, D. (2003). Perceptions of homophobia and heterosexism in physical education. *Research Quarterly for Exercise and Sport, 74*(2), 205-214.
- O'Brien, K. S., Shovelton, H., & Latner, J. D. (2013). Homophobia in physical education and sport. *International Journal of Psychology, 48*(5), 891-899.
- Riessman, C. K. (2014). 『人間科学のためのナラティブ研究法』(大久保功子 & 宮坂道夫監訳). 東京: クオリティケア. (Original work published 2008).
- Sedgwick, E. K. (2001). 『男同士の絆』(上原早苗 & 亀澤美由紀訳). 愛知: 名古屋大学出版会. (Original work published 1985).
- 朝倉雅史. (2016). 『体育教師の学びと成長』. 東京: 学文社.
- 朝倉雅史, & 清水紀宏. (2011). 「体育科教員への入職過程と運動部活動を通じた経験」. 『いばらき健康・スポーツ科学』, 28, 1-17.
- 江原由美子. (2021). 「からかいの政治学」. 『増補 女性解放という思想』. 東京: 筑摩書房, pp.238-263.
- 堀江有里. (2015). 『レズビアン・アイデンティティーズ』. 京都: 洛北出版.
- 井谷恵子, 片田孫朝日, & 若林順子. (2006). 「体育授業におけるジェンダー体制の生成」. 『スポーツとジェンダー研究』, 4, 4-15.
- 加藤凌, & 佐藤善人. (2023). 「中学校保健体育教師の男女共習体育授業に対する認識に関する一考察」. 『スポーツ教育学研究』, 43(1), 13-31.
- 三上純. (2020). 「運動部活動におけるホモソーシャルリティの形成」. 『スポーツとジェンダー研究』, 18, 20-34.
- 三上純. (2022). 「運動部活動におけるミソジニスティック／ホモフォビクな会話と性別意識」. 『女性学』, 29, 76-104.
- 三上純. (2023). 「体育教師の固定的なジェンダー観と運動部活動文化の関連について」. 『スポーツ社会学研究』, 31(2), 59-75.
- 三上純, & 井谷恵子. (2018). 「教員養成課程の学生における性的マイノリティに関する知識と意識についての研究」. 『スポーツとジェンダー研究』, 16, 36-47.
- 坂本拓弥. (2013). 「「体育教師らしさ」を担う身体文化の形成過程」. 『体育学研究』, 58, 505-521.

Abstract

Physical Education Teachers' Subject Formation through Conversations and Behaviors Related to Sexuality and Romance in Athletic School Club Activities

Jun MIKAMI

Previous research has highlighted that physical education (PE) teachers often embody gender norms, for example by categorizing students strictly as “girls” or “boys” and by overlooking homophobic remarks made by students without intervention. Recent studies have examined how such PE teachers are produced, focusing on the functional aspects of conversations and behaviors concerning sexuality and romance in athletic school club activities. However, previous studies have primarily focused on male groups, and have paid insufficient attention to the psychic lives of those involved. Furthermore, by focusing on the reproduction, the possibility of resistance has not been sufficiently discussed. Building on previous studies, this study conceptualizes conversations and behaviors related to sexuality and romance in athletic school club activities as key practices in the formation of PE teachers' subjectivities, and analyzes their dynamics with particular attention to women's experiences and the psychic lives of those involved. On this basis, the study aims to examine both the formation of PE teachers who embody gender norms and the possibilities for resistance to their reproduction. This study drew on narrative research, specifically thematic analysis, based on interviews with 18 individuals who participated in junior high school and high school athletic club activities. Butler's theory of subjection, Sedgwick's concept of homosociality, and Horie's interpretation of the latter provide theoretical frameworks. The analysis revealed that misogyny and homophobia were repeated through “jokes” performed under the assumption that “no one gets hurt” particularly in male groups. In female groups, different dynamics

emerged that could be understood in relation to the sexual objectification of women and the erasure of lesbian identities. When imagining how they would respond to students' "jokes" as PE teachers, participants tended to assume approaches aligned with the norms to which they themselves had previously conformed. This suggests that conformity to gender norms through participation in athletic school club activities is closely related to the formation of PE teachers' subjectivities. At the same time, by focusing on the psychic dimension, the study uncovered how these "jokes" often generate feelings of hurt and resistance, thereby undermining the assumed harmlessness on which the process of subject formation relies. The analysis also revealed the potential for individuals who carry such psychic wounds to become PE teachers capable of addressing and problematizing these "jokes." This calls into question the formation of PE teachers as "conscientious" subjects through participation in athletic school club activities. By combining Butler's theory of subjectivation with an analysis of everyday conversational practices, this study offers new insights into how gender norms are inscribed onto bodies in educational contexts and how psychic traces of injury may provide resources for resisting their reproduction.

Keywords:

psychic life, subjection, misogyny, homophobia, homosociality

研究論文

あくまでも幻想として ——女性向けマンガの「年の差」恋愛ジャンルにみる 女性の欲望

五十嵐舞

要旨

本稿は、女性向けマンガの若い女性ヒロインと中年や初老の男性の恋愛を描く「年の差」ジャンルに関する幻想とリアリティの交渉を検討する。少女マンガやヤングレディースというジャンルは共感を根幹に、読者の現実と重なり合うか、あるいは現実の制約を無視すれば肯定したくなるような作品とされてきた。しかし、若い女性との交際を望む男性の欲望と、加齢に関する二重基準などのミソジニーな価値観の親和性の高さに対する認識からは、現実との間の別様の説明を必要とする。本稿では、女性向けポルノグラフィに関する幻想とリアリティに関する視座を手がかりに、「年の差」ジャンルのコードを検討する。まず、男性の容姿の分析からは二種類の男性像が明らかになる。顔や首のシワや筋肉が落ちた体型などによって加齢が外見に書き込まれる人物と、外見にさほど年齢が反映されない人物である。しかし、前者の男性も脇役の人物と比べると、鼻筋の通った顔やのびた背筋といった優れた容貌をしている。加えて、彼らは仕事だけでなく家事も手際よく行い、ヒロインを親身に支える。すなわち、彼らは老いが描かれることによって実在しそうと錯覚させるが、実際には、少女マンガのいわゆるスパダリのような人物であることが明らかになる。続いて、実社会であれば暴力に該当し得るような関係性や行為に関する分析からは、ヒロインの内面のモノローグによる再意味付けといった女性向けポルノグラフィと共通する手法の他に、ジャンル特有のコードがあることが導かれる。それは、老いた男性の身体から性的なものが切り離されることや、ヒロインの選択という行為に付随して、ヒロインが主体性を獲得する物語に物語の主題を変化させる手法である。人物デザインやプロットを通じて、家父長制的価値観や現実社会の暴力と切り離されることで、女

性たちが楽しむことが可能な幻想としての物語が成立する。こうした幻想の物語の様相を明らかにすることは、葛藤を伴う女性たちの欲望への理解を提供する。

キーワード：

女性向けマンガ、年の差恋愛、女性の欲望、フェミニズム、加齢に関する二重基準

1 はじめに：「年の差」ジャンルの消費をめぐる葛藤

2000年代後半頃より女性向けマンガに登場する、20代や30代のヒロインと40前後から60代といった中年や初老の男性が結ばれる物語は、若い女性と年長の男性という組み合わせがあまりにも手垢のついたものであるがゆえに、その表象をめぐる女性の欲望について語る事が難しい。スーザン・ソントグは、男性が女性よりはるかに年上のカップルが当然のものや好ましいものと認識される背景には、加齢に伴う身体的変化によって女性については美しさや性的魅力が失われ価値が下がるとみなされるのに対し、男性はそうにみなされないといった、加齢に関する二重基準が存在すると論じる (Sontag, 1977, pp. 286-287, pp. 292-293)。夫より妻が年下であるべきとする慣習において、女性は御しやすく未熟な存在であることが理想とされる (Sontag, 1977, p. 293)。ソントグは、こうした認識は男性主導の不平等なシステムだけでなく、このミソジニーな価値観を女性も内面化することによって機能していると、女性の共犯関係を指摘する (Sontag, 1977, pp. 293-294)。中年・初老の男性と若い女性が結ばれる物語は、ソントグが言うようにミソジニーな価値観を女性たちが内面化していることの表れなのだろうか。しかし、20代後半の女性と50代の男性の恋愛を描いたヤマシタトモコの『Love,Hate,Love.』を読んだ三浦しをんが、「この作品はとてもとときめく」と言いつつ、直後に「私は現実では、年の若い子と付き合うおじさんは嫌いなのに」と続け (ヤマシタ・三浦, 2015, p. 28)、それに対してヤマシタが「お言葉に目からウロコがぼろぼろ落ち」、「でも二次元だと萌え」という共通の見解に落ち着いてしまったという対談と『Love,Hate,Love.』のあとがきに書かれたエピソードからは、ミソジニーな価値観の内面化といった理解では十分に説明できない様子が見えてくる。

こうしたジェンダーに関する問題を含みうるジャンルを女性が楽しむことをどのように考えるかという研究は、さかのほれば1980年代前後より蓄積されてきた性暴力や家父長制が描かれる女性向け大衆娯楽の分析に至る (Radway, 1984; Snitow, 1979)。日本のポピュラー文化については、近年女性向けポルノを見ることやBLを読んだり書いたりすることやアイドルを推すことなどの側面から蓄積されてきた (守, 2010; 堀, 2009; 香月ほか, 2022; 田中, 2024)。本稿は、特に女性向けポルノグラフィの研究視座を参照して、女性向けマンガにおける年上の男性と年下の女性によって構成される「年の差」恋愛の表象に描かれる欲望を検討するものである。

楠本まきが集英社の『Cocohana』に連載した『赤白つるばみ・裏』には、漫画家の谷崎が「ジェンダーバイアスのかかった作品」は「全滅するといい」と語る様子が描かれる (楠本, 2020a, p. 104)。それは社会的な悪を描かないということではなく、それが問題あるものだと「意識的に向き合い」ながら創作する必要があるという指摘だ (楠本, 2020b, p. 74)。同様にヤマシタも、強引なロマンスを読んだり描いたりしたいという気持ちは否定できないが、描き手が暴力に自覚的になり、暴力的ではない描き方を工夫することが大切だと述べる (ヤマシタ・岩川, 2020, p. 65)。消費者としての読者も無関係ではいられない。コンテンツを楽しむことによって生まれた受容が規範的な物語の再生産を促し、その物語が内包する価値観が現実の暴力を強化するのではないかという思いの間で、女オタクが気まづい問題に直面することが指摘される (田中, 2024, pp. 236-237)。本稿は、「年の差」ジャンルとミソジニーな価値観との間のファンタジーとリアリティのせめぎ合いの様相の記述を試みる。

2 「年の差」ジャンルと「リアル」との距離感

「少女マンガは、もっともその時代の女性の価値観を敏感に映しだしてきた分野」とされる (藤本, 2008, p. 24)。それは、幻想をつくと同時に「何か共有された感覚」をもたらすものでもあり (藤本, 2008, p. 8, pp. 22-24)、特にヤングレディースというジャンルにおいてその「共感」は二種類に大別される (岡本, 2015, p. 143)。「読者の現実と重なりあう、あるいは読者の実生活に還元できる、リアルな〈共感〉と、読者の現実と切り離されているからこそ安心して耽溺

できるような、フィクショナルな〈共感〉である（岡本, 2015, p. 143）。前者は「『いまここ』にいる自分の感覚・感情に寄り添うような物語」であり、後者は「『ここではないどこか』に連れ出された自分が、現実世界の諸制約を無視して首肯・肯定したいと思える物語」と説明される（岡本, 2015, p. 143）。

先述した「現実では、年の若い子と付き合いおじさんは嫌い」だが、「二次元だと萌え」という『Love,Hate,Love』のあとがきに書かれる感覚は、後者の「共感」に近いように見えるかもしれないが、後者の「共感」の例として挙げられるのが『ハッピー・マニア』で理想の恋愛を求めるシゲカヨに対する共感であり、「現実の諸制約」とは二年間で14人の男性と出会い二度不倫をして9回職を変えるというめまぐるしい変化と非現実的な仕事と恋愛の配分といった問題を意味することと比べると（岡本, 2015, p. 143）、ミソジニアな価値観といった暴力との関係は、現実との間の別様の説明を必要としているように思われる。

というのも、2000年代以降というのは、セクシュアル・ハラスメントへの認識が定着したり、SNS上でもしばしば若い女性と関係をもとうとする男性に対する嫌悪感が話題にあがる時代であるからだ。国立社会保障・人口問題研究所による2015年の出生動向基本調査のデータを用いた分析によれば、結婚相手との間に7歳以上の年齢差を理想とする女性は6%に過ぎないのに対して男性は22%を占め、特に男性の希望結婚年齢が上がるほどその傾向は強くなる（Ghaznavi et al., 2022, pp. 10-11）。このような若い女性との交際や結婚を理想とする男性の社会的傾向の中で、女性向けのマンガでも若い女性との交際を望む男性の欲望が含みうる気持ち悪さが描かれる。小学館『プチコミック』系列で連載された尾崎衣良の『深夜のダメ恋図鑑』（2013～2022）では、部下に25歳の女性を紹介させる45歳の男性や、親戚の集まりの中で25歳の女性を「ババア」扱いし、22歳以下の女性と付き合いたいと口にする40歳の男性が気持ち悪い男として成敗される（1巻）¹。彼らの気持ち悪さとは、前者は「ボクチン非処女はキライツ」という発言で表現される処女性の信仰や（1巻）、後者を批判して「相手するなら若い子のほうが絶対いいですよ」「だって／そのほうがバカがバレなくて済みますもんね／若い子相手ならあさ～～～い知識しなくても　なんかエラそうにできま

¹ 本稿では、複数巻あるマンガからの引用情報を（巻号、ある場合はページ番号）の形式で示す。

すしね?」と女性が言語化するような（1巻）、優位な立場で支配したいという願望、そして両者に見られる、自らの加齢は棚上げする一方で年を重ねた女性は価値がないものとみなし、自分にふさわしいのは20歳ほど若い女性と考える加齢に関する二重基準である。女性にのみ厳しく貞操を求める性の二重基準や、優位な立場から相手を支配したいという欲望も、家父長制を支えるミソジニーの表れである（上野, 2018, pp. 47-58, p. 174, pp. 277-278）。この現実には若い女性と交際を望む中年男性の欲望と家父長制的価値観の親和性に対する認識の中で、現実の関係性に対する忌避の感情との折り合いはどのようにつけられるのだろうか。その検討には女性向けポルノグラフィに関する研究の知見が役に立つかもしれない。

女性向けのポルノグラフィマンガには、女性が恐怖を感じずに楽しめるような工夫がされている（守, 2010, pp. 110-124）。それは例えば、レイプファンタジーを扱う際に、「絶対に現実には起こってはいけない」といったコメントが補足されることや、あるいはマンガという形式によって生身の人間の身体から切り離すといった方法である（守, 1999, p. 177）。そして、このマンガという形式において、登場人物が会話する声ではない「内面のモノローグ」²という、「マンガの主となる登場人物の音声化されない心情を言葉によってコマの内部に書き込む手法」が多用される（守, 2010, p. 141）。この内面のモノローグにおいて、行為の最中や行為に至るまでや事後の女性の心情が補足されたり、男性側の愛情が描かれることによって、それが一方的な暴力行為で女性が傷つけられたという物語ではないことが示される（守, 2010, pp. 144-148）。そうした表現を通じて、「女性の側からの意味付け」を徹底的に描くと同時に、「ポルノグラフィに描かれるセクシュアル・ファンタジーを、現実世界に属するものではなくあくまでも幻想世界にとどめようとする」のである（守, 1999, p. 176）。

ポルノグラフィは女性に対する暴力を描くと単純な社会還元的視座から批判されることに対して、「現実ではなく幻想だという前提の下で議論を進め」（守, 1999, p. 179）、ポルノグラフィに現れる「特定の構造が持つ意味を読み解」き、「現実と関係を持つ別種のReality」として、ポルノグラフィが「現実とどのよう

² 本稿では、内面のモノローグを山かっこくを用いて引用する。

に關係しているのか」考察すべきという主張がされる（堀，2009，pp. 28-29）。そのような営みによって、女性たちが魅了され享受してきた恋愛の物語や女性が主体的に選択した欲望とその事実を、家父長制的な性規範の「証拠」としてではなく検討することが可能になる（堀，2009，p. 41）。

ポルノグラフィ同様、女性向けマンガに描かれる現実では好ましくないアプローチや関係性も、従来の「共感」を基盤とした読みから、幻想の物語として楽しめるものという視点から検討することが妥当ではないだろうか。以下、第3節ではヒロインと結ばれる中年・初老の男性像とはどのような人物であるのか外見のデザインの点から検討し、第4節では女性向けポルノグラフィの幻想とリアリティに関する知見を踏まえつつ、「年の差」ジャンル特有のコードを分析することで作品に描かれる欲望を検討する。

ヒロインと中年や初老の男性が結ばれる物語はおよそ2000年代末からメジャーとなる。西炯子の『甥の一生』（2008～2010）やヤマシタトモコの『Love,Hate,Love.』（2009）、おかざき真里の『&』（2010～2014）をはじめ、20代や30代の女性ヒロインと40代から60代の男性が結ばれる作品が複数描かれ、2011年にはマンガ配信サイトのコミックシーモアで「オヤジ」と20代や30代の女性の恋愛に特化して扱う雑誌『オヤジズム』が創刊された。ジャンル成立の背景を特定することは困難だが、BL誌上でも、2010年代以降、外見上中年男性とわかるキャラクターが年齢差カップルの物語の中で増え、そのエポックメイキングな作品としてヤマシタトモコの『くいもの処 明楽』（2007）が挙げられることを踏まえると（堀・守，2020，p. 67）、ジャンルを超えて女性向けマンガで登場した表象と理解できる。若いヒロインと中年・初老の男性の恋愛の物語のヤングレディーズ誌での連載のピークは2010年代半ば頃までだが³、その後、TL（ティーンズラブ）⁴という恋愛をテーマとした少女マンガに性描写が含まれる作品（堀，2009，

³ ただし、集英社『Cocohana』で連載された八神星子の『熟×彼』（2022～2023）をはじめ今までジャンルとしては存続している。

⁴ 1970年代末に登場した少女マンガを卒業した年齢層の女性を対象とした「大人の恋愛」を描くレディーズコミックが、その後、性描写に重点を置かないヤングレディーズと過激な性描写を扱うレディコミに分かれた（堀，2009，pp. 73-74，pp. 106-110）。TLは1990年代後半から2000年代初頭に成立したレディコミより若年層を対象としたジャンルで、絵柄は少女マンガのトレンドと近似性を持ち、性描写はレディコミのようなハードなものではない（堀，2009，pp. 106-110）。

p. 74) で2020年代まで描かれ、ドラマ化⁵もされている。こうした背景を踏まえ、本稿では主に2000年代後半以降の作品に描かれるヒロインと結ばれる中年や初老の男性像を検討する。

3 外見と年齢

少女マンガの男性像について、1960年代以来常に容姿のよさを前提にしていたのに対して、1970年代のウーマン・リブの興隆と1986年の男女雇用機会均等法の施行を背景に女性の社会進出が進み、ライフスタイルの選択肢が増えたことで、「白馬に乗った王子様」が「唯一の正解」という制約を受けなくなった結果、イケメン像が多様になったと指摘される（岡本, 2015, pp. 119-125）。「日本人離れした」イケメンが減り、「読者の生活圏内にいそうな、手の届く存在に」なる（岡本, 2015, p. 129）。年をとったイケメンはこうしたイケメン像の変遷の中に位置づけられる（岡本, 2015, p. 129）。そして、イケメンの幅が広がったと言っても、そこには「最低限の「イケメンのコード」が存在する」（岡本, 2015, p. 128）。それは、「彫りの深さ、鼻の高さ、目の大きさ」などに関する「アングロサクソン系を下敷き」としたものであり、「かつての少女マンガが重用した「白色人種の王子様」の系譜上にある人物像である（岡本, 2015, p. 128）。とはいえ、これは中年や初老の男性像に特化した議論ではない。本節ではヒロインと結ばれる中年や初老の男性の姿をより詳しく検討したい。

3-1 例外的な優れた容姿

若い女性と中年男性の恋愛を描いた作品の先駆けとして、2004年から2009年に講談社『Kiss』で連載されたひうらさとの『ホタルノヒカリ』が挙げられる。27歳の雨宮螢は会社の後輩との交際を経て最終的に41歳の高野誠一と結ばれる。雨宮は高野を「40男」「オヤジ」「クソオヤジ」「オッサン」と表現し（1巻, pp. 16-20）、高野も自身を「オヤジ」（1巻, p. 41）と言い、高野が中年男性であることが強調される。しかし、高野は顔や首にシワがなく髪も黒くスタイルもよく、設定こそ中年だが20代のキャラクターと比べても外見上の老いがほとんど

⁵ 例えば、本稿3-2で扱う作品はどれも2020年から2023年にかけてテレビドラマ化されている。

ど描かれない。その後、主に2000年代後半から2010年代に大手出版社のレーベルに掲載される作品群では年齢が明確に外見に反映される。

小学館の『月刊フラワーズ』で2008年から2010年に連載された西炯子の『甥の一生』で30代半ば過ぎの堂蘭つぐみと結ばれる51歳の海江田醇には顔や首筋にシワが描かれ、あばらの出た筋肉のない体型といった明確に外見上の老いが描かれている。同様に、祥伝社の『FEEL YOUNG』で2009年に発表されたヤマシタトモコの『Love,Hate,Love.』のバレエ教室で教える28歳の江宮貴和子と結ばれる52歳の縫原桂介も、やせ型で首周りのシワとこけた頬と頬骨の凹凸や眉間やこめかみのシワが描かれる。縫原が「——あなたの知ってる男にはくは大きく見劣りするだろうな」と、江宮の前で裸になることで自身が「傷つく可能性が怖くな」り交際をやめようかと口にするように、縫原は江宮と同世代の男性と自身の体型を比較し、自身の老いた身体に自信をもてない。同じく『FEEL YOUNG』で連載されたおかざき真里の『&』(2010～2014)で26歳の医療事務とネイリストをかけもちする青木薫と交際し別れる矢飼黄河45歳もやせ型で頬骨の凹凸とこけた頬や無精ひげが描かれる。矢飼の同僚で矢飼よりも若い赤坂や青木の後輩で青木を取り合う城田孟司の髪が黒く塗られることと比べると、白で描かれる矢飼の髪は白髪を思わせる。青木から服を脱ぐよう乞われた際に「ダメ」と断り、〈40も後半になってそんなにホイホイ脱げるかよ／いろいろと／中学の頃とは／いろいろと違うぜ [自転車を] 2人乗りしても!〉とその心情が描かれるように(2巻)、矢飼は身体の老化を気にして、20代の青木の前に身体を晒すことを避ける。矢飼の身体は、やせ型で大胸筋のなごりも描かれるがあばらが浮き出ている(5巻)。講談社の『Kiss』で連載されたアキヤマ香の『長閑の庭』(2014～2019)で、大学院生で23歳の朝比奈元子と結ばれる指導教官の榎郁夫64歳は、頬がこけ、目の周りのシワが年齢を表しており、ほうれい線が描かれ、榎が若いときのデザインと対比しても首から顔が全体的に筋張っている。合宿のときに足を滑らせて海に落ちた朝比奈を助けに34歳の田中が迷わず海に飛び込んだのに対して、「田中くんの機敏さに自分の歳を感じ——／情けない気持ちになった」と語るように、自分より30歳ほど年下の田中の若い身体と比較して、榎は老いた自身の身体に劣等感を抱いている(2巻, p. 101)。田中の腹筋は割れている(2巻, p. 46)。

総括すれば、こうした人物は、肉が落ちこけた頬やはっきりと描かれる顔や首筋のシワ、筋肉のない体型によって老いが描かれる。「よく漫画に登場する「なんちゃっておじさん（自称おじさんの割に、若くてかっこいい）」とかじゃなくて、本当におじさん」と評される縫原をはじめ（ヤマシタ・三浦, 2015, p. 28）、従来の人物像と比べ彼らは視覚的に明確に老いている。顔や首にシワが描かれ筋肉質でなく、時に体型に自信がない様子からは彼らが自らの老いを自覚する人物であることがわかる。

とはいえ、彼らもモブキャラの中年男性とは明らかに異なる容姿をもつ。例えば、『甥の一生』の海江田の同級生は髪が後退し額が広く、バーコードヘアの人物もいる（2巻, p. 170）。さらに、同級生は中年太りで二重顎や頬肉が盛り上がっていたり喉ぼとけが極端に出ており、海江田の直線的なキリとした眉に対して彼らは短く薄くなった眉や垂れさがった眉をし、鼻筋の通った海江田に対して鼻が丸かったり大きかったりするなど、明らかに造形が異なる（2巻, p. 170）。それを見てつぐみが〈……そうか 52ってそういう年だな／…あんまり年齢のことを意識したことなかったけど…世の52にくらべたらずいぶん……?〉と考えるように（2巻, p. 170）、海江田は同世代の人と比べて年齢を感じさせない、若く優れた容姿をもっている。『Love,Hate,Love.』の縫原も、江宮のアルバイト先のバーのマスターが無精ひげを生やし丸みを帯びた体型で眉が下がり鼻筋がはっきりと描かれぬのに比べると、明らかにすっきりと整った顔をしている。江宮が〈顔がスキ〉と思う様子も縫原の顔が優れていることを想像させる。『長閑の庭』の榎も、同僚はさがり眉で鼻は省略されて描かれず（4巻, p. 22）、生え際が後退し腹も出ているのに比べると（4巻, p. 151）、鼻筋や眉が整っており、一卷の冒頭で朝比奈が〈のびた背筋〉と説明するように背筋も伸びている（1巻, p. 3）。すなわち、彼らは総じて他の中年や初老の男性とは眉や鼻の形や体型などの点で明らかに異なる容姿で描かれている。

少女マンガに描かれる男性の身体の変遷をたどれば、西谷祥子や水野英子、そして手塚治虫の『リボンの騎士』に見られるような「線の細い、夢幻のような」肉体のない王子様からはじまる（藤本, 1999, p. 24）。それは「女性が男装したような、スマートでヒゲも生えず汗もかかないような、性のないような存在」である（萩尾, 2021, p. 123）。その後、岸裕子の『玉三郎恋の狂想曲』や名香智子の

『花の美女姫』、そして木原敏江の『摩利と新吾』の前身となる『あ〜ら わが殿!』といった1970年代前半の作品になってはじめて男性の身体が性的に対象化される(藤本, 1999, pp. 24-25)。池田理代子の『ベルサイユのばら』の美少年アンドレには大胸筋が描かれる(藤本, 1999, p. 25)。1980年代からセックス描写を当たり前前に描くレディースコミックが登場するが、少女マンガの男性身体を表象にさほど変化は訪れず(藤本, 1999, p. 27)、彼らの身体は、筋肉が描かれつつもボディビルダーのようなリアルな骨格や筋肉が描かれるのではなく、どこか中性的な肉体として描かれる(藤本, 1999, pp. 26-27)。

外見上の老いが描かれる男性たちも、モブキャラの男性と比較すると、少女マンガのいわゆる王子様もつ外見と身体に近い容貌をもつ。老いが描かれる男性たちの加齢に伴う筋肉のない身体は、より男性性をどこかそごおとされた存在として描かれる。『婿の一生』の著者の西炯子は、耽美を特徴とする『JUNE』で連載された「ケーコタンのお絵描き教室」という竹宮恵子が一般読者の絵を講評する企画に毎号投稿し、絵を学んだ(倉持, 2020)。そのような西に描かれる海江田をはじめ、中年・初老の男性はどこか中性的な存在であり、現実の男性の加齢との切り離しを可能にする。

3-2 記号としての年齢

他方で、2010年代末から、主にマンガ配信サイトで電子コミックとして発売された作品群では、年齢自体は中年と位置づけられながらも、実質的に非常に若い外見をもった人物が多くを占める。forcsの『Fizz』で連載されたさんずい尺の『全力で、愛していいかな?』(2020~2023)で篁千世30歳と結ばれる瀬尾一愛45歳や、めっちゃコミックの『G★Girls』で連載された中間淳生の『年の差婚』(2018~2021)で村上舞衣子29歳と結ばれる花里晴海44歳は、設定こそ40代半ばで、瀬尾は篁に「オジさん」世代と表現され(1巻, pp. 1-2)、花里は舞衣子のはとこの理音から「中年」「初老」「おっさん」と表現されるが(2巻)、実際のところ彼らの加齢を示す徴は、鼻根と目頭の間に描かれた一本の直線的なシワのみであって、肌や輪郭については加齢が描かれない。マンガよもんがで連載された志茂の『部長と社畜の恋はもどかしい』(2019~2024)で20代後半の丸山真由美と結ばれる提司治にいたっては30代後半だがシワもない。同作で23歳の三森

と結ばれる諫山41歳もこけた頬によって年齢が描かれるがシワはない。コミックシーモアの『オヤジズム』で連載された『家政夫のナギサさん』（2016～2017, 2020）は、ドラマ化に伴う2020年の再連載では老いが明確に描かれるようになるが、当初の連載では、20代後半の相原メイと結ばれる46歳の鳴野ナギサの老いは、主に眉間と目の下から頬にかけてのシワによって描かれ、ほうれい線や頬のこけはしばしば消える。

そうした彼らは身体的にも筋肉質だ。『家政夫のナギサさん』を除いて、ここで挙げた作品は性描写を含むTL作品である。老いが明確に描かれる作品の男性たちがどこか中性的な身体をしているのとは異なり、行為に当たり露わになる彼らの上半身には、総じて大胸筋や腹筋が描かれる。顔や首に年齢があまり描き込まれない彼らは、身体には外見的な老いが全く描かれぬ。彼らにとって老いと単なる設定にすぎず外見には反映されない。たいてい彼らは背が高く、体臭（加齢臭）がないどころかよい匂いさえする。『部長と社畜の恋はもどかしい』で三森が諫山を意識するきっかけは、〈めっちゃいいにおいがした〉からであり（3巻, p. 146）、エレベーターで一緒になった際も〈やっぱり諫山さんいい匂い…〉と繰り返されることで（4巻, p. 20）、諫山が見た目はもちろん体臭においても加齢に伴う問題とは無関係な人物であることが強調される。

3-3 「老い」の実際

このように、身体をめぐる様々な角度から他の中年や初老の男性と描き分けられる彼らには、さらに社会的地位や高い仕事能力と順調な出世、そしてそれらに伴う安定した収入が約束されている。『全力で、愛していいかな?』の瀬尾は副社長で、『&』の矢飼は医師で、『甥の一生』の海江田と『Love,Hate,Love.』の縫原と『長閑の庭』の榎は大学教授で、『部長と社畜の恋はもどかしい』の提司と諫山はそれぞれ大企業の管理職で、『家政夫のナギサさん』のナギサも、もとは大手製薬会社のMRで、自ら家事代行業に転職したのちも仕事能力が高く評価される様子が描かれる。その上、手際よく家事を行ったり、ヒロインのよき相談相手となる様子は、イケメンの定義が拡大したり、「三高」からより日常的な存在へと理想が変化する時代にあって、いわゆるBLや少女マンガに描かれる理想的で非のうちどころのない男性、スーパーダーリン、「スパダリ」のよう

ある。実際、『部長と社畜の恋はもどかしい』で丸山は、仕事の相談にのり、料理もでき、包容力も性的な魅力もある提司に、「治さんって本当に私のスーパーダーリンですね」（2巻, p. 151）と口にする。このように、設定は中年でも外見に老いが描かれない提司がわかりやすくスパダリとされるのに対して、老いを外見に描き込まれる人物は、その外見上の老いをもってスパダリというキャラクターの都合の良さや秀でた理想としての姿を、より身近な存在であるかのように錯覚させる効果をもつかもしれない。

ヤマシタは縫原を年上に設定した理由を「対抗意識や攻撃性のない」「優しい男の人と設定するため」に必要な条件だったと語る（ヤマシタ・山本, 2024, p. 195）。「無条件に優しい男の人を出すと、「こんな人いない」になってしまうし、いるとして描くなら何かしらの」「裏付けがないと架空の存在がすぎるかな」という気がしたのに加えて、「あまり夢物語すぎないロマンスを描くときに、ただただ無条件に優しい男性を説得力を持って描けるかといわれると、それはとても難しいことのように感じた」ことから（ヤマシタ, 2024, pp. 195-196）、夢物語ではないけれど、でもいてほしい優しい男性像を描くために、縫原は中年の男性となった。彼らの身体に描き込まれる老いは、もはや優しい理想的な人物を夢物語から現実にいるかもしれない人物へと日常に近づけるための方法であり、現実の中年や初老の男性とは別の人物である。そうであるにも拘わらず、老いが外見上に描かれていることで、あたかもリアルな人物であるかのように錯覚させるこれらのキャラクターは、現実の自らの加齢を脇に置いて若い女性との交際を望む中年や初老の男性を暗黙裡に物語から締め出すことを可能にし、読者が物語にスムーズに耽溺することを可能にする。

4 暴力のリアリティを消す手法

外見に老いを描かれない人物はもちろん、外見に老いが描かれる人物も、一見リアルであるかのような老いは実際には加齢一般と切り離されており、むしろ彼らが都合のよい理想的な人物であることを無理なくリアルに演出するための一つの手段だった。では、セクシュアル・ハラスメントや性暴力に該当し得るようなアプローチや関係性、あるいは若い女性との交際を希望する男性の欲望と親和性の高い家父長制的価値観については、どのように幻想とリアリティを交渉させる

のだろうか。結論を先取りしてしまえば、それには内面のモノローグを通じた再意味付けといった女性向けポルノグラフィと似たような手法が用いられている。とはいえ、それに終始するものではなく、少女マンガに定番のコードを踏襲しながら、「年の差」恋愛ジャンルのコードとも言えるかもしれないものが存在する。本節では、若い女性と中年や初老の男性によって構成される恋愛のストーリーに通底する幻想のコードを見ながら暴力との交渉を検討する。

4-1 内面のモノローグ

まずは、内面のモノローグを通じた物語化である。小学館『プチコミック』で連載されているみつきかこの『ラブファントム』（2014～）のヒロイン23歳の平沢百々子と38歳の長谷慧の関係は、両者の勤務先のホテルの空中展望台で出会った際に、突然長谷が平沢にキスをしたことからはじまる（1巻, p. 18）。同意なく突然キスするのは暴力であるし、ホテルのテナントのカフェの店員の平沢とホテルで働くエリート社員の長谷は、直接の上司部下関係ではないが長谷が優位な立場にいる。しかし、その行為に続くのが、頬を赤らめた平沢が、〈何？／唇／軽く触れただけなのに〉、〈凍りそうに寒い／なのに———／けてしまいそう〉と、平沢にとって驚いた経験ではあったが嫌な経験ではなく、むしろ恋に落ちる経験と感ずる様子が内面のモノローグを使って描かれ、翌日も〈信じられない／あんな自分がいたなんて…！〉、〈…あの人の最初のキスで何かがぶっ飛んじゃった感じ……………〉と、やはり長谷の行為は不本意ではなく快樂の経験として描かれる（1巻, pp. 18-23）。翌日、今度は平沢から長谷にキスをし、「キスを…もっと…したくて———」という言葉に続くように（1巻, pp. 36-38）、内面のモノローグを通じて、平沢にとって見ず知らずの長谷からの突然のキスは暴力ではなく快樂の経験であり、望ましいものであることが繰り返し示される。同意のないキスがヒロインの内面のモノローグによって恋に落ちる瞬間へと意味付けられることで、暴力ではなく恋のはじまりとなる。さらに、長谷に突然キスされたことを平沢が「人生トップ3に入るやらかし」（1巻, p. 24）と表現しており、優位な地位にいる相手の行為ではなく自身の行為として理解している様子が描かれる。このように、女性向けポルノグラフィと共通する内面のモノローグを通じた出来事の再意味付けは暴力のリアリティを消す一つの手段と

なっている。

4-2 脱性化

続いて、「年の差」ジャンル特有のコードである。まず挙げたいのは脱性化した男性像である。年の離れた女性との交際を理想とする男性の欲望に沿うようなマーケティング系の恋愛解説本は（大屋, 2009; 諸富, 2011）、中年男性の魅力を「草食系」の若い男性と比較して性に積極的で性欲旺盛である点から語る。しかし、作品にはむしろ脱性化した存在としてヒロインに認識されていたり、男性自身が自らの性機能の低下を口にする様子が描かれる。

『家政夫のナギサさん』は、帰宅したメイが玄関のドアを開けた際に〈知らない男がブラジャーを持って立っていた〉という場面からはじまり、それに対してメイは叫び声をあげる（1巻, p. 5）⁶。メイの家事能力の低さを心配して家政夫を契約したことを妹のユイが告げると、「嫌よ！絶対嫌!!」「男の人なんて下着とか色々問題あるじゃない」とメイは拒絶し、それに対するナギサの「70B [のブラジャー] を見ても特に思うところはないです」という発言に、メイが青ざめた顔で言葉を絶して衝撃を受ける様子が描かれる（1巻, p. 7）。業務過程で下着に触れることがあっても事前に許可をとり必要最低限にすべきであり、バストサイズを把握し口にすることは程度を超えている。そうしたナギサの言動に対して、メイが叫び声をあげ絶句することからは、それが不適切な言動と作品内でも認識されていることが示される。このブラジャーをめぐるやりとりはナギサがメイに好意を告げる場面で繰り返される。「最初は確かに興味がなかったんですが／困ったことに最近意識してしまうようになって」「70Bの話です」というナギサの発言に、メイは〈!? !?〉と再び驚くがそれは赤面する反応であり、続いてナギサが「親子ではなく／ただの男女の間でも／「お母さん」と呼ぶ関係はあったな」と言うのに対して（1巻, p. 204）、「じゃあその私達／…結婚しますか」とメイは口にする（2巻）。なぜ、同じようにブラジャーのサイズに言及することが今度は結婚の話に至るのだろうか。その理由としてナギサが脱性化された存在としてメイに認識されていくことが推測される。下着を洗濯ネットに入れて出すように

⁶ 『家政夫のナギサさん』は書籍の出版が1巻のみであるため、1巻は書籍から、2巻はKindle版から引用する。

頼むナギサに対して、どうせナギサがやってくれるだろうと答えるメイの姿には(2巻)、メイがナギサを性的な存在として認識していない様子が見られる。また、メイはナギサを「お母さん」と認識するようになるが(1巻, p. 88)、女性をめぐる性の二重基準において「母」とはまさしく脱性化された存在である。そうであるからこそ、ナギサとの結婚を報告した際のユイの「帰って掃除と無駄毛処理しな!」という言葉に、「……毛／無駄毛処理が…必要なシーンって…／果たして来るんですか…／ね…」と、性行為をする可能性があることに驚き、またナギサからの将来子どもを望むかどうか話し合わなくてはいけないという言葉に、硬直し〈…いや待って／子供ってことは作る過程もあるってことで／待って待って男の人って何歳くらいまで生殖能力あるの?／そもそもナギサさんって／本当にそういうことを／したいって思っているの?私と?〉と、性行為の可能性を考え赤面しパニックする反応になる(2巻)。

こうした、ヒロインの想像が性的なことにまで及んでいない様子は『長閑の庭』でも描かれる。カフェで目の前に座るカップルがキスをする様子を見て、朝比奈は〈だったら私は…教授とああなりたいたのかしら…〉と想像し、〈ひゃああああ〉〈たっ確かになりたくないわけじゃない(触れたいと思うくらいだから)／でもでもキスとか!キスとか!!／待って!!キス　そしてそれ以上のひゃあああなことは“恋”なの!? “欲情”というのでは!?　ならば“恋”ではない!?〉と、榊とのキスや性行為を想像してパニックになる(4巻, pp. 11-13)。グリム童話を研究している朝比奈はしばしばグリム童話を参照しながら恋愛を考える。グリム兄弟がメルヒェンから性的な描写を削ったように(タートル, 1990)、朝比奈から榊への感情に関して、性的なことがらはほとんど描かれず、朝比奈と榊の関係性における身体の接触は手の接触に集約され、抱き合いキスする場面は一度描かれるが(7巻, pp. 148-155)、性行為はその行為の存在を示唆するような描写もない。むしろ、榊との交際を朝比奈に打ち明けられた同級生の富岡樹里が〈うーんなんか想像したくない…　つかどーなのこの年の差!!〉と(6巻, p. 152)、榊と朝比奈の性行為を想像して気持ち悪くなる様子が描かれるように、二人の性行為は想像すらも忌避される。

先述したように、設定として中年であっても外見に老いが描かれない作品には性描写が描かれるのに対して、男性の外見に老いが描かれる作品では性行為がほ

とんど描かれなかったり、『&』の矢飼のように行為に際しては着衣の状態で描かれたりする様子は、若い身体と老いた身体の性行為を視覚から消し去る。特に、『家政夫のナギサさん』の仕事を紹介したはずの関係性や『長閑の庭』の教員学生間という実社会であればセクシュアル・ハラスメントと親和性の高い関係性においては、性行為の可能性すらも周到に取り除かれている。

さらに、性行為の描写を含む作品でも性欲旺盛とは言い難い様子が描かれる。『甥の一生』で海江田が、行為より先に食事をとろうとするつぐみに、「…キミはわかってへんな メシなんかあとやろ 50越えた男を30代と同じやと思うなよ」、「もうなあ一回一回が大事なんや ぞ」と言う描写や（2巻, p. 45）、『&』の矢飼が行為後に「すみません2回目もないですから／年だからごめんね」と言う描写からは（4巻）、加齢に伴う性機能の低下を自覚する様子が見られる。彼らの様子は、中性的なデザインによって現実の中年や初老の男性の身体と切り離すだけでなく、女性の価値を若さに見出し、いつまでも若い女性にモテる強い男であることを証明するためにバイアグラで性欲を維持するような「気持ち悪」い男性像（田中, 2015, pp. 73-78）との切り離しを可能にする。

4-3 女性の選択と主体化

最後に、「年の差」恋愛を描くコードとして無視できないのが選択を通じた女性の主体化である。ほとんどの少女マンガに共通することとして、ヒロインが最低でも二人の男から愛される設定がある（横森, 1999, pp. 29-31）。二人の男は、髪の色や髪型、性格や生き方など多くの点で対照的であり、しかし、どちらに転んでも大丈夫なように設定されている（横森, 1999, p. 31）。若い女性と中年・初老の男性の恋愛を描く作品には必ずと言っていいほど、中年・初老の男性とヒロインを取りあうヒロインと同世代や年下などのより年齢の近い男性が描かれる。『甥の一生』のつぐみの元同僚の中川、『Love,Hate,Love.』の江宮のパレエ仲間、『長閑の庭』の助手の田中、『&』の青木の大学の後輩の城田猛司、『ラブファントム』の平沢の後輩の相良淳平、『全力で、愛していいかな?』の筐の職場の元上司の紅山、『年の差婚』の舞衣子の年下のはこの理音、『部長と社畜の恋はもどかしい』の丸山の同期の拜島や三森の同期の草野などである。妻子持ちの中川や、職務上の関係性を利用して無理やり迫り、断られたら悪い噂を流す紅

山など有害な人物もいるが、多くの場合は、少女マンガのお約束事を踏襲し、当初はヒロインにアプローチしつつも、最終的に身を引き、ヒロインが中年・初老の男性と交際することを応援する。中川や紅山との対比の中で海江田や瀬尾との交際が幸せに見えることは言うまでもないが、同世代と付き合う可能性もあったヒロインがそれを断り、中年・初老の男性との交際を選ぶという行為は、彼女たちの交際を主体的なものとして演出する。

まずは有害な人物との対比において、中年・初老の男性が正しい交際相手に見えるパターンについてである。『甥の一生』の妻子持ちで離婚を匂わせてつぐみを不倫相手にする中川に比べたら、独身で浮いた話もなく好意を隠さず結婚を申し込む海江田との交際は、つぐみの友人や母が好意的にとらえるようにわかりやすく好ましい（1巻, pp. 96-97, pp. 177-183）。また、『全力で、愛していいかな』で紅山との対比は、権力の非対称性について瀬尾一花が誠実に向き合う人物である様子を演出する。デザイン部に憧れていた篁千世は、デザイン企画部部長の紅山と仕事上の付き合いを続けていたが、紅山に強引にホテルに連れ込まれそうになる（1巻, pp. 151-153）。篁がそれを断った結果、紅山は会社中に篁からしつこくアプローチがあって困ったという噂を広める（1巻, pp. 153-154; 2巻, pp. 4-7）。対して、そもそも篁と瀬尾は職務上の関係はないだけでなく、作品には瀬尾が年上で裕福で副社長という社会的地位もあることを反省する場面がしばしば描かれる。瀬尾の告白に返事をしたその日のうちに性行為をすることになった出来事を、「[紅山と] …同じようなこと避けたかった」と振り返る瀬尾に、瀬尾の友人は、「もしかして一愛ちゃんに付度したんじゃない？」（1巻, pp. 96-97）と指摘する。それは、ホテルのレストランでのディナーデートに際して篁にワンピースを買い与えたり、そのレストランの朝食がおいしいと話題をふる瀬尾の行動が、高価な贈り物と宿泊を含むデートを予定しているかのように受け取られ、篁にプレッシャーを与えたのではないかという指摘だ。指摘を受けた瀬尾は、「か…仮にそういう思いをさせたのなら／もう二度と千世ちゃんに強いるような負担を絶対にかけない！」と反省する（1巻, p. 99）。さらに、二度目の性行為の後、再び行為を強いてしまったかもしれないと相談する瀬尾に対し、「僕らみたいなオッさんたちが君らのベッド事情をアレコレ話し合うのってさ／千世ちゃんからしたらか・な・りっ気分が悪くなるんじゃない

いかな？」と、プライベートなことを許可なく他言することの問題性を友人がたしなめ、瀬尾が反省する様子が描かれる（1巻, pp. 132-134）。根も葉もないうわさを流し篋を追い込む紅山との対比において、学習し反省する瀬尾は誠実な存在として演出される。ヒロインと同世代のどうしようもない男性と対照的に描かれることで、中年や初老の男性との交際が好ましいものとして可視化される。

続いて、同世代からのアプローチを断り中年・初老の男性との交際を選択することが、ヒロインの主体性の発露へと繋がることについてである。『長閑の庭』の朝比奈は常に他人の顔色をうかがい、決断を他人にゆだねる。朝比奈は榊に対する自分の感情を恋であるのかそうではないのか悩み続ける。榊からの師弟愛だという言葉や（2巻, pp. 137-139）、榊の元妻の朝霧による朝比奈の感情は恋であるがそれは自分勝手なものだという指摘（4巻, p. 32）、あるいは、母親の「無意識に素敵フィルターかけてない？／そもそも若い教え子に手を出す様な 理性に欠けた人じゃないの？」という指摘（7巻, p. 122）の中で、朝比奈は榊への感情に答えを出せない。そうした描写の後、朝比奈が榊への感情に向き合い、母に「どうしたいかを自分で決めて／結果がどうであれ後悔しない道は私は選ぶ／それが／今の私の生き方だと思う——」と話し（7巻, p. 141）、榊に対しても「私は!!／これからの事を何もわかっていないのかもしれない！ それでも教授と一緒にいたい！／喜びも痛みも共有したいんです！／迷惑だなんて感じる訳ない！勝手に決めつけないで！」と迫るように（7巻, p. 149）、朝比奈と榊が結ばれることは、朝比奈が自身の感情を他者の判断や評価にゆだねることなく表明し追求した結果として描かれる。そうした朝比奈に対する母親の「好きにすればあ？」「もうお母さんは 見守る事しかできなくなっちゃったのね……」（7巻, p. 142）という言葉には、朝比奈と榊の関係性は、指導教官と院生という権力関係をめぐる問題系ではなく、本人の決断をめぐる主体性の問題系の物語となる様子を見ることが出来る。

この女性の「選択」というフェミニズムと相性がよい概念は、90年代以降のフェミニズムの状況を表すポストフェミニズム批評において批判的に着目される。ポストフェミニズムは、フェミニズムの「解放」への志を部分的に受け継ぎつつ、新自由主義的な社会を背景に、許容可能なフェミニズムとそうではない

フェミニズムを区分けする（河野, 2024, p. 594; McRobbie, 2009, pp. 1-2, pp. 14-15）。2000年代以降の文化における性化の浸透の中で、女性は性的客体から性的主体へと移行するが、それは、女性自身の選択として行われる女性をエンパワメントであるかのように提示される（菊地, 2025, p. 77; Gill, 2007, pp. 150-153）。ポストフェミニズムの状況は、海野つなみの『逃げるは恥だが役に立つ』（2012~2017）や『家政夫のナギサさん』など女性向けマンガの世界にも波及している（菊地, 2025; 五十嵐, 2024）。朝比奈と榎のセクシュアル・ハラスメントと親和性が高く不適切な関係は、朝比奈が選択する物語と交差され、選択の物語が前景化し、権力関係に基づく暴力性が不可視化されることによって、あたかもフェミニズム的な女性の主体化の物語であるかのように錯覚することが可能になる。若い女性と中年・初老の男性の間に時として存在する権力関係の暴力性は、若い女性が他の選択肢もあったにも拘わらず、中年・初老の男性との交際を選択するという物語によって隠蔽する。

さらに朝比奈の選択は、病気で余命いくばくもない榎の退職によって、教員学生間の交際ではなく、死期が迫る人との交際を選択するかどうかという問題系にも変化していく。榎の退職と間もなく訪れる死は教員学生間の交際に付随するであろう様々な問題を都合よく忘れさせる。このようにヒロインが中年・初老の男性を選択するという過程は多面的に暴力を隠蔽させる。

なお、選択については、「年の差」恋愛もののお約束事として、中年・初老の男性と同世代の女性が登場するというものがある。多くの場合それは、『年の差婚』の花里の元妻の美雪、『長閑の庭』の榎の元妻の朝霧、『&』の矢飼の元恋人の真由美など、男性の元妻や元交際相手である。彼女たちの存在によって、男性たちは女性の価値を若さに求めて若い女性との交際を望む男性や、同世代に相手にされない男性ではなく、同世代との交際経験もある中でたまたま若い女性と交際するに至った男性となる。特に、『甥の一生』の海江田が30年ほど前につぐみの祖母とおよそ20歳差で恋愛関係にあったエピソードは、海江田が女性の老いを価値を下げるものととらえない人物であることがわかる。

5 おわりに：「年の差」恋愛ジャンルと女性の欲望

本稿では、女性向けマンガの若い女性ヒロインと中年・初老の男性の恋愛を描

く「年の差」ジャンルに関する幻想とリアリティの交渉を検討した。少女マンガやヤングレディースというジャンルは「共感」を根幹にするとされてきた。しかし、現実の若い女性との交際を望む男性の欲望とミソジニーな価値観の親和性の高さと、それに対する嫌悪感や問題意識が女性向けマンガの世界でも共有される状況からは、現実との間の別様の説明が必要である。本稿では、女性向けポルノグラフィの幻想とリアリティに関する視座を手がかりに、「年の差」ジャンルのコードを検討した。

まず、男性の容姿の分析からは二種類の男性像が明らかになった。顔や首のシワやこけた頬、筋肉が落ちた体型などによって加齢が外見に描き込まれる人物と、実質的に外見にさほど年齢が反映されない人物である。しかし、前者の男性も他の中年や初老の人物と比べると、キリッとした眉と鼻筋の通った顔、細い体型やのびた背筋という優れた容姿をもっている。加えて、ヒロインと結ばれる彼らは、仕事だけでなく家事も手際よく行い、ヒロインの相談にも親身に付き合い続ける人物であった。すなわち、彼らは老いが描かれることによってある種実際に存在しそうな人物だと錯覚させるが、実際には、老いさえ描かれなければ少女マンガのスパダリ像であることが明らかになった。

続いて、実社会であれば暴力と親和性の高い関係性や行為に関する幻想とリアリティの交渉を分析した。分析からは、ヒロインの内面のモノログによる再意味付けといった女性向けポルノグラフィと共通する手法が用いられるだけでなく、ジャンル特有のコードが存在することが明らかになった。老いた男性の身体から性的なものが切り離されたり、ヒロインの選択という行為を通じて、同世代の男性よりも中年・初老の男性の方が好ましい人物と描かれたり、ヒロインの主体性の物語として主題が前景化されるといった手法である。それらを通じて、ミソジニーな価値観や現実の暴力と切り離されることで、物語を楽しむことが可能になる。

現実を切り離し幻想を享受する営みは、現実の諸問題を棚上げする態度と考えることもできるかもしれない。現実の加齢と切り離された男性像は加齢を問い直すものではないし、『長閑の庭』のように選択の物語を通じて後景化された問題は時に宙づりにされる。加齢の二重基準に対抗するような物語の検討には、女性の加齢を描く作品などさらなる検討が必要だ。とはいえ、女性の価値を若さに見

出すような男性の欲望に回収されず、むしろそうした期待を一蹴するような幻想の物語の様相を明らかにすることは、家父長制の証拠としてではない、女性たちの欲望への理解を提供する。

作品内でしばしばヒロイン自身が年の離れた男性との恋愛を葛藤する。『Love, Hate, Love.』で、「正しさ」に照らし合わせたら好ましいとされない縫原との交際に江宮は葛藤する。そうした葛藤は位相を変え、現実だと肯定することが困難な関係性が描かれるジャンルへの葛藤につながるのかもしれない。本稿で行った、家父長制的価値観に親和的な若い女性に対する年長の男性の欲望や加齢に関する二重基準に還元されるのではない幻想としての「年の差」ジャンルの様相と、それを支えるコードを読みとき言語化する営みは、葛藤を超えて、江宮が至る〈あなたをスキでいられてそれをあなたに打ちあける／…それはたぶんとても幸運なこと〉という境地にも似た、葛藤を伴いながらもこのジャンルが人々を惹きつけるものであることを言語化することへとつながるのかもしれない。

References

- Ghaznavi, C., H. Sakamoto, S. Nomura, A. Kubota, D. Yoneoka, K. Shibuya, and, P. Ueda. (2022). Fish in the Sea: Number, Characteristics, and Partner Preferences of Unmarried Japanese Adults - Analysis of a National Survey. *Plos One*, 17 (2), 1-18.
- Gill, R. (2007). Postfeminist Media Culture: Elements of a Sensibility. *European Journal of Cultural Studies*, 10 (2), 147-166.
- McRobbie, Angela. (2009). *The Aftermath of Feminism: Gender, Culture and Social Change*. SAGE.
- Radway, J. A. (1984). *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*. The University of North Carolina Press.
- Snitow, A. B. (1979). Mass Market Romance: Pornography for Women is Different. *Radical History Review*, 20, 141-161.
- Sontag, S. (1977). The Double Standard of Aging. in Allman, Lawrence R. and Dennis T. Jaffe eds. *Readings in Adult Psychology: Contemporary Perspectives, 1977-1978 edition*. Harper & Row, Publishers, 285-294.
- アキヤマ香. (2014-2019).『長閑の庭』1-7, 講談社. (Kindle)
- 五十嵐舞. (2024).「バリキャリ女子の欠点?—『家政夫のナギサさん』にみる労働力の再生産とフェミニズムの脱政治化」堀川祐里編,『労働環境の不協和音を生きる—労働と生活のジェンダー分析』晃洋書房, 13-37.
- 上野千鶴子. (2018).『女ざらい—ニッポンのミソジニー』朝日新聞出版社.
- 大屋洋子. (2009).『いま20代女性はなぜ40代男性に惹かれるのか』講談社.
- おかざき真里. (2010-2014).『&』1-8, 祥伝社. (Kindle)
- 岡本由紀子. (2015).『現代少女マンガにおける女性労働表象の研究——一九七〇～二〇一〇年代の作品を中心に』早稲田大学文学学術院文学研究科博士論文.
- 尾崎衣良. (2015-2022).『深夜のダメ恋図鑑』1-10, 小学館. (Kindle)
- 菊地夏野. (2025).『ポストフェミニズムの夢から醒めて』青土社.
- 楠本まき. (2020a).『赤白つるばみ・裏 火星は鯖でできていて赤いのだ』集英社. (Kindle)
- 楠本まき. (2020b).「言葉／思考／記録／行動」『エトセトラ』4: 72-77.
- 倉持佳代子. (2020).「Column ① 竹宮恵子×西炯子——『JUNE』「お絵描き教室」が果たした役割」堀あき子, 守如子編,『BLの教科書』有斐閣, 35-39.
- 香月孝史, 上岡磨奈, 中村香住編. (2022).『アイドルについて葛藤しながら考えてみた——ジェンダー／パーソナリティ／〈推し〉』青弓社.
- 河野真太郎. (2024).「ポストフェミニズムとメディア」ジェンダー事典編集委員会編,『ジェンダー事典』丸善出版株式会社, 594-595.
- さんずい尺. (2022-2023).『全力で、愛していいかな』1-3, forcs. (Kindle)
- 志茂. (2020-2024).『部長と社畜の恋はもどかしい』1-11, ぶんか社. (Kindle)
- タートル, マリア. (1990).『グリム童話——その隠されたメッセージ』鈴木晶, 高野真知子, 山根玲子, 吉岡千恵子訳, 新曜社.
- 田中東子. (2024).『オタク文化とフェミニズム』青土社.
- 田中俊之. (2015).『〈40男〉はなぜ嫌われるか』イースト・プレス.
- 中間淳生. (2019-2022).『年の差婚』1-6, オンリーリップス. (Kindle)

- 西炯子. (2009-2012). 『甥の一生』 1-4, 小学館. (Kindle)
- 萩尾望都. (2021). 『私の少女マンガ講義』 新潮社.
- ひうらさとる. (2012). 『ホテルノヒカリ』 (講談社漫画文庫) 1-7, 講談社.
- 藤本由香里. (1999). 「少女マンガが愛でる男のカラダ——藤本由香里氏に聞く」『クィア・ジャパン』 1: 24-28.
- 藤本由香里. (2008). 『私の居場所はどこにあるの? ——少女マンガが映す心のかたち』 朝日新聞出版.
- 堀あきこ. (2009). 『欲望のコード ——マンガにみるセクシュアリティの男女差』 臨川書店.
- 堀あきこ, 守如子. (2020). 「BLの浸透と深化、拡大と多様化——2000年代～10年代」堀あきこ, 守如子編, 『BLの教科書』 有斐閣, 57-74.
- みつきかこ. (2015-2024). 『ラブファントム』 1-13, 小学館. (Kindle)
- 守如子. (1999). 「〈ポルノグラフィ〉批判とポルノグラフィを消費する経験との間で」『女性学年報』 20: 168-182.
- 守如子. (2010). 『女はポルノを読む——女性の性欲とフェミニズム』 青弓社.
- 諸富祥彦. (2011). 『【年の差婚】の正体——なぜ同世代に惹かれないのか』 扶桑社.
- ヤマシタトモコ. (2009). 『Love,Hate,Love.』 祥伝社. (Kindle)
- ヤマシタトモコ, 岩川ありさ. (2020). 「私たちを締め出さない物語」『現代思想』 48(4): 57-68.
- ヤマシタトモコ, 三浦しをん. (2015). 「「Love, Hate, Love.」。24歳差恋愛の縫原と貴和子について語り合う!」ヤマシタトモコ『ヤマシタトモコのおはなし本』 祥伝社, 22-35.
- ヤマシタトモコ, 山本文子. (2024). 『ほんとうのことは誰にも言いたくない』 フィルムアート社. (Kindle)
- 横森理香. (1999). 『恋愛は少女マンガで教わった』 集英社.
- 四ツ原フリコ. (2020). 『家政夫のナギサさん』 株式会社ハーバーコリンズジャパン.
- 四ツ原フリコ. (2020). 『家政夫のナギサさん』 1-2, ソルマーレ編集部. (Kindle)

Abstract

A Fantasy: Age-Gap Romance of Women's Manga

Mai IGARASHI

This paper examines the negotiation between fantasy and reality in the age-gap romance genre of women's manga, which features romantic relationships between young female protagonists and middle-aged men. Shōjo manga and the subgenre known as young ladies' comics have long been built around empathy, often aligning with readers' lived realities or offering scenarios readers may find appealing if real-world constraints are temporarily bracketed. The close alignment between men's desire for younger women and patriarchal values, including the double standard of aging, calls for a clearer account of how fantasy is produced and sustained and how the narratives in women's manga negotiate it and insulate it from social and embodied realities.

Building on frameworks developed in the study of female-oriented pornography, this paper analyzes the narrative codes of the age-gap genre in women's manga. The analysis first focuses on the depiction of male characters. Two types of male figures emerge: those whose aging is visibly inscribed through features such as facial wrinkles or physiques marked by age-related muscle loss, and those whose appearance shows few signs of aging. However, even the former are clearly distinguished from other supporting characters by traits such as a slim build, well-defined facial features and an upright posture. Furthermore, male characters who end up with the heroine are portrayed as highly competent not only in their professional lives but also in household chores and emotional support. These portrayals lend an air of plausibility by incorporating signs of aging, yet ultimately, they are revealed to embody the idealized "super-darling" archetype. The analysis then considers the relationships and acts that, in real-life contexts, could be regarded as forms of violence. Beyond techniques shared with female-oriented pornography, such

as resignifying potentially violent situations through the heroine's internal monologue, the genre employs narrative codes of its own. These include separating the sexual from the aging male body and shifting the narrative focus through acts of the heroine's choosing toward a story of her gaining agency. Through character design and plot, the narrative is thus constituted as a fantasy that can be enjoyed precisely because it is disentangled from patriarchal values and violence. Clarifying this structure also helps to articulate the ambivalence the genre provokes and its persistent appeal.

Keywords:

women's manga, age-gap romance, female desire, feminism, double standard of aging

2024年度ジェンダー・セクシュアリティ研究 レインボー賞受賞論文について

オリビエ・アムール＝マヤール

(2024年度選考委員長)

生駒夏美

(推薦コメント)

森木美恵

(推薦コメント)

「ジェンダー・セクシュアリティ研究レインボー賞」は、ジェンダー研究センターの設立に尽力され、2014年にご退職された田中かず子教授により創設されました。賞の目的は、本学に提出された学士・修士または博士学位論文の中で、優れたジェンダー・セクシュアリティ関連研究を表彰し、そしてジェンダー・セクシュアリティ研究の一層の発展を期待するものです。2024年度は、優秀な論文が複数推薦され、佐々木心優さんの学士論文「性をタブー視する意識と日本人元慰安婦に対する責任問題の関係性」と吉元咲さんの修士論文「現代日本におけるモノセクシズム—日本社会で暮らすバイセクシュアル女性への聞き取り調査から」とに決定しました。

佐々木さんの受賞論文は、第二次世界大戦後の日本人慰安婦というタブーに挑戦し、日本人慰安婦問題の隠蔽と当時新たに制定された保守的な性教育課程の関連について論じています。著者は様々な歴史資料と二次的資料を付き合わせ、新性教育課程を利用して慰安婦の当事者個人に責任転嫁することによって、日本政府が戦時中の慰安婦より不可視化されている戦後日本人慰安婦たちへの補償責任を回避した様子を分析しています。慰安婦問題と戦後の性教育を統合的に論じることはコントロールバーシャルであるが、だからこそ著者の熱意を評価するものです。これらの理由により、本論は2024年度のレインボー賞にふさわしいと判断されました。

吉元さんの論文は、モノセクシュアルな社会規範の中で生きるバイセクシュア

ルの人々が直面している課題や困難を的確に明らかにしています。本研究は、日本社会におけるモノセクシュアリズムを正面から扱った数少ない研究の一つです。理論的枠組みと、20名へのインタビューから得られた実証データをもとに、日本のみならず国際的にも十分に研究されてこなかったバイセクシュアリティというテーマについて、豊かで丁寧な分析を提示しています。本論文は、バイセクシュアリティそのものではなく、モノセクシズムを主要な批判対象として位置づけることで、今後の研究につながる重要な理論的貢献を果たしています。さらに、日本におけるパートナーシップや結婚制度に対する批判に加え、インタビュー協力者の語りに根ざした代替的な関係性のあり方を提案しており、将来のアクティビズムにとっても有益な示唆を与えています。バイフォビア、バイセクシュアルの消去、モノセクシズムに関する理論を、豊富な実証データと効果的に結びつけており、全体として文章も明瞭で、論旨もよく整理された完成度の高い研究です。以上の理由により2024年のレインボー賞にふさわしい論文であると判断されました。

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies in AY 2024

Olivier AMMOUR-MAYEUR

(AY2024 Selection Committee Chair)

Natsumi IKOMA

(Recommender's Comments)

Yoshie MORIKI

(Recommender's Comments)

The Rainbow Award for Gender and Sexuality Studies was established by Professor Kazuko Tanaka, who founded the Center for Gender Studies (CGS). The award's purpose is to recognize outstanding gender and sexuality-related research in B.A., M.A., or Ph.D. dissertations submitted to the ICU and encourage further development of gender and sexuality studies. Several outstanding papers were nominated for the academic year 2024, from which, Miyu Sasaki's senior thesis, "The Relevance of Sexual Taboo Consciousness and the Issue of Responsibility for Japanese Former Comfort Women" and Saki Yoshimoto's master's thesis, "Monosexism in Japan: Interview with Bi+ Women" were selected.

Miyu Sasaki's thesis challenges the taboo of Japanese Comfort Women after WWII and argues the suppression of Japanese Comfort Women and Japanese conservative sex education are deeply connected. The author successfully incorporates various secondary sources and historical primary sources and reveals how the Japanese government evaded responsibility of compensating postwar Japanese Comfort Women, who have been less visible in society compared to wartime comfort women, by shifting the blame onto them using this new sex education. The author's intention to intertwine the comfort women issue with post-war sex education is controversial, and we

fully appreciate the author's willingness to do so. As such, this thesis is considered highly worthy of the Rainbow Award for AY2024.

Saki Yoshimoto's thesis successfully sheds light on the issues and challenges faced by bisexual individuals living within monosexual social norms. It is one of the few studies that directly addresses monosexuality in Japanese society. The thesis offers rich and detailed analysis of the under-researched topic of bisexuality, both in Japan and globally, drawing on theoretical frameworks and empirical interview data collected from 20 participants. By elucidating monosexism as the primary object of critique, rather than bisexuality itself, the thesis makes a significant theoretical contribution that has the potential to stimulate future research. Furthermore, its critique of partnership and marriage systems in Japan, along with the suggestion of alternative relational frameworks grounded in interviewees' narratives, offers valuable insights for future activism. The study presents a unique and underexplored perspective on monosexism in Japan, particularly with regard to its impact on bisexual women. It also effectively integrates theories of biphobia, bisexual erasure, and monosexism with rich empirical data. Overall, the thesis is clearly written and well articulated.

日本人の性をタブー視する意識と 日本人元慰安婦に対する責任問題の関連性

佐々木心優

本稿では、なぜ日本の性教育が一向に改善されないのかを、第二次世界大戦後の元慰安婦の方々の歴史と、日本政府が彼女たちに補償をしなかったという問題の観点から考察する。

日本の性教育は、性交（セックス）について教えることを控える「歯止め規定」という考え方によって制限されてきた。この考えの根拠は、知らないことをあえて教えると、かえって好奇心や興味から性的な行動を促してしまうかもしれない、というものだ。しかし、正式な教育を受けない学生は、性の知識がないままであり、インターネットやSNSなどで情報を得ることで、間違った知識や偏見を持った認識を身につけてしまうことが多い。その結果、彼らは気づかぬうちに性的な加害者にも被害者にもなってしまう可能性がある。さらに、ジェンダーに基づく偏見は、個人の生活を困難にし、正確でない知識や偏見が、日常生活の中でジェンダー格差を徐々に広げていくことにもつながる。

そのため、日本は人権尊重を基本とした包括的な内容を取り入れ、性教育の目的を根本的に見直す必要がある。ジェンダー格差が小さい国々の中には、50年以上にわたって包括的な性教育を実施しているところもある。これらのプログラムが成功しているのは、質の高い性教育を受けた人が、大人になってより他者に寛容になり、その結果、公平な社会の発展に貢献していることから明らかだ。

性教育の質とジェンダーの不平等には関係性があるにもかかわらず、日本は性教育のカリキュラムを改善・拡大しておらず、「性」というテーマは依然として文化的なタブーとなっている。この現象は、戦後の日本における元慰安婦の歴史と関係があるのかもしれない。研究によると、日本の性教育の初期にあった「純潔教育」という考え方が、元慰安婦に対する間違った認識を広め、戦後の政府が補償を行わなかったという事実を見えにくくする結果につながった。つまり、現在「性」がタブー視されているのは、単にこの話題を嫌がるからというだ

けでなく、日本政府が元慰安婦に何も補償しなかったという歴史的な事実を隠すための意図的な手段となっている可能性も考えられる。

日本社会が元慰安婦の方々を「道徳的に問題のある人たち」として簡単に受け入れてしまったのは、日本の伝統的な国民意識や文化的な価値観に影響されていたことにも原因がある。加えて、世界的に見ても、日本で今なお売春がなくなる主な原因は、元慰安婦問題に対する日本政府の不十分な対応と、売春を容認する日本男性の一般的な考え方にあると言える。

以上のことから、日本で性教育を改善・拡充し、依然として「教えないこと」を中心としている現状を変えるためには、まず元慰安婦の歴史を認識し、その事実をしっかりと受け止めることが非常に重要である。

The Relevance of Sexual Taboo Consciousness in Japan to the Responsibility Issue for Japanese Former Comfort Women

Miyu SASAKI

This paper examines why sex education in Japan has not improved, considering the history of Japanese former comfort women after World War II and the issue of their compensation by the Japanese government.

Sex education in Japan is shaped by the concept of “Hadome Kitei,” which discourages teaching students about sexual intercourse. The rationale behind this approach is the belief that deliberately educating students about topics they are unaware of may, in turn, encourage sexual activity out of curiosity and interest. However, students who receive no formal education on the subject remain ignorant and often acquire false knowledge and biased perceptions due to seeking information through the Internet and social networking sites. Consequently, they may unknowingly become both victims and perpetrators of sexual abuse. Moreover, gender-based biases may make it difficult for individuals to navigate their lives. In other words, inaccurate knowledge and biased perceptions can gradually widen the gender gap in everyday life.

Therefore, Japan needs to rethink the purpose of sex education by incorporating comprehensive content based on respect for human rights. Some countries with low gender disparities have been practicing comprehensive sex education for over 50 years. The success of these programs is evident in the fact that individuals who received high-quality sex education have grown into more tolerant adults, contributing to the development of more equitable societies.

Despite the potential correlation between the quality of sex education and gender inequality, Japan has neither improved nor expanded its sex education curriculum, and the topic of sex remains a cultural taboo. This phenomenon

may be linked to the historical existence of comfort women in Japan after World War II. Research indicates that the inception of Japanese sex education, known as “Jyunketsu Kyoiku,” resulted in the spread of false perceptions about Japan’s former comfort women, which in turn obscured the fact that the postwar government did not compensate them. In other words, the current taboo surrounding sex may not be solely due to a general aversion to the subject but rather a deliberate means of obscuring the historical fact that the Japanese government failed to provide any form of compensation to former comfort women.

Furthermore, this study reveals that the ease with which Japanese society accepted former comfort women as morally corrupt figures was influenced by traditional Japanese identity and cultural values. Additionally, from a global perspective, the continued prevalence of prostitution in Japan can be attributed primarily to the Japanese government’s inadequate response to the former comfort women issue and the prevailing attitude among Japanese men who condone prostitution.

Thus, recognizing and acknowledging the history of Japanese former comfort women is essential to improving and expanding sex education in Japan, which still primarily focuses on what is left untaught.

現代日本におけるモノセクシズム ——日本社会で暮らすバイセクシュアル女性への 聞き取り調査から

吉元咲

本研究は、日本社会を生きるバイセクシュアル女性がモノセクシズムをどのように経験しているのかに着目し、彼女たちが被る不利益の社会的・文化的背景について、インタビュー調査を通じて明らかにすることを目的としたものである。

モノセクシズムとは、モノセクシュアル（1つの性別にのみ惹かれるセクシュアリティ）の方がバイセクシュアルを含む非モノセクシュアルよりも“普通”であることを示唆する規範のことで、これまで「LGB」や「同性愛・両性愛」といった形で同性愛と併記され、焦点を当てられてこなかったバイセクシュアル当事者の経験を理解するうえで重要な視点を提供するとされている¹。

しかし、バイセクシュアル当事者を対象としてモノセクシズムの実態を解明することを試みた研究は、筆者の知る限り日本では行われていない。そもそも日本国内では、バイセクシュアル当事者の経験に焦点を当てた論文自体が非常に限られている。

そこで本研究では、広義のバイセクシュアル（Bi+）に該当する20代～30代前半の女性20名を対象にインタビュー調査を実施し、モノセクシズムが日本社会においてどのように経験され、いかに彼女たちの生に影響を与えているのかを分析した。本研究でバイセクシュアル女性の語りにもみ焦点を当てたのは、非モノセクシュアルであり、かつ女性として生きる／女性とみなされることで、ヘテロセクシュアル男性からのエロティシズム化やレズビアンコミュニティとの軋轢など、特有のアグレッションを経験していることが先行研究によって指摘されているためである。

バイセクシュアル女性たちの語りの分析から、日本社会におけるモノセクシズムは、否定的な言説を通じたバイセクシュアリティの「抹消」としてのみなら

¹ Eisner, S. (2013). *Bi: Notes for a Bisexual Revolution*. Berkeley: Seal Press.

ず、制度的差別としても経験され、また強化されていることが示唆された。具体的には、彼女たちはバイセクシュアリティが「正当でない／存在しないもの」と印象づけられるなか、リスクを冒してカミングアウトをするか、違和感を抱えながらモノセクシュアルに「擬態」するかという二者択一の間で板挟みになっていた。さらに、バイセクシュアルに対する否定的な言説を内面化することで、自身について「十分にバイセクシュアル（もしくはクィア）でない」と感じたり、異性愛者の特権にアクセスできる「比較的生きやすい」存在であると捉えたりするようになり、異性愛社会とクィアコミュニティのどちらにも帰属意識を持ちにくくなっていることが示された。また、そうしたバイセクシュアル女性の周縁化を促すスティグマの生産・強化は、戸籍上同性同士の法律婚を認めない現行の法制度が一因となっていることも示唆された。

ただし、バイセクシュアル女性たちはモノセクシュアルのコミュニティに馴染めないからといって必ずしも孤独に感じているわけではなく、性的アイデンティティの同質性にこだわらない関係性を築くことで自分なりの居場所を形成している場合もあった。また、前述の制度的差別を解消するために同性婚の法制化が必要であることは前提としたうえで、婚姻制度それ自体に疑問を投げかけ、それに代わるような保障のあり方が開かれていくことに期待する姿勢も窺えた。

アカデミアにおいてバイセクシュアルの経験が素通りされていることは、それ自体が「バイセクシュアルの抹消」の1つの例であるといえる。日本ではこれまでバイセクシュアル当事者を対象にした調査が非常に限られており、またモノセクシズムに着目して分析する研究は行われてこなかったため、本研究は日本におけるジェンダー・セクシュアリティ研究に貢献できるという点では意義がある。しかし、日本社会におけるモノセクシズムの実態をより包括的に理解するためには、モノセクシズムとその他の抑圧構造との交差性なども意識しつつ、より多様なバイセクシュアル当事者、そしてモノセクシュアルの人々も対象とし、さらなる質的・量的調査を行う必要があるだろう。

Monosexism in Japan

—Interview with Bi+ Women

Saki YOSHIMOTO

This paper explores how bi+ women in Japanese society experience “monosexism,” a norm that privileges monosexuality (a sexuality defined as attraction to only one gender), and aims to identify the social and cultural context behind the disadvantages they suffer¹.

In other countries, there has been a growing body of research focusing on monosexism to examine oppression specific to bisexual individuals. However, in Japan, research on bisexual experiences is itself very limited. To the author’s knowledge, only three studies have focused on bisexual people’s experiences, and none of them explicitly used the concept of monosexism except for Kim and Nochi², who mentioned it briefly in their conclusion. Therefore, how bisexual people living in Japanese society experience and negotiate with monosexism has not been sufficiently explored.

This study clarifies how monosexism is experienced in Japanese society and how it affects bisexuals’ lives through interviews with 20 bi+ women in their 20s and early 30s. As both non-monosexual and women, bi+ women face unique forms of oppression, such as eroticization by heterosexual men and elimination from the lesbian community. Consequently, this study focuses solely on the narratives of bi+ women rather than analyzing bi+ people collectively.

The analysis of these 20 women’s stories suggests that monosexism in Japanese society is experienced not only as identity erasure through monosexuals’ discourses but also as institutional discrimination. Firstly, this

¹ Eisner, S. (2013). *Bi: Notes for a Bisexual Revolution*. Berkeley: Seal Press.

² Kim, J. and Nochi, M. (2023). Jyosei Bai Sekusharu wo Ikiru: Toujisha Doushi no Katari ai no Shitsu Teki Kentou Kara [Life as Female Bisexual: A Qualitative Study of In-depth Conversations between Female Bisexuals]. *Shitsuteki Shinrigaku Kenkyū*, 22, 296-313.

study shows that the three strategies of bisexual erasure are evident in Japanese society. The analysis also indicates that bi+ women are caught between the two options of coming out at risk or “passing” as monosexuals. Furthermore, internalized negative stereotypes lead bi+ women to feel “not bisexual (or queer) enough” and to develop a self-perception of having access to heterosexual privilege. It is also noted that because of this self-perception, bi+ women seem to have difficulty feeling a sense of belonging to either the heterosexual community or the queer community. Most importantly, this study indicates that the negative stereotypes causing this marginalization of bi+ women are produced and reinforced through institutional discrimination, which denies legal recognition of same-sex marriage, thus forcing bi+ women to give up the possibility of a future with a partner whose legal gender is the same as theirs.

However, the research shows that bi+ women do not necessarily feel isolated because they establish meaningful connections outside their sexual identity. It also emphasizes that, in addition to legalizing same-sex marriage to reduce institutional discrimination toward bi+ women, there is a need for systems that recognize and support diverse relationship types in forms other than marriage.

The fact that bi+ experiences are overlooked in academia is itself an example of bisexual erasure. This study is significant for contributing to gender and sexuality studies in Japan, where research on bisexuality remains very limited, and no studies have extensively analyzed monosexism. Nevertheless, to fully understand monosexism in Japan, further qualitative and quantitative research is necessary, targeting not only various bi+ individuals but also monosexuals, while considering the intersectionality between monosexism and other forms of oppression.

Event Report

Exploring Non-Normative Desires in Art and Literature

Coordinator: Anna TATTON

(Research Institute Assistant, CGS)

On June 29th, 2025, the Center for Gender Studies hosted *Exploring Non-Normative Desires in Art and Literature*, a JICUF-supported symposium that invited international artists and scholars to reflect on how desire—particularly queer and non-normative desire—is represented, challenged, and reimagined through literature and visual media. The event featured a presentation by Spanish poet and novelist Sara Torres on her novel *La Seducción*, a screening of video art by French artist Théophylle DCX, and a participatory workshop led by Sara Torres and facilitated by Cleo Verstrepen on desire, narrative, and audience.

Held across two rooms in the Main Building, the symposium fostered intimate and dynamic exchanges between students, faculty, and members of Tokyo's broader queer cultural networks. Discussions explored the intersections of aesthetics, power, gender, and intimacy, asking: how do we write, visualize, and imagine desire beyond heteronormative constraints?

Dr. Torres's talk illuminated how queer desire can be woven into text, demonstrated through a reading of her own work and an analysis of the frustrated desires evident in letters by lesbian authors. She then invited participants to write their own love letters to an imagined lover, prompting reflection on how desire is expressed through a medium that takes days to reach its recipient. This activity inspired strong audience engagement and received highly positive feedback.

This was followed by two screenings of works by Theophylle Dcx, which

explored the body of an HIV-positive person—someone who, though taking daily medication and having become medically “untraceable,” is still denied the ability to desire. These works questioned how the so-called “infected” body becomes suspect in its expressions of desire.

The event concluded with a Q&A session between the speakers, coordinated by Cleo Verstrepen and Anna Tatton.

Successes & Challenges

A major success was the collaboration between artistic experimentation and academic reflection. All three guests brought distinct approaches that made the event accessible and impactful for participants from diverse backgrounds.

Challenges included managing simultaneous screenings, presentations, and group discussions across two rooms, and addressing multilingual needs (Spanish, French, and English). These were overcome with financial support from CRPS and JICUF which allowed for careful planning, bilingual facilitation, and printed materials.

Community Building at ICU

The symposium created a joyful space for ICU’s queer and feminist community, bringing together students, alumni, faculty, and CGS members. It fostered lasting connections and marked many students’ first experience of a queer academic arts event, which they described as deeply meaningful.

Engagement with Society

The event engaged Tokyo’s wider queer cultural networks, attracting participants from outside ICU and strengthening links between the university and local artists, grassroots organizations, and independent cultural spaces. It helped position ICU as a site for creative and critical queer exchange in Japan.

Personal Growth

Organizing the event strengthened my leadership, multilingual communication, event facilitation, and grant management skills, and built my confidence in curating spaces where academic theory and queer life intersect.

For the guest speakers, presenting their work in a new cultural and academic context informed their ongoing projects. The success of this symposium has also laid the foundation for future collaborative programming at ICU.

2025年度CGS活動報告

春学期

4月1日(火) | 「できることガイドVol.03：ジェンダー・セクシュアリティとキャンパスライフ」発行・配布開始

発行：CGS

冊子デザイン・編集：小西優実 (CGS 研究所助手)

編集協力：浜崎史菜 (CGS 特任助教)

文可依 (CGS 研究所助手)

岡俊一郎 (CGS 研究所助手)

Anna Tatton (CGS 研究所助手)

4月2日(水) | Approaches to Translation and Translators' Visibility: Gender and Border-Crossing

場所：ダイアログハウス2階 203、204会議室

登壇者：Letizia Guarini (法政大学)

Irina Holca (東京外国語大学)

由尾瞳 (早稲田大学)

Juliana Buritica Alzate (CGS 研究員、オックスフォード大学)

4月17日(木) | CGS春の交流会 2025

場所：本館前の芝生

企画運営：島袋海理 (CGS 特任助教)

小西優実 (CGS 研究所助手)

文可依 (CGS 研究所助手)

Anna Tatton (CGS 研究所助手)

谷口歩実 (CGS 研究所助手)

4月24日(木) | 第71回ふわカフェ「大学生らしい見た目って何？」

場所：CGS

世話人：小西優実 (CGS 研究所助手)

谷口歩実 (CGS 研究所助手)

5月10日(土) | 「人種と嫌悪を再考する—中欧のレイシズムと非リベラリズム—」

場所：オンライン・国際会議室

登壇者：Ivan Kalmar (トロント大学)

福田宏 (成城大学)

加藤久子 (國學院大學)

Maciej Witek (ICU)

中井杏奈 (東京外国語大学・ヨーロッパ中央大学)

坂田敦志 (一橋大学)

神原ゆうこ (北九州市立大学)

司会：加藤恵津子 (CGS副センター長)

6月4日(水)～6月14日(土) | 第13回「R-weeks」イベント週間

第13回R-weeks企画運営：

島袋海理 (CGS 特任助教)

小西優実 (CGS 研究所助手)

文可依 (CGS 研究所助手)

Anna Tatton (CGS 研究所助手)

谷口歩実 (CGS 研究所助手)

5/28(水)～6/14(土) | R-Weeksイベント：

CGS ホワイトボードをおすすめ本で埋め尽くそう！

場所：CGS

企画運営：島袋海理 (CGS 特任助教)

6/4(水)～6/14(土) | ふわりんパネルとCGSが選んだおすすめ書籍&

イベント関連書籍展示

場所：図書館1階

企画運営：島袋海理 (CGS 特任助教)

小西優実 (CGS 研究所助手)

文可依 (CGS 研究所助手)

Anna Tatton (CGS 研究所助手)

谷口歩実 (CGS 研究所助手)

協力：ICU図書館

6/4(水) | R-weeks特別講演「台湾の反ジェンダー運動のトランスナショナルな
レトリックにおける時間性と感情」

場所：ダイアログハウス2階 203、204会議室

登壇者：陳有靈 (独立研究者、環太平洋台湾トランスジェンダー研究共同体リードPI)

羅盤針 (ミネソタ大学ツインシティー校人類学博士課程)
通訳：松田英亮 (マニラ日本財団アシスタント・ディレクター)
企画：島袋海理 (CGS 特任助教)
文可依 (CGS 研究所助手)
協力：谷口歩実 (CGS 研究所助手)

6/5 (木) | R-Weeks イベント：Exploring LGBTIQ+ Asylum in Japan

場所：本館 252 教室

登壇者：工藤晴子 (神戸大学)

Diego Garcia Rodriguez (ノッティンガム大学)、活動家

6/6 (金) | 座談会「キャンパスでの育児」

場所：CGS

企画運営：生駒夏美 (CGS 運営委員)

6/10 (火) | ICU Pride Parade～輝く個性～

企画運営：Erika、Amy (ICU 学生)

協力：CGS

6/12 (木) | 第72回ふわカフェ『『好き』っていう気持ちって何?』

場所：CGS

世話人：小西優実 (CGS 研究所助手)

谷口歩実 (CGS 研究所助手)

6/12 (木) | Gender, Sexuality and Asylum

場所：本館 276 教室

登壇：Diego Garcia Rodriguez (ノッティンガム大学)

6月21日 (土) | レインボー・リュニオン

場所：アルムナイハウス

企画運営：島袋海理 (CGS 特任助教)

小西優実 (CGS 研究所助手)

文可依 (CGS 研究所助手)

Anna Tatton (CGS 研究所助手)

谷口歩実 (CGS 研究所助手)

6月29日 (土) | Exploring Non-Normative Desires in Art and Literature

場所：本館 101、102 教室

登壇者：Sara Torres (詩人、作家、研究者)
Théophylle Dcx (アーティスト)
Cleo Verstrepen (翻訳者、研究者、キュレーター)
通訳：Serhat Orta
Yoshiyuki Ishikawa
企画運営：Anna Tatton (CGS 研究所助手)

秋学期

9月25日(木) | CGS 秋の交流会 2025

場所：ERB-1 347 会議室
企画運営：島袋海理 (CGS 特任助教)
小西優実 (CGS 研究所助手)
文可依 (CGS 研究所助手)
谷口歩実 (CGS 研究所助手)

10月2日(木) | 第73回 ふわカフェ「居場所とか、コミュニケーションとか」

場所：CGS
世話人：小西優実 (CGS 研究所助手)
谷口歩実 (CGS 研究所助手)

10月17日(金) | 政治と哲学の分岐点に立つ翻訳

～非自由主義の時代に翻訳はどう民主主義を助けるのか～

場所：国際会議室
登壇者：松葉祥一 (追手門学院大学)
齋藤幸平 (東京大学)
Helary Jean-Christophe (K.K. Doublet 翻訳者)
司会：Olivier Ammour-Mayeur (CGS センター長)
主催：CGS、平和研究所 (PRI)

10月23日(木) | [LGBTQ+ と性の多様性 ～能登半島地震の活動を通して～]

場所：本館 353 教室
登壇者：松中権 (認定NPO 法人グッド・エイジング・エールズ代表、一般社団法人金沢レイン
ボープライド共同代表、一般社団法人NOTOTO. 共同代表)
企画：加藤恵津子 (CGS 副センター長)
※ GES094 「災後の人間・社会・文化」の授業内での講演

10月30日(木) | ハロウィン特別講義「『魔女』とフェミニズム・クィア運動」

場所：ダイアログハウス2階 203、204会議室・Zoomウェビナー

登壇者：円香(現代魔女・アーティスト)

企画運営：島袋海理(CGS特任助教)

谷口歩実(CGS研究所助手)

協力：文可依(CGS研究所助手)

小西優実(CGS研究所助手)

冬学期

**12月17日(水) | CGS公開講義「『性』は人権マター！
～ジェンダー、多様性、DEI～」**

登壇者：田中かず子(元ICU社会学教授、CGS創設者)

場所：本館224教室

企画：加藤恵津子(CGS副センター長)

※GSS101「ジェンダー・セクシュアリティ研究へのアプローチ」授業内での講演

**1月14日(水) | ランチイベント「トランスジェンダーの生を語る困難と希望：
ハルバスタム『クィアな時間と場所』翻訳者とのトーク」**

登壇者：羽生 有希(CGS研究員)

場所：ERB-1 357号室

企画：島袋海理(CGS特任助教)

協力：小西優実(CGS研究所助手)

文可依(CGS研究所助手)

谷口歩実(CGS研究所助手)

1月21日(水) | 第74回 ふわカフェ「ジェンダー・セクシュアリティを学ぶこと」

場所：CGS

世話人：小西優実(CGS研究所助手)

谷口歩実(CGS研究所助手)

2月4日(水) | CGS公開講義「男性学入門」

登壇者：周司あきら(作家)

場所：本館224教室

企画：加藤恵津子(CGS副センター長)

2月5日(木) | CGS公開講義 “How can we think of “transgender”?:
Exploring the subject of trans studies”

登壇者：山田秀頌(東京大学)

場所：T-229教室

企画：島袋海理(CGS特任助教)

※GSS101 “Approaches to Gender and Sexuality” 授業内での講演

2月13日(金) | 第75回 ふわかフェ「他の性にあこがれること」

場所：CGS

世話人：小西優実(CGS研究所助手)

谷口歩実(CGS研究所助手)

2月18日(水) | 緊急イベント：「衆議院選を受けて、いま何を感じていますか？」

場所：CGS

企画運営：島袋海理(CGS特任助教)

文可依(CGS研究所助手)

小西優実(CGS研究所助手)

谷口歩実(CGS研究所助手)

2月25日(水) | GSSメジャー卒論発表会・レインボー賞発表

場所：オスマー図書館 Group Learning Area

CGS公式ウェブサイト「CGS Online」、Instagram、Facebook、Threads、Blueskyでは随時、情報を更新しています。また、CGS ジャーナル『ジェンダー&セクシュアリティ』も「CGS Online」からダウンロードできます。

AY2025 CGS Activity Report

Spring Term

April 1st | Publication and Distribution of “Possibilities Guide Vol.03 Gender Sexuality and Campus Life”

Issued by the Center for Gender Studies

Edited and Designed by Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Work Assisted by

Fumina Hamasaki (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Shunichiro Oka (CGS Research Institute Assistant)

Anna Tatton (CGS Research Institute Assistant)

April 2nd | Approaches to Translation and Translators' Visibility: Gender and Border-Crossing

Venue: Dialogue House, 2nd Floor, Conference Rooms 203 & 204

Speakers: Letizia Guarini (Hosei University)

Irina Holca (Tokyo University of Foreign Studies)

Hitomi Yoshio (Waseda University)

Juliana Buritica Alzate (CGS Researcher, University of Oxford)

April 17th | CGS Spring Gathering 2025

Venue: Lawn Area in Front of Honkan

Coordinator: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Anna Tatton (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

April 24th | The 71st Fuwa Café:

“What’s a university student ‘supposed’ to look like?”

Venue: CGS

Coordinators: Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

May 10th | **“Rethinking Race and Resentment:
Racism and Illiberalism in Central Europe”**

Venue: Online / International Conference Room

Speakers: Ivan Kalmar (University of Toronto)

Hiroshi Fukuda (Seijo University)

Hisako Kato (Kokugakuin University)

Maciej Witek (ICU)

Anna Nakai (Tokyo University of Foreign Studies/Central European University)

Atsushi Sakata (Hitotsubashi University)

Yuko Kambara (University of Kitakyushu)

Moderator: Etsuko Kato (CGS Vice Director)

June 4th – June 14th | **13th R-Weeks Event Period**

Planning and Organization for the 13th R-Weeks:

Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Anna Tatton (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

May 28th–June 14th | **R-Weeks Event: “Let’s Fill the CGS Whiteboard with Recommended Books!”**

Venue: CGS

Coordinator: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

June 4th–June 14th | **Exhibition of Fuwa-rin Panels and CGS-Selected Recommended Books & Event-Related Materials**

Venue: Library, 1st Floor

Coordinators: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Anna Tatton (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

Cooperation: ICU Library

June 4th | **R-Weeks Special Lecture: “Temporality and Affect in the Transnational Rhetoric of Anti-Gender Movements in Taiwan”**

Venue: Dialogue House, 2nd Floor, Conference Rooms 203 & 204

Speakers: Yo-Ling Chen (Independent scholar and Lead-PI of the Transpacific Taiwan Transgender Studies Research Collective)

Pan-Chen Lo (PhD Student in Anthropology, University of Minnesota, Twin Cities)

Interpreter: Eisuke Matsuda (Assistant Director, Japan Foundation Manila)

Coordinator: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Assistance: Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

June 5th | R-Weeks Event: Exploring LGBTIQ+ Asylum in Japan

Venue: H-252

Speakers: Haruko Kudo (Kobe University),

Diego Garcia Rodriguez (University of Nottingham), Activists

June 6th | Roundtable Discussion: "Child-Rearing on Campus"

Venue: CGS

Coordinator: Natsumi Ikoma (CGS Steering Committee Member)

June 10th | ICU Pride Parade: "Let Your Color Shine"

Organizers: Erika, Amy (ICU Students)

Cooperation: CGS

June 12th | The 72nd Fuwa Café: "What is this feeling called 'like/love'?"

Venue: CGS

Coordinators: Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

June 12th | Gender, Sexuality and Asylum

Venue: H-276

Speaker: Diego Garcia Rodriguez (University of Nottingham)

June 21st | Rainbow Reunion

Venue: Alumni House

Coordinators: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Anna Tatton (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

June 29th | Exploring Non-Normative Desires in Art and Literature

Venue: H-101,102

Speakers: Sara Torres (Poet, Writer, Researcher)

Théophylle Dcx (Artist)

Cleo Verstrepren (Translator, Researcher, Curator)

Interpreters: Serhat Orta

Yoshiyuki Ishikawa

Coordinator: Anna Tatton (CGS Research Institute Assistant)

Autumn Term

September 25th | CGS Fall Gathering 2025

Venue: ERB-1 Conference Room 347

Coordinators: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

October 2nd | The 73rd Fuwa Café: “A Space to Talk, A Space to Hear”

Venue: CGS

Coordinators: Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

October 17th | Translation at the Crossroads of Politics and Philosophy:
How Can Translation Support Democracy in an Illiberal Age?

Venue: International Conference Room

Speakers: Shoichi Matsuba (Otemon Gakuin University)

Kohei Saito (The University of Tokyo)

Helary Jean-Christophe (Translator, K.K. Doublet)

Moderator: Olivier Ammour-Mayeur (Director, CGS)

Organizers: CGS, Peace Research Institute (PRI)

October 23rd | “LGBTQ+ and Sexual Diversity: Through Relief Activities
Following the Noto Peninsula Earthquake”

Venue: H-353

Speaker: Gon Matsunaka (Representative Director)

Certified NPO Good Aging Yells; Co-Representative, Kanazawa Rainbow
Pride; Co-Representative, NOTOTO.)
Coordinator: Etsuko Kato (CGS Vice Director)
*Lecture delivered as part of the course GES094 “Human, Society and Culture in
Post-disaster Era”

October 30th | **Halloween Special Lecture:**
“Witches and the Feminist/Queer Movement”

Venue: Dialogue House, 2nd Floor, Conference Rooms 203 & 204 / Zoom Webinar
Speaker: Madoka (Contemporary Witch, Artist)
Coordinators: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)
Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)
Assistance: Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)
Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Winter Term

December 17th | **CGS Public Lecture: “Gender/Sexuality Are Human Rights
Matters!: Gender, Diversity and DEI”**

Speaker: Kazuko Tanaka (Former Professor of Sociology at ICU, Founder of CGS)
Venue: H-224 Classroom
Coordinator: Etsuko Kato (CGS Vice Director)
*Lecture delivered as part of the course GSS101 “Approaches to Gender and
Sexuality Studies”

January 14th | **Lunch Event: “The Difficulties and Hopes of Talking About
Transgender Lives: A Talk with the Translator of Halberstam’s
‘In a Queer Time and Place’”**

Speaker: Yuki Hanyu (CGS Researcher)
Venue: ERB-1 Room 357
Coordinator: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)
Assistance: Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)
Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)
Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

January 21st | **The 74th Fuwa Café: “Learning about Gender and Sexuality”**

Venue: CGS

Facilitators: Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

February 4th | **CGS Public Lecture: “Introduction to Men’s Studies”**

Speaker: Akira Shuji (Writer)

Venue: H-224

Coordinator: Etsuko Kato (CGS Vice Director)

February 5th | **CGS Public Lecture: “How Can We Think of ‘Transgender’?:
Exploring the Subject of Trans Studies”**

Speaker: Hidenobu Yamada (The University of Tokyo)

Venue: T-229

Coordinator: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

*Lecture delivered as part of the course GSS101 “Approaches to Gender and Sexuality”

February 13th | **The 75th Fuwa Café: “Imagining Being Other Genders”**

Venue: CGS

Facilitators: Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

February 18th | **Emergency Event: “What are Your Thoughts Following the
House of Representatives Election?”**

Venue: CGS

Coordinators: Kairi Shimabukuro (CGS Assistant Professor by Special Appointment)

Yuumi Konishi (CGS Research Institute Assistant)

Chloe Wen (CGS Research Institute Assistant)

Ayumi Taniguchi (CGS Research Institute Assistant)

February 25th | **GSS Major Thesis Presentation Day • Announcement of
Rainbow Awards**

Venue: Othmer Library Group Learning Area

Regular updates may be viewed on “CGS Online”, the official CGS website, Instagram, Facebook, Threads, and Bluesky. The CGS journals may also be downloaded from the website.

執筆者紹介 Author Profile

三上純 | 関西大学、日本学術振興会特別研究員PD

専門：ジェンダー研究、体育・スポーツ社会学

Jun MIKAMI | Kansai University / JSPS Postdoctoral Research Fellow

Specialization: Gender Studies, Sociology of Sport and Physical Education

内田賢 | 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

専門分野：フェミニズム、クィア・スタディーズ、災害社会学

Suguru UCHIDA | Graduate School of Social Sciences,
Hitotsubashi University

Specialization: Feminism, Queer studies, Sociology of Disaster

五十嵐舞 | 新潟県立大学

専門分野：フェミニズム・クィア研究、アメリカ文学

IGARASHI Mai | University of Niigata Prefecture

Specialization: Feminist and Queer Studies, American Literature

国際基督教大学ジェンダー研究センター (CGS) 所員 Members of the Center for Gender Studies, ICU

2026年3月現在
as of March, 2026

オリビエ・アムール＝マヤール (センター長、運営委員) *
Olivier AMMOUR-MAYEUR (Center Director, Steering Committee Member)*
Women's Studies, French Literature, Film Theory

新垣修
Osamu ARAKAKI
International Law

クリストファー・ボンディー
Christopher BONDY
Sociology

レベッカ・エクハウス
Rebekka ECKHAUS
Bi/multilingualism, Learner Autonomy, Blended Learning

ロバート・エスキルドセン
Robert ESKILDSEN
Modern Japanese History

マット・ギラン
Matthew A. GILLAN
Music, Ethnomusicology

生駒夏美 (運営委員) *
Natsumi IKOMA (Steering Committee Member)*
Contemporary English Literature, Representation of the Body in British and Japanese Literature

伊藤亜紀
Aki ITO
Storia dell'Arte Italiana, Storia del Costume Italiano

加藤恵津子 (副センター長、運営委員) *

Etsuko KATO (Vice Director, Steering Committee Member)*

Cultural Anthropology, Mobility Studies

菊池秀明

Hideaki KIKUCHI

The Social History of China in the 17th-19th Centuries

アレン・キム

Allen KIM

Sociology

李勝勲

Seunghun LEE

Linguistics

アンドリア・ロレンツェン

Andria LORENTZEN

Education, English

松村朝雄

Tomoo MATSUMURA

Mathematics

峰島知芳 (運営委員)

Chika MINEJIMA (Steering Committee Member)

Atmospheric Chemistry, Environmental Dynamic Analysis

森木美恵

Yoshie MORIKI

Cultural Anthropology, Demography

羅一等

Ildeung NA

Sociology

那須敬

Kei NASU

History of Religion, Culture and Politics in Early Modern England

西村幹子

Mikiko NISHIMURA

Sociology of Education, International Cooperation in Educational Development

クリストファー・サイモンズ

Christopher E. J. SIMONS

English Literature

園山千里 (運営委員)

Senri SONOYAMA (Steering Committee Member)

Classical Japanese Literature, Japanese Studies in Poland and Other European Countries

高松香奈 (運営委員) *

Kana TAKAMATSU (Steering Committee Member) *

Politics, International Relations

田村未希

Miki TAMURA

Philosophy

椿田有希子

Yukiko TSUBAKIDA

Japanese History

王牧芸

Mu-Yun WANG

Biology

山本妙子

Taeko YAMAMOTO

European History (French History, Early Modern France, Social History, Urban History, Christianity)

島袋海理 (運営委員) *

Kairi SHIMABUKURO (Steering Committee Member) *

Sociology of Education, Gender and Sexuality Studies

* 編集委員

Editorial Board Members

ICUジェンダー研究所ジャーナル

『ジェンダー&セクシュアリティ』

第22号投稿規程

2026年3月現在

1) ジャーナル概要

『ジェンダー&セクシュアリティ』は、国際基督教大学ジェンダー研究センターが年一回発行するジェンダー・セクシュアリティ研究分野の学術誌である。研究部門では、ジェンダー・セクシュアリティ研究における実証的研究や理論的考察に関する論文（綿密な学術的研究と、独創的な考察から成る、学術界に広く貢献しうる論考）、研究ノート（学術的研究・考察の途上にあつて、学術界に広く貢献しうる論考）を掲載する。フィールド部門では、活動家によるケーススタディ、組織・国内・国際レベルにおけるジェンダー関連活動に関するフィールドレポート（様々な領域の専門家、および研究者が、日々の実践の中から現状の側面を報告するもの）を掲載する。書評部門では、ジェンダー・セクシュアリティに関連する近刊書の書評を掲載する。

2) 第22号発行日：2027年3月

3) 第22号論文投稿締切：2026年7月31日 23：59 (JST)

4) 原稿提出先

Eメール：cgs-edit-mygroup@icu.ac.jp

5) 応募要綱

a) 原稿

- ・本誌に投稿される原稿は、全文あるいは主要部分において未発表であり、他誌へ投稿されていないものとする。
- ・使用言語は日本語または英語に限る。
- ・原稿の様式は、Publication Manual of the American Psychological Association（2020年発行第7版）の様式に従うこと。様式が異なる場合は、内容の如何に関わらず受理しない場合がある。
- ・第一言語でない言語を使用して論文および要旨を執筆する場合は、投稿前に必ずネイティブ・チェックを通すこと。書かれた論文および要旨に文法的な問題が見られるなど不備が目立つ場合は、その理由により不採用になる場合がある。
- ・姓名・所属・専門分野・Eメール・住所・電話は別紙に記載する（姓名・所属・専門分野は、日本語と英語で記載すること）。審査過程における匿名性を守るため、原稿および原稿ファイル名には執筆者が特定できる形で氏名を記載しないこと。
- ・原稿料の支払い、掲載料の徴収は行なわない。

- ・本誌が国際的に発表される学術誌であることを踏まえたうえで原稿を執筆すること。
- ・本規定に沿わない原稿は、改訂を求めて返却されることがある。

a-1) 研究部門（研究論文・研究ノート）

- ・研究論文は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で16,000 – 20,000字、英語の場合は6,500 – 8,500 wordsの長さとする。
- ・研究ノートは、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字以内、英語で5,000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文として投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、研究ノートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は研究論文に準ずる。

a-2) フィールド部門（フィールドレポート）

- ・原稿は、図表、図版、参考文献および注なども含めて日本語で12,000字、英語で5,000 words以内の長さとする。
- ・タイトルは日本語で最長40字、英語は最長20 wordsとする。簡潔明瞭で、主要なトピックを明示したものであること。
- ・日本語/英語両言語による要旨および5つのキーワードを別紙にて添付する（日本語は800字以内、英語は500 words以内）。
- ・研究論文・研究ノートとして投稿されたものに対し、査読の結果などを踏まえ、フィールドレポートとしての掲載を認める場合がある。その場合の文字数の上限は、研究論文・研究ノートに準ずる。

b) 図表および図版

- ・図表は別紙で添付し、本文内に取り込まないこと。
- ・図版は直接印刷に耐える画質のものを添付すること。
- ・本文中における図表・図版のおおよその位置を原稿上に示すこと。
- ・画像やイラスト、図表など著作権が著者にはないものについては、署名された掲載使用の許可書を同時に提出すること。

c) 提出原稿

- ・原稿は、電子ファイルでEメール (cgs-edit-mygroup@icu.ac.jp) に添付して提出する。
- ・電子ファイルの保存形式
 - できる限りMicrosoft Word形式（ファイル名.doc、ファイル名.docx）で作成したものを提出すること。
 - Microsoft Word形式でのファイル保存が困難である場合は、Rich Text形式（ファイル名.rtf）、またはプレーンテキスト形式（ファイル名.txt）で保存したものを提出すること。

- 上記以外の形式、特に紙媒体から読み込んだ画像データによる本文及び要旨の提出は認めない。

6) 校正

校正用原稿が執筆者に送付された場合、校正のうえ提出期限内に返送すること。その後、文法、句読法などの形式に関する微修正を、編集委員会の権限で行うことがある。

7) 審査過程

投稿原稿は編集委員会が指名する審査者によって審査される。審査では独自性、学術性、論旨の明快さ、重要性および主題のジェンダー・セクシュアリティ研究に対する貢献度が考慮される。原稿の改稿が求められる場合、審査意見および編集コメントが執筆者に伝えられる。投稿の受理・不受理の最終判断は編集委員会が下すものとする。

8) 著作権

投稿を受理された論文の著作権は、他の取り決めが特別になされない限り、国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会が保有するものとする。自己の論文および資料の複製権および使用権に関して、執筆者に対する制限は一切なされないものとする。

9) 原稿の複写

原稿が掲載された執筆者には3冊（執筆者が複数いる場合は5冊まで）の該当誌を贈呈する。なお、それ以上の部数については別途ジェンダー研究センターに注文することができる。

当規定は予告なく改定されることがある。

The Journal of the Center for Gender Studies, ICU

Gender and Sexuality

Journal Regulations for Vol. 22

as of March, 2026

1) Journal Overview

Gender and Sexuality is an academic journal on the study of gender and sexuality, published by the Center for Gender Studies at the International Christian University. The journal's research section shall consist of research papers on empirical investigations, theoretical discussions on gender and sexuality studies ⁽¹⁾, and research notes ⁽²⁾. The field section shall feature case studies by activists, and field reports ⁽³⁾ concerning gender-related activities at institutional, domestic, and international levels. The final book review section shall contain reviews on upcoming books pertaining to gender and sexuality.

*¹ Research papers should be based on thorough academic research, contain original and creative viewpoints, and contribute to a wider academic field.

*² Research notes should contain discussions that are still in progress but show their potential to contribute to a wider academic field.

*³ Field reports should report on the author's daily practice, focusing on one aspect of the field being studied.

2) Publication Date of Volume 22: March, 2027

3) Manuscript Submission Deadline for Volume 22: July 31, 2026 11:59 p.m. (JST)

4) E-mail Address for Manuscript Submissions: cgs-edit-mygroup@icu.ac.jp

5) Rules for Application

a) Manuscripts

- Manuscripts submitted to this journal must be previously unpublished, in full or in part.
- Only Japanese or English manuscripts shall be accepted.
- Manuscript format must be in accordance with the Publication Manual of the American Psychological Association (7th Edition, 2020). Manuscripts submitted in other formats may be rejected regardless of their contents and their scholarly worth.
- Manuscripts (papers or summaries) that are not in the author's native language

must be proofread by a native speaker of that language. Manuscripts with obvious inadequacies such as grammatical errors shall be rejected.

- The author's name, affiliation, specialization, e-mail address, postal address and telephone number should be written on a separate title page. Name, affiliation and specialization should be indicated in both English and Japanese. To ensure anonymity during the screening process, the author's name should not appear in the text or document file names.
- There shall be no payment involved for manuscripts or for insertion.
- Manuscripts should be written in a style appropriate for an internationally-circulated academic journal.
- Manuscripts that do not conform to these guidelines may be returned with a request for revision.

a-1) Research Section

- Research papers should be between 16,000 to 20,000 Japanese characters or 6,500 to 8,500 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Research notes should be less than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- Titles should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper may be accepted as a research note, depending on the results of the referee reading. The length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers.

a-2) Field Section

- Manuscripts should be no longer than 12,000 Japanese characters or 5,000 English words in length, including figures, graphic images, references, and footnotes.
- The title should be short, simple, and no more than 40 Japanese characters or 20 English words in length. It should also preferably address the main topic.
- Two abstracts, one in English (no more than 500 words) and one in Japanese (no more than 800 Japanese characters), should be attached on separate sheets with a list of five keywords in both English and Japanese.
- A manuscript submitted as a research paper or research note may be accepted as a field report, depending on the results of the referee reading. The

length of such manuscripts may conform to the regulations for research papers or research notes.

b) Figures and Graphic Images

- Figures should be attached on a separate sheet. Do not include them in the text.
- Graphic images should also be attached on a separate sheet, and should be of a quality high enough to resist degradation during printing.
- The approximate position of the figure/image in the document should be indicated.

c) Manuscript Submission

- Manuscripts should be submitted as an e-mail file attachment to cgs-edit-mygroup@icu.ac.jp.
- The digital copy should preferably be submitted in MSWord (filename .doc, filename.docx) format. Files may also be submitted in Rich Text format (filename.rtf) or Plain Text format (filename.txt).
- Files in formats other than those listed above or scanned copies of images or text, shall not be accepted.

6) Revisions

If a manuscript is returned to the author for revision, the manuscript should be revised and sent back by the specified date. Note that slight modifications (grammar, spelling, phrasing) may be carried out at the discretion of the editorial committee.

7) Screening Process

Submitted manuscripts shall be screened and chosen by reviewers designated by the editorial committee. Factors for selection include originality, scholarlyness, clarity of argument, importance, and the degree of contribution that the manuscript offers for the study of gender and sexuality. In the event that a revision of the manuscript is required, opinions and comments by the editorial committee shall be sent to the author. The final decision for accepting or rejecting an application rests in the hands of the editorial committee.

8) Copyright

Unless a special prior arrangement has been made, the copyright of an accepted manuscript shall belong to the Editorial Committee of the ICU Center for Gender Studies. No restrictions shall be placed upon the author regarding reproduction

rights or usage rights of the author's own manuscript.

9) Journal Copies

Three copies of the completed journal (or five in the case of multiple authors) shall be sent to the author of the accepted manuscript. Additional copies may be ordered separately.

Note that these guidelines may be revised without prior notice.

編集後記

加藤恵津子（編集長）

ここに第21号をお届けできることを嬉しく存じます。ご寄稿くださった皆様、査読をお引き受けくださった皆様に心より感謝申し上げます。読者の皆様に、本年度の記事が洞察と示唆に富み、社会におけるジェンダーとセクシュアリティについての理解を深め、楽しんでいただけるものと信じております。本号の編集・発行に携わったCGSの関係者の皆様に感謝いたします。

Postscript from the Editor in Chief

Etsuko KATO

It is a great pleasure to present Volume 21 of *Gender and Sexuality*. We appreciate those that submitted contributions to the issue, as well as those who provided peer review. We trust that you will find this year's articles insightful, thought-provoking, and extend your understanding of gender and sexuality in society. Thank you to all those at CGS who have been involved in the editing and publication of this volume.



Gender and Sexuality Vol.21
Journal of the Center for Gender Studies, International Christian University

Printed and Published on March 31, 2026

Editor International Christian University
Center for Gender Studies Editorial Committee (in alphabetical order: Olivier AMMOUR-
MAYEUR, Natsumi IKOMA, Etsuko KATO, Kana TAKAMATSU), Kairi SHIMABUKURO
(Assistant Professor by Special Appointment, CGS), Yuumi KONISHI (Research Institute
Assistant, CGS), Ayumi TANIGUCHI (Research Institute Assistant, CGS)

Publisher Center for Gender Studies
International Christian University
ERB 301, 3-10-2 Osawa, Mitaka city, Tokyo 181-8585 JAPAN
Email: cgs@icu.ac.jp
Website: <https://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

Printing Hakuhousha Co.,Ltd.

© 2026 by Center for Gender Studies, Japan.
All rights reserved.

国際基督教大学ジェンダー研究センタージャーナル
『ジェンダー&セクシュアリティ』第21号

2026年3月31日 印刷・発行

編集 国際基督教大学ジェンダー研究センター編集委員会 (アルファベット順: オリヴィエ・アムール=マヤール、生駒夏美、加藤恵津子、高松香奈)、島袋海理 (CGS 特任助教)、小西優美 (CGS 研究所助手)、谷口歩実 (CGS 研究所助手)

発行 国際基督教大学ジェンダー研究センター
〒181-8585 東京都三鷹市大沢 3-10-2 ERB 301
Email: cgs@icu.ac.jp
Website: <https://subsite.icu.ac.jp/cgs/>

印刷 株式会社 白峰社

著作権は論文執筆者および当研究センターに所属し、著作権法上の例外を除き、許可のない転載はできません。

